

プリンセスコネクト！Re:転生カリバーさん、悪夢に泣く（仮）

ジュンチェ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生したらプリコネ世界で、仮面ライダーカリバーで、主人公たちとの敵対組織が就職先とかどうして……。そして、気がついたら、宴おばさんの一番弟子にされてました……。なんでさあぁ！

おまけにギルドの立て直しとか嘘でしょ（白眼）

とりあえず、原作開始前だけどアニメ最終回まで無事過ごすのが当面の目標になる模様。

※作者はプリコネエアプなので、生暖かい目でみてくださいませ。

※転生者複数

※タイトルはあくまで仮

目次

序章 転生、王宮騎士団へようこそ！

転生先が敵サイドってあんまりじゃない？その1 | 1

転生先が敵サイドってあんまりじゃない？その2 | 9

転生早々、キヤルちゃんに殺されるかけるのはご褒美ではない。

(真顔) | 18

キヤルちゃんからの好感度がマイナススタートっておかしくない

? (どの口g…) | 27

仮・公務員カリバーさん。(尚、早々ににふしんしや認定。)

34

敵、現る。(待つて、お前作品違うだろ!?) その1 | 43

敵、現る。(待つて、お前作品違うだろ!?) その2 | 54

転生カリバーさん、別にロリコンではない(きつと疲れてるのよ)

63

新しい職場、やばくない？(セキュリティがガバすぎる件)

71

うん、説得とか無理い(血涙) | 79

サレンディア救護院に行こう！(唐突) | 88

転生カリバーさん、死す(窒息) | 96

羽ばたく不死鳥 | 106

転生カリバーさん、蘇生する(リスポーン途中) | 112

転生カリバーさん、蘇生する(スリスリの変態) | 120

転生カリバーさんと過ぎた力 その1 | 128

転生カリバーさんと過ぎた力 その2 | 138

転生カリバーさんと過ぎた力 その3 | 145

転生カリバーさんと過ぎた力 その4 | 153

転生カリバーさんと再会の王女(真) | 163

転生カリバーさんとマジで真つ黒でヤベー奴 その1 | 175

転生カリバーさんとマジで真つ黒でヤベー奴 その2 | 181

転生カリバーさんとマジで真つ黒でヤベー奴。 その3 | 189

転生カリバーさんとマジで真つ黒でヤベー奴。 その4 | 197

颯爽!登場!転生セイバーさん、悪夢をゆく! (は?) その1 | 208

颯爽!登場!転生セイバーさん、悪夢をゆく! (は?) その2 | 220

颯爽!登場!転生セイバーさん、悪夢をゆく! (は?) その3 | 232

颯爽!登場!転生セイバーさん、悪夢をゆく! (は?) その4 | 241

颯爽!登場!転生セイバーさん、悪夢をゆく! (は?) その5 | 251

転生 ■■■さん、追憶の夢 | 259

転生カリバーさんとリリカルなお願い? | 268

怪我人に子守とか過酷すぎない? (白眼) | 276

灯る暗闇 | 286

罪と罰と...? | 294

明日を夢みて | 301

1章 波乱万丈!美食殿編!! | 308

結成、美食殿!...でも前途多難! (困惑) I | 314

結成、美食殿!...でも、前途多難! (困惑) II | 314

結成、美食殿！	でも、前途多難…!?	(困惑)	Ⅲ	321
転生カリバーさんと忍び寄る影	I	—	—	328
転生カリバーさんと忍び寄る影	Ⅱ	—	—	335
転生カリバーさんと忍び寄る影	Ⅲ	—	—	341

序章 転生、王宮騎士団へようこそ！

転生先が敵サイドってあんまりじゃない？その1

…プリンセスコネクト！ Re：Dive 略してプリコネR。

異世界ファンタジーものと見せかけて、実はバーチャルゲームの世界だったというアレ。僕の前世では『最ママ』を探す赤ちゃん（年齢不詳）たちが多くのユーザーを占めるとかいうが、まあ人気ソシヤゲの例に洩れず幼女から成人女性まで美人が多いのは『実感』出来る。アニメを見ただけでゲーム自体はついに未プレイだったが、ネタバレやら何やらで美食殿やらなかよし部とか姉を名乗るヤベーやつとかふわっと知っている。

さて。『実感』…というのは、そう今自分がいる世界がそのプリコネの世界だならだ。俗に言う転生というやつだろう。

…カリカリカリカリ

あと転生特典もついてきた。仮面ライダーセイバーの闇黒剣月闇にジャアクトドラゴンをはじめとしたワンダーライドブック数冊。要は仮面ライダーカリバーへの変身セットと追加武装といったところ。残念ながら、通貨やその他衣食住の類は無かったが…

…カリカリカリカリカリ

幸いなことに、職はすぐに見つかった。

見つかりはした…そこが、また新しい問題でもある。

「ふう…」

溜息をついて執務机に羽ペンを置いて書類を投げ出した。

こなしても、こなしても、決して減らない書類の山。いつまで経っても同じ作業の繰り返しに流石にうんざりとしてくる。ギルド団員の各々から備品の要望や、庶民からのモンスター討伐依頼に加え、城の修繕やら何やら… 一応、タイプライターとパソコンをハイブリッドしたような魔導アイテムとかもあるが、残念ながら今回は役に立たない。

そして、自分はこれらの仕事をカリバーに変身しながら当たっている……理由は簡単。

「…！」

—ギャンツ!!

咄嗟にデスクに立て掛けていた闇黒剣月闇を手にとり、いきなり背後から脳天目掛けて振り下ろされた大剣をスレスレのところを防ぐ。

鈍く轟く刃の音。やがて、ゆらゆらと薄暗い執務室の景色がとけるように不敵な笑みを浮かべた襲撃者の顔が現れて…思わず大きく溜息をついた。

「今更、こんな雑な隠密魔法で誤魔化せると思ってたんですか。…『クリス師匠』？」

「ほう、言うようになったじゃないか、副団長補佐…いや、『我が弟子』？」

クリステイナー・モーガン。ランドソルを護る王宮騎士団【NIGHT MARE】の副団長であり……僕の師匠。なんですか。

ご察しかもしれないが、今の職場は王宮騎士団…則ち、原作主人公

ら美食殿と敵対する側の傘下である。…なんでさ。

ふむ、これでダークライダーとかどう見ても主人公たちの敵にならざらえないな…これは。 ……なんでさ。

— 誰か助けてくれ

★ ★ ★ ★ ★

転生前、別にありふれた社会人（事務職）だった僕…25歳。

家族は居るが、彼女はいない…気ままに仮面ライダーといった特撮作品を鑑賞したり、たまには関連商品を購入したりして親をはじめとした身内から嫌味を時々言われるくらいの生活をしていただけの一般人だ。まあ、嫌味くらいで数少ない趣味を辞めるつもりはない。趣味にあてる資金だって自分で稼いでるし、生活費も入れてる…文句は言わせない。

そんな僕は今日も今日とて、鼻屑にしている電気屋へ。いつからか、模型から本に果ては酒類まで置くようになって最早、電気屋とは何だと問いたくなる某・チエーン店で購入したのは闇黒剣月闇やジャアクドラゴンワンダーライドブックセットの玩具：要は仮面ライダーカリバースットだ。基本、模型しか買わない僕だがこう闇のヒーローというか、暗黒面の戦士という肩書きに弱くつい手が伸びてしまった…。そして、顔馴染みの店員さんに『お子さんへのプレゼントですか?』とニコニコと聞かれ、思わず変な返事をしてしまったがために、勘違いから綺麗にラッピングされてしまうカリバースット。やめてくれたまえよ、その言葉はこの歳になると胸に刺さる…。

そして、思わぬ痛みと高揚感を抱えながら乗った帰りのバス…

——そして、僕の前世の記憶はここで途切れている。

「…」

…おい ……おい！

「…？ ……っ！」

しまった、寝過ぎしたか！ 覚醒した意識で事態を察知し跳ね起きた…って おや？

「君、聞いているのか！ ギルドの入隊試験はここから先まつすぐだ。早く行きたまえ！」

え？ 何の話…？ というか、西洋の騎士甲冑のコスプレ……すげえ完成度高いな。そんな兄ちゃんが僕に強く話しかけてくる。あれ、コミケってまだ時期早いような？ というより、目が覚めたらまさかのコミケ会場ってなんでさ。

「…あの、ここは一体？」

「は？ 寝ぼけているのかね？ 貴公、その珍しい紫の甲冑から察するに王宮騎士団の入隊試験に参加しに来たのだろう。こんなところをウロウロしては手続きが間に合わなくなるぞ…！」

…？ ……??

ギルド？ それに、紫の甲冑って…そんなカリバーじやあるまいし……

「…」

ふと、右手を見た…握られているのは闇黒剣月闇。玩具のような小さいそれではなく、撮影とかに使われるようなソレで本物のような重量と質量がしつかりズシリと来る…。そして、腕…見覚えのある紫色の甲冑。ひたひたと顔を触れば、確かにある堅い兜の感覚…ん？

違和感が絶大になり、暗黒剣暗闇を鏡代わりに自分の顔を見れば
…

「……………は？」

仮面ライダーカリバー ジャアクドラゴンがそこに。
わ、すっげえ。本物のスーツみたい。(放心)

「何を呆けているのかね？ さあ！ さあ！」

「あつ ちょ…!?!」

と、ボケツとしていら騎士サンに押されて城らしき建物に叩き出されてしまった…。え？ 城？

「ああ、そうだ貴公！」

え、騎士サン。まだ何か御用で…？

「中々のクセが強い面々が多い職場だが、給与も働きがいも悪くはない場所だ。縁があれば、共にランドソルのために共に剣をとる仲間としてまた会おう。貴公の健闘を祈っていると！」

……………めっちゃ良い人だ。



ギルド王宮騎士団が栄華を誇ったのはかつての話。

一般隊員から上層部までそれなりの名家や血筋の高貴な出身者が大半を占める上、それが暗黙の加入前提条件だったが故にいずれ瘦せ細っていくのは自明の理だったろう。狭い門の上に待遇などに不満を持つ者は実家に帰るなり、そこそこの腕のがたつ者も他ギルドに移籍したりという事態が後を絶たない。こんな時に肝心の騎士団長も憂いはすれど何の対策も打てずにいた…

そんなあまりの惨状にランドソル王家はついに重い腰をあげ苦渋の決断… 暗黙のルールを打ち破りに出た。

大々的な身分・種族を問わない団員募集である。はっきり言えば王家でも苦々しい顔する輩もいたが、それだけ王宮騎士団の弱体化は疎かに出来ない問題だったため黙らざるえない。

せめて、焼け石に水でも…と淡い期待を持った皆々だが

「ふん、つまらんな。」

淡い希望は王宮騎士団・副団長クリスティーナ、発案者である彼女御自ら粉碎するとは…

大剣を担ぎ、鼻を鳴らす彼女の足元には立ち向かっていき蹴散らされた哀れな挑戦者たちの山。壁や柱にも何処そのあれくれ者な浪人と知れぬ者たちが叩きつけられ、団員たちが荷車に積んで外へ運び出していく…

これには騎士団長ジュンをはじめとした試験官たちも頭を抱える。この主旨理解していな…いや、理解してひっくり返すとか毎度のことながら勘弁してほしい。

「やれやれ、これでは暇つぶしにもならん…次！」

余計な仕事増やさないで欲しいなど思いつつ、団員が後ろ振り向く……すると

「試験会場とやらは…ここか？」

現れた紫の甲冑に息を呑む。

醸し出す闇のオーラに明らかにランドソルの鍛冶場職人の業ではない異質な鉄仮面に一角の鎧。仮面ライダーカリバー ジャアクトラゴンがふらりと現れる。

「…ほう？」

それに対し、クリステイナははじめてニヤリと口角をあげた…

わかるとも…何よりも大好きな強敵の臭いだ。

転生先が敵サイドってあんまりじゃない？その2

「…どうして私が！」

悪態をつきながら黒猫のような獣人族の少女がランドソル城から出てくるなり、試験会場の城門前まで向かう。そう彼女はキヤル…本来の物語でヒロインのひとりを担当少女であるが、その立ち位置はこの場で語るにはあまりに複雑である。とりあえず、彼女は『陛下』より試験会場に面白い気配があるから見てこいと小間使いなり使い魔にでも足りるような役割を言いつけられた。いくら敬愛するお方の命令とはいえ不服だったが、顔に表す前に氷のような視線を向けられそそくさにやってきた次第。

本当に最近、あのお方はどうしたと言うのだろうか？

王宮騎士団とは別に新しい臣下を囲うわ、突拍子もない副団長の企画もふたつ返事で了承するわ、…あとキヤルへの扱いも見ることからに雑になった…いや、興味が薄くなったと言うべきか。

(どれもこれも、『アイツ』が来てから…！相談役だがなんだが知らないけど…！ ああ、もうイライラする！)

苛立ちを覚えつつも、反抗すれば最期…キツイお仕置きが待っているのであることは想像に容易いので澁々ながら王宮騎士団から距離を取りつつ、彫刻の像の物陰から様子を窺う…。陛下の一番の臣下と自覚するキヤルであれど、やはり諸事情により団員たちとは絡みたくはないのだ。

「アイツね…？」

さてさて…お目当ての相手。

仮面ライダーカリバーを見つけ、ほくそ笑むキヤル。こんなちよろい任務なんてさっさと片付けて…

(あれ…なんか、こつちガン見してる…?)

★ ★ ★ ★ ★

あれは、誰だ…? (デン)

DA★RE★DA? (デン) DA ★ RE ★ DA ? (デ
ン)

A★RE★WA…

(キヤルちゃん? キヤルちゃん!? キヤルちゃああん?!?!?) ※心の叫
び

いつや、凄いクオリティ。本人かと思ったわ。そっかー、ここはプ
リコネ限定のコスプレ会場ですかヤバいですね★。いや、待って…ヤ
バいの僕だ。何そんな場所に堂々とカリバーコスとかサ●ゲの本
社にFG●のクソださTシャツ着てカチコミ入れるくらいにヤバい
行為なのでは?

というか、僕の前後に一体、何があつたんだ…

とりあえず、ファンタジー色が強いだけあつて意外と馴染むカリ
バーのコスプレだがこのままではスタッフにご迷惑をおかけしてし
まう。本当にハリウッド実写化クラスのクオリティに驚くばかりで
名残惜しいが、ここは撤退すべきだろう。

「すみません、間違えました。」

「いいや、間違えてはいないぞ？　ここが、ギルド・王宮騎士団の試験会場だ。飛び入り参加のようだが、大歓迎だ！　さあ、早く構えろ！」

あ、あのコスプレは…宴おばさんじゃん。名前忘れた…すまない。

というか、散々BBAとか言われてたけどやっぱり美人だ。プリコネの平均年齢が低いだけで特別に彼女が年長というわけじゃなかったはず。まあ、それ以前に…18以下は犯罪だからな。それにしても本物と言っても遜色ない彼女。結構、有名どころのレイヤーさんか？　しかも、担当の声優さんと非常に似た声まで…

…声まで？

「おい、どうした？　来ないなら、こちらからいくぞ！」

「！」

一瞬で間合いを詰められ、ゴオツ!!と振りおろされた大剣を慌て月闇で受け止める。全身に重力をかけられた如き衝撃が襲いかかり、ノックバックで後ろへ後ずさってしまう。

どういう理屈か耐えられたが、今の攻撃は撮影技術や編集ではなく間違いなく『本物』。そして、月闇も受けてみせたが、傷ひとつない…玩具だったら木っ端微塵になっただけでもおかしくないのに。

(…まさか？　いや、そんなまさか？)

もし、自分の見ているのがよく出来た二次創作の再現ではないとし

たら？

もし、自分や彼女たちがしているのはコスプレではないとしたら？

ならば……自分がしたのはただの寝過ぎしなんてものじゃない。導かれるのはライトノベルや二次創作の人気ジャンルの金字塔でもある例のアレだ。

「…（…異世界転生ッ だと!?!）」



「…なーんだ、見かけ倒しかしら。あんな小突かれたくらいであの始末とか。」

キヤルはやれやれと溜息をつく…。最初こそ物々しい雰囲気全身の毛が逆立ったがとんだ無駄な心配だったようだ。全く余計な時間をとらせてくれて…。ま、どうせあと数秒もしないうちにクリスティーナにボコボコにされてオシマイと背を向けようと…

「あら…？…まだやる気？」

しかし、カリバーは構える…切っ先を後ろに居合のように姿勢を低くしクリスティーナと対峙する。戦闘続行、大いに結構。

「やるしかないか…！」

カリバーは地を蹴り、斬りかかる！対し、クリステイーナは半歩下がりがり、一撃目を大剣で弾く。続いて二撃は防御しパワーで『フンッ』と押し返す。されど、負けじと突きを繰り返すがひらりとかわされる…。

ここでのキヤルの評価は…

「うわあ、最初の踏み込みからして筋は悪くないけど緊張でアガるタイプかしらねアレ？ 純粋な剣技は素人クラス…やっぱり、敵じゃないわね。」

下の中。底辺でないだけまだマシか。そんなこんなしている内に、柱に叩きつけられるカリバー…対し、若干ながら冷めの兆しが見えてきたクリステイーナは折角の昂りがこんな鎮火をすることなど許容し硬く、切っ先を向けて挑発する。

「おやおや、そんなショボい剣技では私には届かないぞ？ ほれ、その意味ありげにひつつ下げているアイテムでも使っても良いんだぞ？」
「…！」

クリステイーナが示すのはカリバーの腰のホルダー…吊るされているライドブックのことだろう。カリバー自身も今になって気がついた…とりあえず、一冊手に取る。彼が無我夢中で選んだのは…

(！…よりにもよってか。)

「ジャアケルベロス!!」

トライケルベロス・ワンダーライドブック…セイバーの物語におい

て、カリバーはトライケルベロスの力を扱うエスパードを舞台から（一時的とはいえ）退場させた経緯があるだけに、これが初期装備に入っているのは何の因果か。

残念ながら、感傷に浸っている暇はないので問答無用で月闇から迸る雷光をぶつ放す！

「習得一閃！」

「どうだ…！」

「…」

生身の人間なら感電死は免れない稲妻の番犬による牙。

しかし、それは不可思議なまでに素早く身を反らしたクリスティーナをすり抜け……

——キヤルちゃんにまつすぐ飛んでいった。

「は？」

油断していた彼女は避けるなんて思考に至ることなく、『きやるっ!?!』と短めの悲鳴のあとに出来上がった黒焦げの黒猫。カリバーとクリスティーナも『あ…』という顔をしていたが、他の団員たちが気絶したキヤルちゃんをそそくさに回収していく。

やべえ…とカリバーは仮面の下で冷や汗をかいているとフォローを入れるクリスティーナ。

「不運な事故だ。気にするな。」

それは、あんまりじゃないか？

何はともあれ、戦闘続行。カリバーの劣勢はまだ続く…さて、次の

逆転の一手になりうるライドブックは…

「！…これなら！」

「必殺リード！ ジャアク昆虫大百科！！」

「習得一閃！」

昆虫大百科：仮面ライダーサーベラの変身ツールとしてのイメー
ジが強いが『煙』に関しては彼女の聖剣に由来する能力：果たして、月
闇で何が起こるかは未知数だが：

「ふんっ！」

大きく一閃、すると刃をから放たれたのは真つ黒な飛蝗の濁流。無
数の蟲が紅い眼を光らせ押し寄せ、咄嗟にクリステイナーも大剣を盾
にするもあつという間に吞まれてしまう。

それにしても、飛蝗か。1号やゼロワン等のモチーフとして有名ど
ころだが、元より農作物を喰い荒らす害虫であり、群を為して大挙し
て行く先々を荒れ地に変えて押し寄せる様は蝗害とされる。その害
悪さは旧約聖書にも載るくらいだ：邪悪な蟲、仮面ライダーとしては
皮肉この上ないだがうってつけだろう。

問題は…

「生きているのかあれ…」

メタルクラスタホッパーさながらの攻撃に彼女は耐えられるのだ
ろうか：やった身でなんだという話だが。カリバーも転生前のアニ
メ知識などから、そう簡単にやられるような相手ではないのはわかっ
ている。しかし、厄災の津波に大剣ひとつでは心許な…

「…面白いではないか？」
「！」

刹那、黒い潮流を斬り裂いてクリステイナーが肉迫。不敵に笑う顔を眼前に確認した時にはもう遅い。大樹を引っこ抜いてフルスイングしたような唸りをあげる大剣が紫色の甲冑を容赦なく斬り裂き、あまりの衝撃からジャアクドラゴン・ライドブックがベルトから外れ宙を舞う。

変身者も容易く限界を迎えた。所詮、闇の聖剣を扱えれど所詮はただの素人…一般人であり、なるべくしてなった結果だろう。地面に投げ出された彼は意識を失い変身解除。異世界の突然の初陣は黒星で終わる。

「さて、……とりあえず、どうする？」

地に伸びたカリバーだった男を尻目に、落ちてきたジャアクドラゴン・ライドブックをキャッチするクリステイナーはこちらへ歩み寄ってくる重厚な黒い甲冑に問う。顔も完全に隠した彼女…騎士団団長のジューンはクリステイナーの顔を見て考える。基本、道楽主義であるが今回は一切の緩みなくこちらを見据えていた……なら、きつと考えも同じはずとジューンは自らの考えを語る。

「剣技については悪いが、一般団員以下…とてもじゃないが、採用基準には満たない。でも、素性がわからない彼をこのまま返すのは…。とりあえず、採用云々は抜きにして、一度保護しておこう。どうやら、陛下も興味がお有りのようだし…」

「同感だな。試験も奴で最後だしキリがいい。」

『チユートリアル…というより、負けイベントだろありや。ひっ
でえ。』

そんな一部始終を城壁の上から観ていた『黒い怪人』。肉食昆虫を
思わせる口元だが、右手で担ぐ剣も相まってシルエツトは異形らしく
も戦士の覇気を感じさせる。ダルそうにしながら、よつこらせと立ち
上がるは仮面ライダーセイバーの幹部怪人であるメギドの『デザス
ト』。つまらなげに鼻を鳴らすと、空いた手で銀色に輝くライドブツ
クをこねくり回す…そこからは微かに声が聞こえるようだ…。

(…! …!)

『ああ、アイツはまだ良い。むしろ、泳がせたほうが本命が喰い付く可
能性がある。……わかつてるよ、『失敗作』は失敗作なりにうまく立ち
回るさ。』

そして、デザストは軽快に城壁を去っていく。

腰にレジエンドライダーライドブツクを輝かせ…

転生早々、キヤルちゃんに殺されるかけるのはご褒美ではない。(真顔)

…荒野

命が息吹くことを忘れ、どこまでも不毛な世界が連綿と続く

記憶が正しければ、最低最悪の魔王・オーマジオウが存在する破滅した未来。平成から令和へと繋がらなかった時間軸。もう新しい命も可能性も孕むことはないその時代に男がいた。

「…その名前は俺へのあてつけか？」

不釣り合いに黒尽くめの大柄な男：知っている、スウォルツだ。ジオウの敵であるタイムジャッカーの實質的な首魁：傲慢に見合うだけの力は持っていたが、それすら上回る妹のツクヨミの存在により自らが座ると思いついていた玉座から蹴落とされ、尚も諦められず策謀を巡らすも、終にはオーマジオウの怒りに触れ粉碎された。一応、世界再編の際に復活はしたが、その後の立ち位置はよくわかっていない。

相対するは、ボロきれのようだがタイムジャッカー特有の穴が空いた衣装を纏う男と女。男は褪せたような不健康な金髪が垣間見え、恐らくは30代くらいか：女は丁度、成人したて頃合いか。どちらも顔は死角で見えない。

このふたり、スウォルツとは有効的には見えず…というより、仲違いの真つ最中な様子。主に会話は男とスウォルツの間で行っているようだ…

「ネオ・タイムジャッカー…この呼び方は気に入らないかしら？ かつて、オーマジオウに敗れきった者たちの最後の砦。されど、未だに野望を捨てられない者たちの燻る場所…。あなたもこちら側に来るべきじゃないかしら？」

「冗談はよせ。俺が望むのはあくまで、オーマジオウが持つ力だ。奴に死なれては困る。それに、並行世界同士をぶつけて時間軸ごと滅ぼそうなどというトチ狂った発想をする者らとウマがあうとは思えん。また後ろから刺されるのは御免被る。」

「あら、そう。残念だけど…あなたとはここでお別れね。」

そして、男は砂塵に紛れるように消える…

残ったのは女のみ…さあ、彼女はどうするのか？ スウォルツは鋭く睨む。

「ハミル、貴様はどうする？」

「私もネオ・タイムジャッカーの傘下に入るけど、アイツとは別行動。幸い、レクスの並行世界衝突計画…テストはうまくいったけど、今回は間違いなくオーマジオウに勘付かれるし、奴も対策を打ってくるだろうから上手くいくかは五分五分かしら。まあ、その分だけ私には好都合。静かに、堅実に、やらせてもらうわ。」

やがて、女も背を向けて消えていく…。

残ったスウォルツは何もない虚空へ口許を吊り上げた。

「バカどもが。貴様等はオーマジオウを舐めすぎている。」



「…！」

目が覚めると…頬に土の感触を感じ、不快さに呻きながら起き上がる。

カリバーの変身は解けていている…。転生前のスーツかと思ったが、スーツ姿でもイギリスの中世を思わせる赤茶の洒落たベストが着せられている…これも転生特典というやつか。とりあえず、辺りを見れば野原…白や青といった寒色系の花々が中心で、空は青い。そして、各所に突き立てられているのは仮面ライダーセイバーの物語を彩った聖剣たち…ただ放置されているのか蔓や蔦が巻き付いて主無く経年しているようだ。

加え、眼を惹くのは龍種をはじめとした幻想種とおぼしき巨大な骨…こちららも、苔が生えたり土に埋もれたりしている。

(まるで、墓場だ…。)

ワンダーワールドを彷彿させるが、あまりに寂しいこの世界。命の息吹も冷たく、暖色のものが見当たらないこの場所はその形容が相応しい。…しかし、セイバーにもましてや、プリコネにもこれに該当するような場所は無かったはず。

「ようこそ、『セーフポイント』に。」

「！」

不意にかけられた声に振り向けば、そこには女性がいた。

黒いシスター特有の修道服に緑髪の歳若い、イタズラっぽい微笑みの小悪魔な顔がこちらを覗きこんでいる。

「君は…誰だ？ それに、ここは…」

「私は『ヒルマ』。言っちゃえば、転生モノにお約束の案内役と言ったところかしら。まあ、色々呑み込めないでしょうけど順を追って話していくから落ち着いて聞いてね。」

案内役…ふむ。確かに転生モノではよくあると言えそうかもしれない。ヒルマと名乗る彼女には申し訳ないが、いきなりそんな役回りを名乗った途端に胡散臭く見えてきちゃう。物語の案内役や主人公の抛り所だった人間が実は裏から糸を引いていた黒幕なんてことも最近珍しくない。魔法少女もので言えばマスコット妖精だったり、仮面ライダーものでいえば某・ブラッド星人とか…。

とにかく、こういう手合いとなれば思わず身構えてしまう。それに對し、彼女はクスクスと笑うのみ。

「あら、そんな怖い顔しなくても。信用出来ないのは構わないけど、暇じゃないからさつさと進めさせてもらうわ。…ところで、あなたは自分が死んだ時のこと覚えてる？ …覚えてない？ ああ、それなら良かった。そんなもの覚えてないに越したことはないもの。都合が良いわ。」

こちらの不信感などお構いなしか。

「ええと、まず最初にあなたは死にました。ただ、色々わけあってあなたをこっちの世界に呼んで異世界転生させたの。」

「何故だ？ 俺はただの一般人だぞ？」

「理由は簡単。アストルムの物語の行く末を大まかに知っている上に、仮面ライダーの力にある程度精通して、うまく立ち回ってくれそ

うな人間が欲しかった。その条件にあたったのがあなた。これじゃあ、不満？」

不満も何も、説明になっていない。ヒルマが欲しい人材の条件ではなく、どうして自分のような人間が欲しかったのが重要なところ：あと、その3つを満たせる奴は自分より良い物件がかなりありそう。悲しいことにな…

「とにかく、あなたは選ばれた：闇の剣士としてね。」

そして、彼女は月闇を投げ渡す。反射的にキャッチすると同時に一瞬で間合いを詰め顔を近づけてくる…：肌に息がかかるような距離に、ほんの十数センチと踏み出せばキス出来るんじゃないかと思うような場所に美しい人形のような顔がある。碧い瞳はまるで魂を吸い込もうとしているように感じ、思わず鼓動がはやくなってしまう…

「……っ！」

「そういうところかしら。き真面目そうな性分だから、ハーレムを作るとか、キャラアンチとかやらなさそうだし。程よい真っ直ぐさは美德よ。」

また、クスクスと彼女。やれやれ、からかわれているのか褒められているのか、全く…

後ずさり深呼吸を同時に行いながら、息を整える。それから、改めて彼女に問う。

「ヒルマ、では君は僕に何を望む？ 僕に何をさせようというんだ？」

すると、ヒルマは続いてライドブックを数冊投げ渡す…：何処から出したのか予備動作の無さに月闇に続いて慌てまたキャッチ。何処とない浮世離れさを感じさせる彼女だが、拳動ひとつすら予測出来ない

というか遊ばれているようで妙な焦燥感がチリチリする。
そして、彼女は口を開く。

「——その本とこのセーフポイントがあなたの役割の手助けになるはず。為すべきことは自ずとわかるでしょう…迷った時はここに来なさいな。もし、寝るか死んだりしたらあなたはここからやり直せる。装備の手入れや拡張だつてここなら出来る。」

とりあえず、はやく起きなさい。でないとあなた…」

——
死
ぬ
わ
よ

「死ねえええい!!!」

「おおう!?!」

覚醒するなり、いきなり顔面に振りおろされた一撃を辛くも回避……何事と顔をあげれば、枕を粉碎して羽毛を被るも怒り心頭なキヤルちゃん姿。どうやら、杖で僕を殴殺しようとしたらしい。髪がチリチリになっていることからトライケルベロスを誤射したさっきの恨みか。

「お前エエ、よくもやってくれたわね!? 人を黒焦げにして、おかげでこっちは死にかけたわ! 塵一つ残さず、ブツ殺してやるッ!」

「ええ…」

タイトル回収。

それはさておき、ここは病室のようだ。ベッドは並んでいるし、あの特有の消毒液からくるツンとした臭いが鼻につく。このままいけば、真っ赤な血の鉄臭さまで追加されそうなのでキヤルちゃんからの2撃目のフルスイングをなんとかすり抜けてベッド隣の棚から眼鏡を回収しつつ、立て掛けてあった月闇を手にとる。眼鏡を片手でかけつつ、3度目のフルスイングをなんとか剣で防御…幸い、キヤルちゃんのパワーは大して無いためかギリギリ防いでいる。

「さっきのことは謝る!! だから、話を…!」

「往生際が悪いわね…! 大人しく、その首を差し出せ!」

「あれは不幸な事故… …あ。」

転生早々、メインヒロインに殺されかかる事態だったが、彼女の背後にこれから起こりうる更なる悲劇を察してしまった。



『『あ。』って、何…よ……ひっ?!』

キヤルはやつと理解した。自分が今、どんな状況なのか…ああ、なんてこと。なんてタイミングよく王宮騎士団の団長と副団長がやってくるなんて… 完全に犯行の一部始終を見られた彼女は青ざめ、後退る。それを黒甲冑のジュンとクリステイーナが笑顔のまま詰め寄って間合いを離すのを許さない。

「さて、弁明を聞いておこうか…一応？」

クリステイーナから与えられた釈明の機会…対し、キヤルは…

「こ、これは不幸な事故で……」

あまりにも苦しすぎる言い訳。そして、ジュンからの判決は…

「クリスちゃん。」

「わかっている。」

キヤルちゃんからの好感度がマイナススタートっておかしくない？（どの口g…）

…はい、やってきましたランドソル城の玉座の間。

大理石の彫刻やら高級そうな調度品の数々に眼を奪われそうになるのが、普通の人の感覚だろう。ただ、そこそこRPGゲームとかを触ってきた前世の僕からすればいかにも敵の親玉が居座るボス部屋といった感想を受ける。不吉なんだ…あの中央の露骨に拡がってるフロアが…

「——待っていたわ、奇怪な剣士。」

ま、実際にラスボスが居座るのだから間違ってはいまい。

身長以上ある尾を背後に並ばせる九尾の狐といった獣人の『彼女はプリンセスコネクトの無印と恐らくはRe:Divide一章にあたる時間軸の今で最期に立ちはだかる敵。本来、その場所にいるべき王女を追い出した上に、プレイヤーである騎士くんが幼児退行した原因：目下、全ての黒幕

（確か… —— 覇瞳皇帝（カイザーインサイト））

前世、何かの記事のプリコネ特集で『彼女』のを見たことがある。そして、アニメでキヤルちゃんへの扱いやペコリーヌへの非道な仕打ちは是非、この場でカリバーに変身してさっさと闇の藻屑に変えてやりたいところだが…

え？ キヤルちゃんを感電させたのは誰かって？

あれは事故だ、キヤ虐ではない（キヤ虐反対派）

(さて、まずジャオウドラゴンはない… ライドブックが何冊あるが、まあ無理だろうな。)

大臣か何かしら要職とおぼしきオジサン爺さん等がいるのはともかく、王宮騎士団のトップ2人に一般団員もそこそこいる…攻撃しようとした途端に剣の錆になるのは想像するに容易い。それに、

ゲシツゲシツ (膝を蹴られる音)

「ぐおっ!？」

「アンタ、陛下の前なんだから膝をつきなさいよ!」

ロープでぐるぐる巻になって、頭に『反省中』と短冊をつけられた蜜柑を乗せるキヤルちゃんも同席。ちよつとこのキヤルちゃんギャグ線高くないか? 割と今、シリアスな空気のはず…あと蹴らないでくれ、痛い。

転生するなり、メインヒロインからこんな扱いを受けるやつそうおらんたる。きつと、キヤルちゃんの好感度はマイナスからスタートだな、うん。…悲しみ。

無論、そんなおもしろおかしい格好をしていたら彼女の親愛なる陛下の目にも留まるわけで…

「キヤル、一体あなたは何をしているの? その格好はなに?」

「へっ!?! へ、陛下…これは、その…」

「まあ、良いわ。面白いからしばらくそのままにしていなさい。」

「陛下っ!?!そ、そんなあ…」

今回はまだマシだが、キヤルちゃんへの仕打ちは酷いものが多い。アニメではまだ抑えられていたが、気分が良いものではないもの。ふむ…いつそ、キヤルちゃん美食殿救済ルートRTAでもやってやろ

うかと考えが過るがやめた。ガバして美食殿全滅ルートにでもなつたら目も当てられない。

さて、遅くなつたがここに來た理由。それは覇瞳皇帝or陛下ことユースティアナ王女(偽)が入団試験の際に僕の気配を察して興味を持つたらしく、目が覚めるなり拝謁する流れになり王宮騎士団の愉快な仲間たち引つ張つて連れてこられたのだが…。

「このランドソル王国のプリンセスであるユースティアナ・フォン・アストライアを前に物怖じしないなんて…。大抵の者は畏敬のあまりにすぐさま膝を折り礼を尽くすというのに…。お前は何者だ?」

「…(プリンセスと言うには、あまりにもラスボス臭が強過ぎる…魔王のほう相応しいのでは?)」

「何か言つた?」

「いえ…。」

しまった、心の声が…!落ち着け、落ち着け…。

ふむ、自分が知らない異物が世界に入り込んでいるとなれば、把握しなければという流れになるのは当然だろう。

しかし、流石に『転生者です』なんて言えるわけもない。言つたところで信じないだろうし、下手な会話などしようものなら王宮騎士団に袋叩きか、陛下・偽により直々に消し灰にされるかどちらかだろう。ここは、無難に乗り切るべきか…。

「私は名も…そして、過去も無き流浪の剣士に過ぎません。ですが、この闇黒剣月闇を受け継ぎ、龍の鎧を纏う者の称号として『カリバー』と名乗っています。」

前者はほぼ嘘、後半はまあ間違えてはいない…はず。

「ほう?…カリバーか。して、カリバー…何故に王宮騎士団の門を叩いた…?」

「二度、このランドソルに腰を落ち着けるのも良いかと考えた結果です。職に就けるなら、これが一番に手っ取り早いと。」

「……あの粗末な剣捌きで？」

「…」

うん、そこ突くよなソコを。初陣は見事に都合主義などは効かずに宴おばさんにフロムゲーの死・確定チュートリアルよろしくボコボコにされたわけである。前世は武術とは無縁だったんだ、加減してくれ全く：

されど、彼女の言うことは間違いではない。明らかに身の丈にあわない挑戦だろう…。

とうか、流されて知らずに参加しただけで、別に入団希望は無かったぞ僕。ただの事故(?)じゃないか…ってそんな言い訳通じないよな？

「どうやら、甘く見過ぎていたようで。本の力でどうにかなると思っ
ていましたが、所詮は身の丈にあわない望み…他所を当たらせてもら
いましょう。」

悪いな、こんな大ボスのお膝元なんぞおさらばして、美食殿に合流
するんだ僕は。残念だったな…

「まあ、待ちなさいな。見てもらいたいものがあるのだけれど。」

しかし、『彼女』が呼び止め懐から取り出した物に目を見開いた…。
小箱程度の大きさだが、それは本…

赤く禍々しいそれはセイバーの物語において諸悪の根源に当たり
うる男であるマスターロゴスIIイザクが創りだした魔本…

『オムニフォースワンダーライドブック』!? …何故ッ!?」

「ほほう、やはりこれが何か知っているようねえ?」

「…ッ!？」

しまった…!？」

驚きのあまり、口が滑りまんまと誘導されてしまった。いくらカリバーに変身出来ようが阿呆丸出しのこの始末に自分が恥ずかしくなるが、どうやら穴に入ることは赦されたい様子。王宮騎士団の愉快な仲間たちがジリジリと周りを詰めてくる…

ああ、これは最悪だ。正直、上手くいく可能性は低いが強行突破を仕掛けるより他…

「まあ、待ちなさい。カリバー…お前に提案があるわ。」

何…？

ジャアクトドラゴン・ライドブックを取り出した手が止まる。

「この本と同じ部類のようなアイテムが…このランドソル中にばら撒かれ被害を出している。王宮騎士団も手を焼いていて…おかげで、この国の治安は悪くなるばかりなの。だから…『専門家』がいればなんて考えていたところなのよ。」

「…」

待て。ワンダーライドブックが他にも存在して被害を出している…？

そんな馬鹿な、ライドブックは相当する聖剣が無ければ力を引き出すことなど叶わないはず。本単体ならさして驚異になるはずも…

(…待てよ?)

もし…だ。

——このプリコネ世界において、自分のようなイレギュラーがまだ他にいるとしたら？

——そんなイレギュラーが自分と同じように聖剣を持っていたら？

転生モノでやりたい放題する転生者もよくある展開だが、実際にこんな美少女だらけ(?)な世界で羽目も倫理も外したい気持ちもわからなくもない：か。それに、案内役のヒルマも『やるべきことはいずれわかる』と言っていた。そして、カリバーの闇黒剣月闇の力は聖剣の封印となれば：

前提の確証は無いが、あり得る可能性だろう。

「カリバー：もし私たちに協力出来るのなら、王宮騎士団の特別な席に据えてあげましょう。だけど、この誘いを蹴るなら：相応の末路を覚悟なさい。」

さあ、どうする？

はつきり言えば王宮騎士団とは距離をとりたいが：手札も技術もあまりに足りない今、仮に逃げれたとしてもお尋ね者となっていては今後の活動に支障をきたすのは想像に難くない。

(：腹を括るか。)

選択肢はひとつ：剣と本をおさめ、偽王女の前へ改めて向き直る。

「本の被害がどれくらいかは知らないが、僕はその本と、その力を引き出す聖剣について知っている。恐らく、知識については君等の期待には応えられるだろう。故に、こちらも条件として衣食住の保障を頼む。それくらいの条件でウインウインだろうか？」

脅し8割の勧誘を受けることにした。ワンダーライドブックにせよ、メギドにせよ、闇の聖剣に仮面ライダーセイバーの知識がある程度は把握している自分ならうまく立ち回れるだろう。戦闘になろう

なら、それこそ王宮騎士団や拔群の能力持ちである少女たちがランドソルにはわんさかいるのだからそんな彼女たちを頼れば良い。……仮にも仮面ライダーのくせに、実に情けないところだが。

さて、偽王女サマの反応は……？

「あら、存外に慎ましいものね。福利厚生は王宮騎士団の一般団員と同じものを用意してあげるわ。」

取引成立か……。とりあえず、一安心……

「それじゃあ、まず……貴方には王宮騎士団の新人教育カリキュラムを受けてもらおうかしら。」

……は？

仮・公務員カリバーさん。(尚、早々にふしんしや認定。)

「あなた、『へんたいふしんしやさん』ですね!？」

「」

待つて。開幕早々これは酷いんじゃない…？

★★★★★

兎にも角にも、王宮騎士団へ仮にという形で所属が決まった僕はギルド管理協会の集会場にやってきた。プリコネ世界には多くのギルドがあり、それらの新たな設営からミッション管理まで一括で管理するのが『ギルド管理協会』…この組織に一応、公務員なれど例外ではない。

となれば、僕のギルド加入もユースティアナ陛下(偽)の一計とはいえ、届け出が必須だった。そして、事情が事情が故に副団長であるクリスティーナとあと御目付役として(不満そうだが)キャルちゃんが着いてきた…。

「ここがギルド管理協会か…」

まさに、ファンタジー世界でよく見る木造りの大きな集会場…活気に溢れ、老若男女が行き交って喧騒がこの場所の息吹を感じさせる…。

取り敢えず、副団長が窓口で話しこんでいる間はふらふらと辺りを彷徨くことにした。実際にこの目で見る景色は本当に新鮮で飽きを感じない。

(…しかし、やるべきことが多いな。)

そんな傍らで考え事…。

話を鵜呑みにするのは危険だが、陛下が言っていたライドブック関連のランドソルで起きている被害… 自分以外の転生者やライドブックを悪用する者たちの有無… 何よりも今は原作の何処にあたる時間軸なのかが問題だ。しかも、この点はゲームとアニメで展開が違ったりするので非常に厄介なところ。

(キヤルちゃんに直接きいてみるか…?)

手っ取り早いのがこれ。ただ、タイミングを間違うとただでさえ好感度がマイナス値な上に不信感を持たれる可能性だってありうる…。

今後、美食殿とも仲良くやりたいし慎重に聞かなくては…

「キヤルちゃん。」

「…ちゃん付け!？」

「ギルドって掛け持ちとか出来るのか?」

「は? …まあ、やろうと思えば出来るわ。でも、色々と面倒よ? 申請とかもそうだし、それぞれのギルドと調整の兼ね合いもすっかりしないと、ギルド間のいざこざにもなりかねないし…。」

「キヤルちゃんは掛け持ちとかしてないの?」

「してないわよ! ただでさえ、クソ忙しいのにそんな余裕あるか!？」

陛下の第一臣下なめんな!」

ふむ。やはり、美食殿はまだ設立されていないかペコリーヌがまだ勧誘していないのかどちらか…となると、かなり序盤。今後の行動指

針を決めるのにひとつの材料が出来たことは大きいな。

あと、キヤルちゃん：第一臣下が君みたいな扱いは普通、されないぞ。(救いはないんですか)

なら、もつと時間を絞ろう。原作開始前だとすれば自分の偽物がすり替わっていると露と知らないペコリーヌがランドソル城にやって来て鉢合わせになる可能性もありうる。カリバーというイレギュラーがある以上、立ち回りをしくじればこの物語自体に取り返しのないダメージを与えることだけは避けなくてはならないだろう。

…あ、そういえば

「お手洗いはどこだ？」

「ん？あつちよ。」

そうそう、転生してから自分の顔を拝んでいない。

便意も忍びよってくる前に用を済ませたいし、丁度いい。教えてもらった通路に入ってドアを開ける…ん？割と転生前の世界でいうファミレスとかのちよつと広めのトイレと造りは変わらないが、男子便器が無いじゃないか。プリコネって便器が男女どっちも変わらない文化だったか…記憶に無いな……。

取り敢えず、洗面台の鏡を見てみようか。

(…………さて、僕の顔は……)

冷たい印象の眼鏡

琥珀色の少し濁った瞳

長髪にいくかいかないかぐらいの銀髪

西洋系な顔立ちでありながら、血色は土色な肌

(…誰だお前。)

日本人云々より以前に顔がファンタジー寄り…プリコネというよりはF G●のブリテン辺りな雰囲気。何というか、返り血でニタリと笑ってそんな顔立ちである。

勿論、生前はこんな顔じゃない…典型的な日本人の…

(……僕は…どんな顔だった…?)

…思い出せない。

日本人として生まれ育ったという大まかな確信はあるのに、家族や友人、職場や育ちといった鮮明な記憶が殆ど思い出せない。

いや…代わりに、別の『誰か』の記憶が蠢いて…い……る…?…?

(お前は…誰だ…)

★ ★ ★ ★ ★

嵐の夜…廃墟の空に暗雲の大渦が中心に抱く闇で全てを呑みこむような勢いで回っている…。

暗黒の曇天の下、立つ者はひとり。

「——嘘吐きめ。」

仮面ライダーカリバー・ジャオウドラゴン…虚しく吹き抜ける風にマントがなびき、握る闇黒剣月闇からはまだ生暖かい鮮血がポタポタと滴り落ちる…。あちこちには聖剣を担っていたであろう男女が倒れ伏し、彼・彼女らの刃たちは主を失い地面に突き刺さった有様。則ち、死闘がここで行われたのだと察するには実に容易い。

「——話せば解るなど、よくもまあ言ってくれたな。ソード・オブ・ラウンズが揃いも揃って『魔女』に誑かされおって。」

そして、カリバーは亡骸からライドブックを引き抜いていき、全てを回収し終える。最後…橙色に輝く不死鳥の聖剣・無銘剣虚無で瓦礫の山に縫い留められたブロンド髪的女性騎士に目を向け…兜の変身を解き、転生した『僕』と同じ顔を露わにした。

「——あなただけは…最後には絶対に信じてくれると思ったのに…」

瞳は口からは血…瞳は泥のように濁る男は、嘲笑と落胆が入り混じった声にを洩らす… 手向けた言葉は彼女にか、はたまた自分にか…本人のみぞ知るところ。

カリバーの男は女性騎士の胸を貫いていた無銘剣虚無を引き抜くと、崩れおちる彼女を優しく抱き留めて地面へと寝かせて蕩けてしまった眼をそつと閉じる…。

「——必ず世界を救う。——そのあと、君と皆を埋葬して…『俺』もそちらへ逝く。暫し待っている…」

今はここまでしか出来ない…もう猶予が無いのだ。

男は天へと手を掲げ、曇天にブランクの白い本を翳す。

「さあ、ここに全ての剣と本は揃った！ 今こそ、全知全能の力をツ
!!」



「……っっ!?!」

凄まじい嫌悪感と胃袋が裏返るような吐き気が突如として牙を剥く…。なんとか吐瀉物は床にぶち撒けずに済んだが、酷い二日酔いのような目眩と役目を放棄した筋肉のせいで、しがみついて身体を支えるのがやつとだ。

…なんだ急に？　あの記憶は『僕』だ…でも、違う。

(気持ち悪い…何が起こった?)

まるで、フラッシュバック。でも、唐突に息吹いたあの記憶は間違えても転生前の記憶じゃないし、仮面ライダーセイバー原作にあたる物語とも違う。カリバーは他ライダーを皆殺しにしてライドブックを集めてなどいないし、そもそも変身者とおぼしき亡骸たちは本編と別人ばかりだった…『自分自身』も含めて。

「はあ… はあ… あとで、ヒルマに訊いてみるか。取り敢えず、はやく用を済ませて……」

ゴポポポ… ジャー…

「…」

あ、トイレの音…ライドソルって水洗トイレ普及してるのか。縦穴ボタンとかならどうしようかと正直思っていたが、流石は覇瞳皇帝…一流の統治者はトイレにまで抜かりないとは…。僕も安心して便を済ませられる。ほら、快便だったのか上機嫌なツインテールの幼女が…

……………『幼女』？

「♪♪♪ …へ？」

「え？」

待って、嫌な予感がする…

「こ、ここ…女子トイレ… な、なんで男の人…が…」

女子トイレ!? 待って、キヤルちゃんこつちだと…

「まさか…あなた、『へんたいふしんしやさん』ですね!？」

そ う だ よ (違 う)

じゃない！ というか、この娘思い出した！『キョウカちゃん』だ
：幼女ギルドのリトルリリカルの3人組のうちのひとりの！ エル
フ耳と紫髪、このプリコネでリアルに一番にかけられちゃいけない名
言からして間違いない!!
何だろう、もつと普通に原作キャラとエンカできないのか僕は!?

「ひ、人を呼びますよ!？」

「ま、待ってくれ誤解… うつぶ。おえ…」

…やばい、吐きそう。

取り敢えず、キヤルちゃん絶対に許さねえ…ゲロゲロゲロゲロ…

「うわっ!? ちょっと、なに吐いてるんですか!? 汚い!」

★
★
★
★
★

「あれ、何か寒気がする…にしてもアイツ遅いわね。あと副団長もまだ時間かかるのかしら？ 丁度いいわ、お昼頼も！ すみませーん！ ギルド特Aランチセットひとつ！」

（男を女子トイレに放り込んでしまったとは知らない）キャルちゃん。

「あ、目を覚まされましたね！」
「…ひっ」

彼女はギルド管理協会の受付嬢カリン：ゲームシステム的にはガチャ担当Ⅱサイゲ緑の悪魔の系譜にあたる。まあ、ゲーム本編にせよアニメにせよ全くの風評被害で特にヤバめの問題ある行動は…：してなかったような？（目逸し）

さっきの夢のせいでも苦手意識というか、本人の預かり知らぬトラウマというか、身体が強張ってしまう。首を傾げる彼女には本当に申し訳ないのだが…

「…ハハハ？」

「ギルド管理協会の休憩室ですよ。本来は協会の職員以外は利用できませんが…」

…ああ、そうか。僕は女子トイレで倒れたのか…：どうやら、副団長御自らが『体調不良』だのと言いくるめて誤魔化してくれた上にこの休憩室に担ぎこんでくれたのだとか。

「貴公、体調が悪いなら早めに言え。場所が場所だ、取り繕うのは苦勞したんだぞ？」

「申し訳ない…」

何だかんだで迷惑かけてばかり…：まだこの世界に慣れていない身とはいえ、情けない。

あ、そういえばキョウカちゃんはもうしたんだろう。『へんたいふしんしゃ』と認定されてしまった以上は誤解を解かなくては今後の活動に支障が出かねない…：一応、美食殿とも接点を持つはずだからなあ。

現状を纏めてみるか…原作は開始前、ゲームルートかアニメルートかは現状不明。ペコリーヌもランドソル城での異変イベントを経ない可能性が高く、最悪の場合は敵対という形でエンカウントすることもありうる。ましてや、王宮騎士団という物語上は主役たちと敵対する立場…：ううむ。

「先が思いやられる…」

「いや、それはこちらの台詞だぞ『一番弟子』。」

…。

「は？」

今、なんて言ったこのオバS…

「あ？」

あ、いや…おねえさん。(訂正)

だいぶ聞き捨てならないこと言ったぞ？ いつから門下に入ったことになってたの…と顔に出ていたのかクリステイナは溜息をつきながら説明をします。

「貴様…聞いていなかったのか？道すがらに話しただろう。お前は私が直属で面倒を見ることになったとな。王宮騎士団は家柄なりコネの問題なりで、ただえさえ面倒な連中の集まりなのだ。陛下のお触書があれば貴様のことを快く思わない者が多い…何かしら困いが無くては今後の生活は成り立たんぞ。」

「…」

え…王宮騎士団って割と陰湿な体質のギルドなのか？

転生前、花●り男子とかドラマで観てた記憶あったけどあれと同じ状況？ 金持ち坊やご令嬢の学園に場違いなド貧乏女子が入学しちゃった的なアレ？ 残念だけどヒロイン力は皆無だぞ僕…：あとそんなことより、もっと大事なことに覚えてるべきなんじゃないか自分。

取り敢えず、弟子とは言いつつも苛めなりに発展しないように先輩がカバーする…つまり、『手を出したらテメエらより上の人間が黙ってねえからな？』という脅し文句みたいなもの。うん…

(ますます情けない… あと不甲斐ない…)

仮にも仮面ライダーになったのに、この過保護具合は泣きたくなってくる…。顔立ちはランクアップしたのに、戦闘技術がトーシローのままとか。この世界、イケメンだろうと騎士くんが大半のヒロインを大量確保するので利点にはならないと思う…：それなら、ご都合主義で剣の腕がたったほうがまだ…

「——大丈夫、剣のことはその身体が覚えているわ。」

「…：…ヒルマ？」

不意にヒルマの言葉が頭に響く。クリステイナーや周囲に聞こえないということは直接脳内に…？ 念話まで出来るとは流石、案内人というべきか…：しかし、身体が覚えているとはなんぞ？ しつこいが、僕は転生前は文系の…

(待て……あの謎のカリバーの記憶……)

覚えているとは逆の身に覚えがない記憶が頭を過る。自分ではない自分が他の騎士たちを血祭りにあげて大いなる力を獲ようとしていた映像……あれがどうにも脳裏でチラついて仕方ない。

ヒルマの身体が覚えているとは、この記憶が関係しているのだろうか。

「……(……ヒルマからも話を聞かねばな。知らないことが多すぎる。)」
「さて、色々あったが今日から晴れて王宮騎士団の一員となる。相応の働きと振る舞いを期待するぞ。くれぐれも、女子トイレに入ったりはしないように。」

……嫌みか。

その時

「副団長！」

「ん？ どうした？」

ドアをバァーン！と勢いよく開けて出てきた王宮騎士団の騎士……印象的なバケツヘッドと低めの優しいイケボ……あ、採用試験の時に案内してくれた人か……！ 多分、原作だと名前もあてられないモブのひとりだったんだろう彼、名前について実はまだ知らない。

それはともかく、酷く焦っている様子……何かあったのか？

「はっ！ 獣人自治区の付近で例の『本の怪物』が暴れています!!」

「!」



キョウカは他のギルドメンバーの待つ待ちあわせ場所に向かって
いる最中だった。

集会所で騒ぎがあつたが、クリスティーナに例の男の事情の説明や
キヤルちゃんが食べようとしていたが『監督不行き届』で取り上げら
れた豪華な食事で口封じされ、色々と丸め込まれた彼女。大人の汚さ
とおいしい思いをしてしまった分、まだ純情な少女の心を揺らしてし
まう結果になっていたわけだが…

「…? 何だか騒がしい。」

向かう方向から次々と人々が走ってくる…怒号や焦燥、まるで何か
から逃げるように。

ぼやっ…と眺めていると眼の前に駆けてきた男にぶつかり『いたい
!』と尻もちをついてしまう。ぶつかった男は謝ることなく、ただ一
目散に去っていく。

「一体、なに…が…」

恐らく、早めに察して引き返していれば違っただろう…それをキョウカは今、理解した。この場で何が起きているのか？何故、人々は逃げ惑っているのか…

…答えなどあまりに簡単、相応の『脅威』がいるからだ。

『…じゆる。 …じゆるる。』

人々を斬り裂きながら、闇色のエネルギーに変換して呑み込んでいく怪物…胸元には本らしき意匠が見えるが非常に輪郭が曖昧な人型だ。俗にいう『シャドウ』という怪物…奴はキョウカを見つけるなり、狙いを見据えてジリジリと歩み寄る。

『……じゆるる！ …じゆるっっ！』

「ひっ!? ど、どうしてランドソルの中に魔獣が!？」

仮にも防壁に囲まれた首都、普通は怪物など余程の強力な怪物でもなければ一歩たりとも踏みこめないはず。王宮騎士団は何をしていたのかと思ひ至るより先に、迫りくる魔物の恐怖に腰が抜けてしまふ。

「だ、誰か…助け…」

『…』

しかし、寸前で首をもたげあさつての方向を向くシャドウ。

その視線の先には見覚えのある人物が佇んでいた…

★ ★ ★ ★

——これが、シャドウ？

僕が最初に覚えた疑問がこれだ。月闇を携えてやってきた現場で見たが明らかにアニメで知るシャドウにしては様子がおかしい。ドロドロしているのは相変わらずだが、かなりしつかり人型を保っているし、『じゆるじゆる』と汚い咀嚼音を立てているのがゾツとするほど汚らしい…加えて、

(胸のあれは…ライドブックか?)

通常のライドブックかアルターライドブックかわからないが、ここが弱点ですと言わんばかりに目立つ胸の本。無論、明らかにセイバー側の要素だ。

「…どうなっている?」

『…! …!!』

「…?」

コイツ、何かを喋っている…? ノイズががって、発音も最悪だが僕に向かって罵るように叫んでいる…?

『キサマ、ナゼ…! ワレラヲ…ウラギッタ…!!』

裏切り? …何の話か皆目検討も

『ユルサン……！　へんシン!!』

「!？」

突然、シャドウが凄まじいエネルギーを噴き出しながら『変身』した。爆発といっても他言ではないような衝撃に怯みながらも、姿を変えたシャドウに僕はア然とした：　髑髏を彷彿を彷彿させつつも隆々とした赤いラインが走る銀と黒のボディ：　蟲のような触角と黄色い燃え盛るような黄色い眼は……

「……アナザーファイズ!？」

仮面ライダーファイズの力と歴史を奪い取り、産み落とされた紛い物の仮面ライダー：即ち、アナザーライダーと呼ばれる怪人の1体。されど、セイバーの世界には殆ど関係ない仮面ライダージオウの敵勢力の怪人だ。しかも、歴代の仮面ライダー作品の怪人たちの中でもアナザーライダーは攻略が厄介な部類だ。

「どうしてこう、ハードモード過ぎやしないか。」

チュートリアルが宴おばさん、初陣は作品の垣根が違うアナザーライダー：実はこのプリコネ世界はサイゲの他に東映とフ●ムも関わってるんじゃないかと思うくらい鬼畜仕様である。助けて、ライダー……あ、ハイ、僕ですか（絶望）

取り敢えず、キョウカちゃんもピンチなので見過ごすわけにもいかず……ジャアクドラゴン・ライドブックを取り出す。

「ジャアクドラゴン！」

——かつて世界を包み込んだ暗闇を生んだのは、たった1体

の神獣だった……。」

勝てる気はあまりしない。だけど、偶然とはいえ手に入れてしまったこの力を持つ以上、逃げるのは仮面ライダーの歴史を紡いできた者たちや信じる人々への背信他ならない。迫りくる画面越しの偶像ではない、本物の怪物からの恐怖に震えそうになりながらも歯を喰い縛り心に鞭打ち、本を月闇の刃へ翳す。

「ジャアクリード!!」

バックルに本をスロット…さあ、覚悟を決めろ。

恐怖を呑み込め 思考を捨てるな

「変身!」

そして、柄でバックルのスイッチを叩いてライドブックが開き、封印されていた邪悪な龍の力を解き放つ!

「闇黒剣月闇!!」

「Get go under conquer than get keen! 月光 暗黒 斬撃! ジャアアアクー! ドーラゴオオン!!」

【月闇翻訳! ——光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する! ——】

放った斬撃が邪竜となり、アナザーファイズを怯ませてから今度は僕に蜷局を巻くように纏わりつき紫色の甲冑へと変身させる。転生後は無我夢中でわからなかったが、今は感じるゴムの塊とは違う肩にかかる重み…コスプレではない本物。この感覚を幼い日からどれほ

ど夢見たことか……

「仮面ライダーカリバー……いくぞ！」

敵、現る。(待って、お前作品違うだろ!?) その2

「はあああ……!」

左腕を立て、刃と十字に交差するように構えるカリバー……。意識したわけじゃない……。幾度となく繰り返し擦り込まれていたように自然と身体が動く。月闇の金色に輝く刀身が腕甲と摩擦し火花を散らし、腰も低く落ちる……。臨戦体勢。

『キサマア!!』

襲いかかるアナザーファイズ。相手の武器は赤く光るフォトンブラッドの剣・ファイズエツジ：誘導棒に見えなくもないが、あれは人間の進化した怪人・オルフェノクすら簡単に灰にする恐ろしい武器だ。本来、オリジナルのファイズの武器だがアナザライダーも自身の相当する原典の武器・能力を使う例は特別に珍しいわけじゃない。問題はまともに受けたら、こちらが灰にされることだ……!

(防御を……!)

——前へ出る。

振り下ろされる紅い一撃を月闇で受ける……!身体は自然に踏み込み、力押し of 刃を止めようとするが交差する刃はこちらにジリジリと迫り……!

(押し負け……!?)

——パワーで敵わないなら、いなせ。正面から受けるな。

首をぶった切られる寸前、素早く受け流し右側に回り込んで蹴りを

入れて間合いをとる。しかし、アナザーファイズは大してよろめきもしない：体幹も重量もあちらが上か！

——相手の得意な土俵に立つ必要はない。

「ならば……！」

「キングオブアーサー!!」

カリバーは空色のライドブックを起動し、召喚するは身の丈4人分は超えるであろう大剣・キングエクスカリバー：聖剣ではないが、武器としては申し分ない。大樹のような質量の剣を勢いをつけて、蹴り飛ばし叩きつける。しかも、ご丁寧に踏ん張って受け止めてくれたおかげで未動きがとれないようだ。このまま追撃を…

『グルア!』

「なにッ!?!」

しかし、流石に甘かったか。キングエクスカリバーは見事に殴り返されてこちらにダイナミック返却されてきた：思わず身体が強ばってしまう。このままでは下敷きに…

「何をしているッ!」

「!」

ガンツ!!と鉄を蹴りあげる凄まじい音が響いた。

クリステイナーだ。彼女が、割って入りキングエクスカリバーを明後日の方向へ弾いたのだ。騎士の大剣は宙を舞い、腰を抜かすキョウカの近くでズシン!と突き刺さる：あと少し近ければ一大事だったが、今は戦いに集中しなくてはならない。

「やれやれ、先走るんじゃない。あわせられるな?」

「ああ。」

仕切り直し。

仕掛けるはクリステイーナ、大剣を踏み込んで叩き込んで一撃、二撃：しかし、鉄の鎧すら砕くであろう攻撃もアナザーライダーの前に通らない。軽く仰け反っただけですぐさま反撃のファイズエッジが薙ぎ払われるが彼女には届かない。

『!? !?』

ブンブンと振るっても、クリステイーナの不敵な笑顔の残像をすり抜けていく。全てが予め判っているように回避され続ける…

「月闇居合！ 読後一閃！」

「はああっ！」

そこへ、月闇の飛ばした斬撃を上乗せしたライダーキックを見舞うカリバー。寸前でノールックで退いたクリステイーナには当たらず、アナザーファイズの顔面に吸い込まれるように直撃。これは流石に聞いたようで、顔をおさえてのたうちまわって悲鳴をあげていた。

「はああああ…！」

仕留めるなら今しかない。ありったけの魔力を双方刃に流し込み、刀身に迸るような光と闇が灯る：そして、地を踏み砕いて懐に飛び込むとクリステイーナが斬ツと一閃、カリバーがザグツ！一撃とアナザーファイズを斬り捨てた…。

『ぐああああ…?!?!?』

——…許せ……ッ

いくらタフであるアナザーライダーとはいえこれにはもう限界だった。数秒後、傷口からの膨張するエネルギー圧に耐えきれずアナザーファイズは大爆発を起こす。しかし、その生命エネルギーを含んだであろう爆炎は膨張しかけるとみせ、逆に一気に収縮して一冊のライドブックと金髪の少女に分離する。

「…サレン？」

クリステイーナが少女を見て呟く。
その名はカリバーも知る者だった。



サレンって、あのサレンか…!?

王宮騎士団の前・副隊長であり、今は王宮騎士団の傘下ギルドで孤児院をまだ高校生にあたる年齢でありながら営む少女…精神性はまさに聖女。パツキン巨乳と幼馴染み系ヒロインでゲームなら主人公たちを美食殿設立まで面倒見てくれたり、他版權のクロスオーバーキャラに空き部屋を提供したりと活躍の場は(アニメでは残念ながら少なかったが)多く、ゲーム内の世界や僕のようにリアルファンか

らも人気の高いキャラクターだ。

本来、実物を拝めるならせめて握手くらいはしたいところだが…何故、彼女がアナザーファイズに？

(…これは？)

…何か落ちている。

拾いあげてみる……ふむ、ライドブックだな…何か血が固まって腐食したみたいな縁になっているが。しかも、これは仮面ライダーファイズの物語に相当する『ファイズ進化人類史』。レジエンドライダーライドブックと分類されるもので、セイバー本編とは基本的に関係ない…言い方を悪くすれば、玩具展開のみのオリジナルアイテムだっただけ。それが、どうしてアナザーライダーから出てきた？

(ロジックを考えると…)

これがアナザーライダーにサレンがなった原因と仮定して。経緯はまず彼女の回復を待ってからにしてだ…

普通、アナザーライダーはジオウ系のライダーが相当するオリジナルからの攻撃しか受け付けない。しかし、ライドブックで産まれたこの個体が本来あるべきではない『セイバーの怪人であるメギドの特性』を持ってしまったのだとしたら？ カリバーの攻撃が通り撃破出来たのも納得がいく。

(そして、明らかに自然発生ではないな…)

これは確信が持てる。アナザーライダーは土着の種族や自然発生するタイプの怪人ではなく、タイムジャッカーといった存在その誕生に絡むのが必然である(まあ、かなり特殊な例外もいたりするが)故に、悪意のある何者かが絡んでいると見て間違いない…

(それが恐らく、ヒルマが僕を呼んだ理由…なのか?)

「ひぐ… えぐつ…」

「…!」

ふと、耳に届く噉り泣く声。

ああ、そうだった…巻き込まれていた彼女を忘れていた。

「怪我はないか?」

「ぐずつ…」

キョウカちゃん、無事だったか。(すぐ横にそびえるキングエクス
カリバーから目を背けながら…)

「怖かったろう、もう大丈夫だ。悪いやつはやっつけたからな…もう
泣かなくて良い。ひとりで帰れるか?」

「ううっ、うう…怖かったよお…。」

ううむ、ちよつと落ち着くまで待つ必要があるみたいだ。

「副隊長。」

「…なんだ?」

「少し、この子の様子を見ていたい。そちらを任せる。」

申し訳ないが、サレンは怪訝な顔をするクリスティーナに任せよ
う。僕は変身を解き、まだ涙と震えが止まらない少女に手を差し出す
…

「なら、一旦ギルド管理協会へ行こう。ほら、手を繋いで。」

「こ、子供扱い…しないでください…い…」

不服そうだが、少し躊躇ってキョウカちゃんは手をとってくれた。何気に優しい触れ合いははじめてだな……本当に副隊長といい、キャラちゃんといい、全く…。

「あ、あのどうかしました…?」

「いや…なんでもない。」

とにかく、助けられてよかった。これで、少しは仮面ライダーらしいことは出来ただろうか？

まだまだ未熟、はじまったばかりの異世界転生。今だけはちよつとした喜びを僕は噛み締めていた…。

★
★
★
★
★

『…』

物陰から一部始終を見ていたのは…本の怪人・デザスト。

去っていく王宮騎士団の背を見ながら、何かを考えあぐねるように顎を撫でまわしていると…

——主さま、何処にいますか

『!』

近づく人影を察知して誰も目につかない死角に滑り込む。その数秒後、困り顔でやってきたエルフの幼い少女…そう、プリコネの物語においてメインヒロインと案内役を務めるひとり『コッコロ』である。彼女は『主さま』を捜してここまで彷徨ってきたのだが…そこへ、ふらりと人影が現れる。

「あ、主さま…こんなところに!」
「…」

主さまと彼女が呼ぶ高校生ほどの少年…まさしくプリコネの主人公でありプレイヤーの分身である『騎士クン（ユウキ）』がそこにいた。彼を確認するなりああ、よかったとコッコロは胸を撫で下ろす…

「心配しました。勝手に離れられて戻らないものですから…黙って居なくなるのはメッでございますよ。ここ最近はランドソルの都市内でも魔獣が出没するとか…」

「…」
「聞いていらっしやいますか…主さま?」

あまり彼の反応は無い。顔にはあの腑抜けた笑顔すら無い。

…あるのは、腰にひっさがる『無銘剣・虚無』のみ。

「宿に戻る。」

「あ、主さま?」

踵をかえし、帰路につく彼は誰なのか?

——まだ物語は1ページ目がめくられただけに過ぎない。

転生カリバーさん、別にロリコンではない（きつと疲れてるのよ）

——さん！ ——さん！

今、僕は天使キョウカちゃんと天高く舞い上がっている…ああ、なんて幸せなんだ。前世でもこんな四肢の先から五臓六腑まで行き渡る暖かい多幸福感に満たされるなんて無かった！

うん、ロリ最高。まこと貴い。

前世で精神誠意育てて下さった父上、母上、もうしわけございませぬッ！ 早死して異世界転生した親不孝のせがれは異世界にてロリコンに堕ちまするううう…!!!

「キヤルちゃんスパークツ・ボンバーアアア!!!」

ドゴツ（何処からともなくとんできたキヤルちゃんが直撃する音）

ぐえっ

★ ★ ★ ★

——ひゆるるるるるる　ズドーン!!

「はい、楽しい夢の時間は終わり。」

「…ごふっ、ごふ…出たな、キヤルドラゴ…　ヒルマか？」

「あたし以外、この世界に誰がいるっての？」

楽しい夢の終わりは唐突に。まだ眠りからは覚めないが、物哀しい野原に叩き落されたものの痛みは無いかわりにこちらをクスクスと見下ろす小悪魔的な笑顔に憎らしさがわいてくる。どうやら、強引に意識をセーフポイントに持ってこられたらしい。

「親より先に逝ったくせに、異世界転生して幼女に手を出すとか…本当に畜生ね。」

出していない。夢だからセーフ…だよな？（震え）

というか、20代の折り返しが10代のうら若き乙女たちに手を出そうもんなら犯罪だし、並行世界の騎士クンが大挙して殺しにかかってきそうだ…怖気。でもひとりくらい貰っても良いよな折角の異世界転生だし。

無論、20歳以下に下劣な感情を催す気などこれぼっちも……ん？、ヒロインのおよそ9割が対象外になるのでは？

「ま、誰であろうと本気で手をだしたらその時は剣もその身体も取り上げるから注意しなさいよ？」

——まじか。

どうやら、命も金玉も握られてしまった僕はどうしたら…

「それよりも、新しい拠点を建ててみたの。こんな殺風景な場所に野

「晒しより良いわ。」

見上げれば、丸太小屋の別荘が目の前に。凄いな、キャンプも何も前世に縁が無かっただけにサスペンスドラマくらいでしか見たことがない建築物が…凄いな、彼女が造ったのか。

「さ、中へ中へ…」

「む…」



「いや、…よりもよよってか?」

「あら?…不満かしら?」

ヒルマに案内された木造の別荘とおぼしき建物…外観は童話に出てくるような愛らしい屋敷で良かった。良かったのだが…

(これは…黒い本棚のアジトじゃないか…)

ステンドグラスに暖炉とだけならまだ良いとして、ブランクのライドブックが乱雑に押し込まれた本棚や、何か机の上には呪物かそれに相応するようなアイテムが散らかっていたりするこの場所は見覚えがある。

『黒い本棚』とは…仮面ライダーセイバーの物語において敵組織にあたる怪人メギドを中心に構成された勢力。確かに物語の前半こそはカリバーとも縁があるといえあつたのだが…せめて、ノーザンバー

スとは言わずとも、もつと他に無かったのかと隣でニコニコしている用意した張本人を問い詰めてやりたい。

「うーん、あなたの記憶からその力が相応しい場所ってイメージの記憶を頭から抽出して造ったんだけど…」

「……………頭から抽出？」

何か聞き捨てならないこと言ったぞこの女。

セーフポイントといい、ヒルマといい、理屈のわからない事ばかりだが… なんだらう、知らないうちに脳みそとか吸い出されていなか気になってきたぞ。怖くて深く聞けなかったが…

とりあえず、あの墓場のような野原だけじゃなくて良かったと一息……………適当な椅子を手にかけて腰を降ろすと、ふと目に入った手鏡を手取る。無論、写るのは自分の顔、ただ……………

(やっぱりこれ、元々の顔じゃないよな?)

今更だが、明らかに生前とは違う顔…灰寄りの銀髪(もしくは白髪?)に土気色寄りの肌…あと、何というか擦りきれた琥珀色の眼。シャープなデザインの眼鏡も相まってとても冷たい印象を与える…多分、陰キヤだ。(偏見)

まあ、まだ若そうだがプリコネ世界では10代がキャラクターの大半を占めるので、数少ないアダルトイ男性側に入るだろう。…ふむ、ファンタジー寄りだけど転生前よりイケメンなのは確かだろうしヨシ!(???)

「あ、そうそう!これ渡しとくわ。さつき、修復終わったから!」

「…むっ?」

ヒルマからライドブックを投げ渡されたのでキャッチ…。

ふむ、——『ファイズ人類進化史』：仮面ライダーファイズの物語のライドブックか。あの腐食していたような部分は消えて元のライドブックの形に修繕されているが、恐らくサレンをアナザーライダー化させた原因でもあるこのアイテム。

さて、いい加減にはつきりさせなくてはならないだろう。

「…ヒルマ、改めて聞きたいことがある。君の目的はなんだ？ 僕を何故、カリバーに選んで転生させた？ それに、どうしてプリコネの世界にアナザーライダーが…」

「この案内役の目的は何なのか。僕は一体、この物語に何を為すべきなのか……」

真剣な顔をしていたつもりだったが、ヒルマは相変わらずクスクスと笑うのみ。

「良いじゃないそんなこと。あなたはあなたで『仮面ライダーごっこ』をしてくれれば、私はそれで良い。この物語をエピソードに導いてくれればそれで…」

「どういう意味だ？」

「この物語は異物が混じってる。だから、このままだと本来あるべき結末とは違う方向へ行ってしまう…だから、あなたはそのカリバーの力で迫りくる悪を捻じ伏せれば良い。それだけのこと…」

抽象的すぎる…！ 異物とはアナザーライダーのことを示す可能性が高いが話の全体の意図は『取り敢えず黙ってる』ということだろう。

「どうしても知りたいのなら、この物語…駆け抜けた先に答えがある。それまではあなたの味方。そういうことで、あなたは仮面ライダー

ごっこの続きをどうぞ。ほら、あの娘…ペコリーヌって娘がそろそろピンチの頃合いじゃないかしら？」

何!?! 話を露骨に逸されたがペコリーヌが危機が訪れる…だと？

本当だとしたら…原作開始前のタイミングをとした場合なら最初の帰郷でランドソル城に帰ってきたところか。かつての自分の臣下たちどころか両親である国王夫妻まで自分を忘れ、成り代わった偽物に心に深く傷を負うイベント…原作において大きなターニングポイントのひとつにあたる。

(——くそ、納得いかないが！)

問い詰めるのは次回にすべきだろう。アナザーライダーの事もあり、今回のイベントも原作通りに終わるとは限らない。何らかの異常…再びアナザーライダーの発生などが起これば、物語が収拾つかない事態にだってなりうる。

「覚えている、次あった時は必ず…！」

「ハイハイ、せいぜい頑張りなさいな。」

捨て台詞と共に僕の意識は夢の中で微睡みを覚えていく…即ち、現実への覚醒だった。それでも、手を振りながら見送る憎らしい笑顔は暫く忘れそうにない…。

★★★★★

「さて、はやく烈火と虚無を見つけないと…。これ以上、時間を廻すのはアメス様にとっても過負荷だし。ま、いずれ壊しちゃうんだけどね。」

テーブルに腰かけたヒルマは不敵に笑う。その手に握るのは浄化され手渡されたはずの穢れたファイズ人類史が指先で踊らされている。

「さて、今回はどんな『仮面ライダーごっこ』になるのか…楽しみ。」

セーフポイントにクスクスと響く笑い声…呼応するように、薄暗くなりはじめた剣の丘に差刺さる刃に火炎剣・烈火と無銘剣・虚無だけがない。これが何を意味するのかは転生者がわかるまでまだまだ先の話である。



「…(何か息苦しいな…)」

何だろうこの圧迫感…なんというか、満杯の賽銭箱に頭から突っ込まれたようなギュウギュウとジャリジャリとした感触と痛みがほぼ全身に感じる。あと何かやたらと足を引っ張られてるよう…な…？

「どっせー！」

「…ぶっ!？」

いや、確かに引っ張りだされたのだった！圧迫感からの開放と勢いで空中に放り出されるも『きやるっ!』と鳴く柔らかい何かにクツションになっってもらい間一髪、床とのキスは避けられた。寝起きに一体、何事…あ、キヤルちゃんじゃないか。僕のお尻で何をしているんだ？

「アホか!? あたしをお前を助けてやったのよ! 周り見ろ、周り!」

——まわり?

キヤルちゃんに怒鳴られて周囲を見回すところは王宮騎士団の食堂…何か騒がしい。いや…あちこちで騎士団たちがミイラと戦っている?!

(いや、これはミイラじゃない…屑ヤミーだ!?)

王宮騎士団、絶賛、敵襲中…マジか。

新しい職場、やばくない？（セキュリティがガバすぎる件）

わー、職場が気がついたら屑ヤミーで溢れかえってB級かすら怪しいモンスターパニック映画みたいだぞこれ。キヤルちゃん、どうやら屑ヤミーに呑み込まれかけてたのを助けてくれたらしい…あれ、僕は部屋で寝てなかったか？

取り敢えず、屑ヤミーどもはシバかないとマズイのでジャアクドラゴンのライドブックと月闇を取り出す…

「ジャアクドラゴン！——かつて、世界を包んだ暗闇を…」

「見栄なんていいからさっさと、変身しろ！」

アッハイ（素直）

「ジャアクリード！」

「変身！」

「ジャアアアクドオオラゴン！」（強制短縮）

★★★★★

「（えい、えい、）むんッ！」

男がやってもちつとも嬉しくない気合の入れ方をして屑ヤミーに斬りかかるカリバー。食堂ということもあり、ろくに武装すらしてい

なかつた者もいたためか、分類としては雑魚の有象無象の類である屑ヤミーたちに皿やら鍋の蓋などで四苦八苦しながら応戦する団員たちの様子が散見される。そんな剣も鎧も無い者たちを助けに向かい、群がろうとした屑ヤミーを蹴散らす。

「コイツら、何処から?」

「知らないわよ、何処からともなくわいてきたのよ! 侵入者のせいじゃない!」

「!」

キヤルちゃん曰く、城に入った侵入者のせい…すなわち、ペコリーヌが関わっている?

! 昨日のサレンの件が頭を過る…この予感あたってほしくはないが

「キヤルちゃん、ここは任せた!」

「は? ちょっと、あんた何処いくのよ!」

カリバーは走る…道行く度に襲われる城の人間たちを助け、廊下をゾンビのごとく蠢く屑ヤミーの群れを斬り捨てながら。しかし、ランドソル城は広すぎてこのままではキリがない…カリバーの力は封印特化…されど、探索・偵察の類のサポートメカやアイテムの類はほぼ皆無なのである。というより、セイバー系ライダー自体が元より充実していないのだ。

「何か役立つものは…?」

ライドブックに何かないか…と、思っていた矢先に目についたのはファイズ人類史。本来の用途は仮面ライダーの力を引き出すためのものだが、原始にして闇の聖剣である月闇の場合は違う。仮面ライダーという正義の源流である物語の悪性…『怪人』の力を引き出すの

だ。つまり、これを使えば…

「イチかバチか…!」

「オルフェノク」

発動するのは仮面ライダーファイズにおいて敵である灰の怪人・人類の進化形『オルフェノク』…そして、主人公である乾巧の正体でもある『ウルフェノク』がカリバーに異形の姿を重ねる。

狼由来の能力を持つこの怪人の能力の発現したのは、まさにカリバーにとって狙った通りだった。優れた脚力…加え…

「臭いが…わかる…!」

人間とは比較にならない鋭敏な臭覚。まさに、今の状況に打って付けの能力だ。呼吸するだけで、汗や血の臭い…『人ならざる者』の臭いまで方向性まで把握して鼻が拾ってくれる。

「一際強い臭い、あっちか…む?」

向かおうとしたら、身体がふわりと浮いて代わりにウルフェノクの幻影が勢いよく走りだし、引っ張られる形で自分の身体が移動していくではないか!

(すげえ、ジョジョのスタンドみたいだな…それに、移動も楽に…
…あ、やっぱ駄目だコレ、揺れが酷すぎて吐きそ…うえ…)

能力はカツコイイのに、吐き気に機転やら何やらも台無し。取り敢えず、ウルフェノクの幻影は迷うことなく、壁や天井まで縦横無尽に走り抜けカリバーの三半規管と人としての尊厳に著しくダメージを与えながら中庭まで引きずりまわし…目的地に到着するなり、乱暴に放り出して消えてしまう。

そして、放り投げられたカリバーはというと、兜の金色に輝く角が勢いのまま屑ヤミーの顔面にぶつ刺さり恐らく有機生命体ならグロ全開の絵面を作り上げていた。こんな戦い方、許されてもアマゾンズぐらいだろう…

「こ、この…！ 刺さってるんだよ！」

強引に引き抜いた拍子に頭が破裂したが問題ない…相手は無機物だ。

「さて、やはりか…。」

王の間はかなり近くて広いこの廊下…おびただし数数の屑ヤミーに見覚えのあるオレンジのブロンド髪の子、プリコネの看板を飾るメインヒロインであるペコリーヌだ。そして、それに襲いかかるのは

やはり、『アナザーオーズ』：仮面ライダーオーズのアナザーライダーであり、この歪なキメラの怪物が屑ヤミーの原因だろう。トラクローを模した爪をペコリーヌが愛剣を振り回して応戦しているが……どうにも、様子がおかしい。

(騎士たちを…庇っている?)

頑なにその場に留まりながら立つ彼女の背には負傷したとおぼしき踞る騎士たちの姿をが…しかも、アナザーオーズはペコリーヌよりむしろこちらを執拗に狙っているように攻撃をしかけようとしている…?

「ペコリーヌが狙いじゃないのか? …だが、やることは変わらない。い。」

何にせよ、最優先はアナザーオーズの排除。

戦いに割って入り、月闇を一撃。飛び退いた異形からは『うっ』と濁った悲鳴と赤い羽根が撒き散らされる…声からの変身者判別は厳しいか。取り敢えず、ペコリーヌを後ろに剣を構えたカリバー。

「あ、あなたは!？」

「あれは僕が始末する。君は動くな。」

恐らく、この場で一番うまくアナザーライダーに立ち回れるのは原作知識というアドバンテージを持つカリバーのみ。ペコリーヌを護りに専念させ、ライドブックを2冊取り出しアナザーオーズを肉迫する。

『キサマ、ジャマヲ!!』

「悪いが、すぐに決めさせてもらう。」

「キングオブアースー!!」

「ジャアケルベロス!!」

そして、巨大キングエクスカリバーを召喚して、トライケルベロスで凄まじい帯電させて投げつけた。電撃を纏いながら迫りくる巨大な質量の刃をかわしきることはいくらアナザーオーズでも容易ではなく、直撃コースを受け勢いのままに壁へと叩きつけられてしまう。前回のアナザーファイズ戦では単純に投げつけて弾かれたので、カリバーなりの威力をあげる工夫である。

(…ふむ、これは効いたようだな。)

城の一部もふっとんでいるが、まあアナザーライダーを倒すなら安いものだ。現に、アナザーオーズも余程効いたのか復帰してくる様子も無い…

……
……

「…む？」

警戒していたカリバーだったが、異変を感じ壁に突き刺さるキング
エクスカリバーの元へ…。そこには、アナザーオーズなど影も形もな
い。ただ、近くの床に貫通した穴があるだけ…

「逃げられたか。」

穴を抜けて追うという選択肢もあるが、今はペコリーヌを無視は出
来ない。踵をかえし、消えていく屑ヤミーに困惑する彼女へ歩み寄っ
ていくカリバー…手は月闇を離していない。

「あ、あの…あなたは？ 王宮騎士団の方で…」

「新人の仮面ライダーカリバーだ。お前のことは知っているペコリー
ヌ。」

「ペ、ペコ…？」

盛大に無意識ガバをしている点は運良く勢いで問題にならない。
ただ、周囲はそうはいかない。屑ヤミーたちが消えたことで、一気に
この場に向かって騎士団たちが押し寄せてくる甲冑が擦れ合うよう
な金属音が響いてくる。

(クリステイーナに騎士団長ジュン、御自ら来るか。となれば、脱出は
流石に絶望的だな…)

王宮騎士団の最強格が雁首揃えてやって来れば、流石にペコリーヌ

だって全力を尽くさねば逃走は難しいだろう。

：ならば、とカチリと月闇を握りしめたとかリバーにペコリーヌは慌てて後退りして手をブンブンと振った。

「待つてください！これはわたしのせいではなく…!? それより、貴方はどうして…」

「黙ってる。」

「ジャアクリード！ 習得一閃!!」

そして、慈悲なく振りあげられた金色の刃。牙を向いた闇がペコリーヌを通り抜け…

——ゴオオ!!

「ぎやるっ!?!」

後ろで杖を振り上げていたキヤルちゃんに当たった。キヤルちゃん、しれっと後ろから殴って手柄を横取りしようとしていたのである。しかし、忍び寄る彼女にカリバーは気がつきあえて、無視するように見せかけてからの戦闘不能へ追い込んだのである。

(危ないな…危うく、美食殿設立が無くなるどころだったぞ。)

カリバーが真っ先に危惧したのは、ここでペコリーヌと原作より完全なエンカウントをしてみれば、確実に美食殿設立に悪影響が出るのは想像に容易い。

そんなメタな視点など知る由もないとつぶらな瞳がパチクリとする。

「た、助けてくれたんで……」

—— 勘違いするな。

「え？」

その気が緩んだ一瞬、剣は振り下ろされ
ペコリーヌの視界は激痛と共に『暗闇』へと閉ざされた。

うん、説得とか無理い（血涙）

…夢をみる。

かけがえのない仲間との旅 幾多の試練 恋した彼。
色んな人たちと出会って…

傷ついたり、すれ違いもあつたけど…それでも、楽しく食卓を囲んでおいしいご飯を食べて、笑顔になって…

——コツ■ロちゃん、■ヤルちゃ■

——ユ■■く■、■■ーダさ…？

あれ？

わたしはひとり旅をしていたはずじゃ…

【 DEVOTION 】



「…気がついたか。」

「！」

バツと上半身を跳ね上げた彼女、ペコリーヌは額に汗を滲ませていた…。まあ仕方ないだろう、帰ってきた我が家は父母も含めて自分を忘れていただけではなく、バケモノまで湧いていたのだから。あと見知らぬ珍妙な騎士とかいたら尚更。

「あ、あなたは…う…ここは…う？」

「僕はカリバー…そして、ここはランドソルの外れにある森だ。ここまでは王宮騎士団は追ってこない。手荒な真似をさせてもらったが、君を逃がすためだった…すまない。」

僕は城内で王宮騎士団に囲まれる寸前、彼女を月闇の暗黒空間に封じ込んで殺したように見せかけて、王宮騎士団の追手がかかるのを防いだ。月闇の暗黒空間は中々人道的とは言い難いが、ジャオウドラゴンも無い僕などでは王宮騎士団を相手どるのは今後の活動を考えてもリスクが過ぎた、仕方ない。取り敢えず、人格等には影響が出ていないようならまあヨシとしよう…

問題はここからだ。

「…な、なんで私を？」

「僕は君の素性を知っている。そして、君が親しく関わった者たちの記憶から忘れ去られていることも。」

「！」

説得チャート…しくじるなよ？万一、王城に戻られたりしたら流石

にもうカバーしきれない。ここはうまく二度目の旅に出てゲームルートにせよ、アニメルートせよ行ってもらわねば…退路に未来は無い。

「教えて下さい！ 一体、なにが…！」

「それは君が知るべき時ではない。知ったところでどうしようもない。」

「そうはいきません！だって、城には…！」

大切にしてくれた親がいる、親しかった臣下がいる…わかるとも。それが、他人に見知らぬうちに変貌していたなんて御しがたいだろう。

だがね…辛い現実を突きつけてやらなくては。

「君に何ができる？」
「両親の王や王妃に臣下の記憶を戻す術が君にあるのか？」

「…！」

——— ああ、哀しいな…。

必要なのはわかっているが、メインヒロインの傷を必要以上に抉りたくはない…だから、頼む。はやく、ランドソルを離れてくれ…ここに君の居場所は無いのだから…。お願いだ、僕も君の涙を望んでいるわけじゃない。

「…でも、私はユースティアナ・アストライア、この国を護る義務があります。城を、私の大切な居場所を奪われたまま逃げるなんて出来ません！」

「だが、今は離れる。君の真実を知っているのは僕だけだ。ふたりだけでは、偽の王女は愚か王宮騎士団すら相手どれすらしい。残念だが…」

「諦める…と言うのですか？」

「そうではない。…今一度、旅に出る。そこで紡がれる絆がきつと貴女の進む先の標になるはずだ。いずれ、運命に立ち向かう日が来る：それまで、耐えろ。一時の感情に振り回されるな。大局を常に見据えるのだ。」

★ ★ ★ ★

……

……

——それから、名前を失った少女は再び旅に出た。

その背を見送るのは見知らぬ黒騎士、背負うは未来を担う期待ではなく忘却の空虚。此度の門出に笑顔の代わりに涙に濡らした頬が夕焼けが照らし、走る独りぼっちの影法師を夕焼けが引き伸ばす…

やがて、街道の彼方に彼女が見えなくなるまでカリバーは見送った……せめて、それくらいしかしてやれないから。

………それに

「気づいてますよ、師匠。」

「ほう？ 勘がいいな、我が弟子。」

木陰で息を潜めていたクリスティーナの存在……どうやら、カリバーをつけてきたようだ。彼女が前に出てきていたら、何をするかわからなかったからだ。

「お前、気づいていたのか。このランドソルに蔓延る違和感に。」

「ええ。ランドソルの街中に堂々と蔓延る魔獣… 人間が治める国の直系の王女が獣人族…極めつけはあの自らが王女と名乗るあの娘。自分で言うのも難ですが、素性の知れぬ妙な騎士を配下に躊躇いなく入れたり…疑問を持つなということが難しい。」

「ほう、思った以上だな。多くの人間はこれらに何の疑問は持たぬというのに。やはり、お前も何かしらの『特別』なのか？」

クリステイーナ、彼女の破天荒な行いに目が行きがちだが王宮騎士団・副団長として相応しい実力の持ち主。そして、王宮騎士団にて数少ない『ランドソルの現実』の端に気がついた者：侮れない。

そんな彼女にカリバーは答えることはない。彼自身だって自分がどんな意味合いを持つ『特別』かは解りきっていないのだから。

「この際だ、後で色々聞かせてもらおうか。それと、『もうひとり』を開放してやれ。」

「…？」

え？ カリバーが首を傾げていると、月闇からカタカタと震えて反応を示す…。試しにブンツと振るうと闇の塊が切先から飛び出して運悪く暗黒空間に取り込んでいた『もうひとり』を吐き出した…。見覚えのある猫耳と尻尾……あ。

「キヤルちゃん…」

「いたた…、ここ何処なのよ？」

キヤルちゃんだ…ペコリーヌと一緒に間違つて暗黒空間に取り込んでしまったらしい。ああ、これは良くない。実に良くない…なんて誤魔化せば良いのやら。

「か、カリバー！ そうだ、侵入者はどうなったの!？」

「(ええい、ままよ…!) 覚えていないのか？ 幻術で逃げた侵入者を追っていたのは他ならないキヤルちゃんだろう。それを追ってきた我々はここで倒れている君を見つけたところだ。見たところ、酷く頭を打っているようだな…記憶が混濁しているのかもしれない。」

「は？ 頭なんて別に…」

——ゴツ（キヤルちゃんの後頭部を峰打ちする音）

「きゃるっ!？」

誤魔化せたな（物理）

クリステイーナが背後から思いつきり、大剣で

殴りつけて何の罪も無いキヤルちゃんはスタン状態になり、気絶する…頭には星がまわっているし当分目を覚ましはしないはず。

「さて、騒がれると面倒だからな。取り敢えず、医務室に急用が出来た…城に戻るか。」

「ああ。（ごめんね、キヤルちゃん…）」

罪悪感を覚えながらも全ては原作準拠のため…カリバーはキヤルを担ぎ上げ帰路につく。

まだ物語のはじまりには至ってはいない。だが、やることはある…

（まずは、アナザーオーズ…奴をどうにかしなくては…）

★ ★ ★ ★ ★

…夢も無く

…行く宛もなく

…名前すら無くなってしまった

夜もふけ、真つ暗になった森の道。もう走る気力すら無くなってしまった王女の足取りは暗く、鉛を引き摺るように重い…。どうしてこんなことになってしまったのか、これからどうすれば良いのかわからない。カリバーはまた旅に出ろと言ったが、もう自分の旅に目的は無いのだから。

(辛い… もう前を向きたくない… 私は…)

—ぐぎゆるるる…

「…」

それでも、どんなに苦しくても腹は減る…

胃袋が命を紡げと主に唸る。

ああ、我ながら呆れた。気分はなにひとつ食べ物など喉を通らなそうなのに。

「穴が空きそうなくらいペコペコなのに…、何も食べたたくない…。わたし、壊れちゃったんですかね…。もういいや、疲れました。」

糸が切れた人形のように、そこら辺の草むらに身を投げ出す…。夜空は星々が煌めく闇の絨毯…吸い込まれていきそう。いっそ、このまま果てない暗黒に吸い込まれてしまえばいい…。

『…こんなところで寝るやつがいるか。』

「…」

ぬう…と突然、視界にもつと真つ黒な顔が割り込んできた。白濁した白眼にズラリと並ぶ牙は怪物のそれなのに、全く恐怖も動揺もない彼女。普通の人間なら悲鳴をあげているところだが…傷だらけの胸には虚しさだけしか充たされていない。

『少しくらい驚いたらどうだ？』

「あなたは…死神さんですか？」

『…残念だったな、俺はデザスト。…ただの醜い怪物でお節介焼きだ。』

現れたのはデザスト…彼は包を少女の横に置く。それは、いくつかの握り飯…世話焼き心配性従者のお手製で本来は『主』のために作られたもの。もう冷えてしまっているが、包紙が保存向きの材質だったのかまだ食べられるほどもちもちと弾力があって柔らかい。

『食べ…足りないらしいが。なんなら、口に突っ込んでやろうか？』

「随分と親切な死神さんですね。折角の懇意を無下には出来ません…いただきます。」

起きあがる少女は怪物からおにぎりを受け取るとほうばった…。

怪物の握り飯…特に何の変哲もない塩味の握り飯。主を想って故か、塩は控えめでありながら食べやすい大きさ。作った従者の温もりを感じる事が出来る。それは、本来の想い人の胃袋におさまることは何一つなかった。

仄かな暖かさは何よりも、少女が飢えていたものだったのだから…。

「うえ… ええ… …ええ… …」

『…泣くのにも存外、エネルギーを使うからな。泣き疲れたら、眠るといい。忘れられても、お前が生きることが望む者は確かにまだいる。』

そして、怪物は背を向けた…。

己の役割を終えた役者が舞台を去るように…

『…ではな。』

——またね、ペコリーヌ。

サレンディア救護院に行こう！ (唐突)

サレンディア救護院に行こう！ (唐突)

「——は？」

アナザーオーズ襲来・ペコリーヌ逃走からおおよそ1週間…

僕はそんな提案を出した騎士団長ジュンに首を傾げた。一応、王宮騎士団の幹部会議の最中だ…唐突な議題に面食らっている。この議題を持ってきたのは理由は何なのか…アナザーオーズはまだ捕まっていほしいし、その正体の目星すらついていない。そんな中、奴からの襲撃は度々続いているのに加え、騎士団員や一部の大臣などが死んでこそいないが被害は看過できない…。

それを今、どうして救護院に行かなければならないのか？

騎士団長によれば…

「戸惑うのも無理はないか。君達も、前・副団長であるサレンの一件が記憶に新しいだろう。本人の希望もあって、既に彼女は療養施設から帰っているが、気にかけて不埒な輩を近づくとも限らない。」

「つまり、同じプリンセスナイト傘下ギルドに騎士団長と副団長自らが出向くことで周回に睨みを効かせてやるということだな。」

…成程。 ……いや、待て待て待て待て

「お待ち下さい。王宮騎士団の中核であるおふたりが御自らとなれば、城の護りは…」

「その点は抜かり無い。不在の間は君と彼女に任せる。」

僕かッ!? あと、彼女って…ああ、キヤルちゃんか。柱の影でめっちゃムスツして…やっぱり、不服なんだな…。

(ギロツ)

やべ、睨まれた…僕、そんな嫌われることした記憶はないんだが…
(すつとぼけ)

「陛下からの許可も降りている。明日、正午に起つ。指定された団員はくれぐれも遅れの無いように。」

そして…騎士団長の号令にて、解散。やれやれ、と集まっていた団員たちも持ち場に戻っていく…さ、僕も帰ろう。大事な見回りがあるんだ。サンタキョウカちゃん筆頭のリトルリリカル欲張り年越しセツトが僕を待って…

「——おい」

—グイッ

ぐえっ

不意に首根っこを掴まれて…あ、師匠。僕は特に用事は無いんですが…

「話がある、ついてこい。」

あ、そうですか…。(諦め)
グッバイ、キョウカちゃん。

★ ★ ★ ★ ★

翌日

サレンディア救護院にて。

「…」段落ね、取り敢えず。」

まだ全快とはいかない身体を動かし、子供たちとの昼食を終えたサレンはやっと訪れた休息の一時に溜息をつく。身体が本調子で無い分、やっぱり気疲れしやすい…でも、子供たちには自分しかいない。孤児たちの親代わりであり、このギルドの中核である自分が立ち止まったりしたら仲間のスズメに迷惑がかかってしまう。特に怪人化の一件は心身共に強い負担を強いてしまった…。

(しっかりしろ、あたし！ ……しっかり ……しないと…)

自らを奮い立たせようとするが、どうしてだろう…その度に胸の奥に隙間風が吹きぬけるような寂しさを覚えるのは。何も悲しいことなんてないはずなのに。どうしてこうも、力が入らないのか…

「怪人化の影響？」でも、身体には異常が無いって話だったし…どうしちやっただの…。」

——力み過ぎなんだよ、お前は。ほら、洗濯物だ。

「…。」

あれ、今なにか聞こえたような？

顔をあげると窓の外で午前中に干していた洗濯物を見慣れたメイド姿の背中と子供たちがカゴに取り込んでいる。特に変わった様子は無い…無いのに……

「…誰かが欠けている気がする。」

ギルド・サレンディア救護院は中核である自分とスズメ…あとは子供たちしかいないのに。やっぱり、疲れているのかも…

一応、これから来客もあるのに。



それから、暫くして…

「サレンちゃん、身体の調子はどうかな？」

「ええ、おかげさまで。普段の生活には特に支障は無いし…感謝しているわ。」

王宮騎士団一行は救護院に到着。テーブルに着き、サレンと向かい合うのは騎士団トップであるジュンとクリステイナのふたり…一般の団員たちの大半は外で見回りにあたっている。数名の団員が残る中、彼女たちの話はピリピリとした空気で進み、察した子供たちが物陰に隠れながら様子を窺っていた…

「それはよかった。そんな君に失礼は承知だけど、君が怪人化した時に持っていたあの本…出処に心当たりは？」

「…療養中にも話したけど、全く心当たりが無いの。暴れていた時とその前後の記憶はすっぽり抜け落ちていて。」

「そっか。いや、良いんだ。嫌なことを訊いてしまったね。しかし、今回の一件のこともあって大変だっただろう…元より救護院の運営は切迫していると聞いている。私からの提案なんだが…この際、プリンセスナイトの傘下のギルドとして手を…。」

「その話は以前からお断りをさせて貰っています。」

ジユンは王宮騎士団と救護院の提携を切り出す…無論、善意だ。しかし、言い終わるより早くサレンは明確に強く拒否の意を示した。両者のギルドの母体は同じであるが、関わり合いになることを嫌っているサレン…別に騎士団長であるジユンと険悪な仲だからというそうといった理由ではない。

「元より子供たちの支援に関心を示さなかったプリンセスナイトから距離をとるため救護院を作ったのに、傘下組織筆頭である貴女たちと距離を近づけたら元も子もないでしょう。」

そもそも、サレンディア救護院設営は政府中枢を司るプリンセスナイトが孤児たちの支援に消極的だったことも理由のひとつ。声を張り上げ続けるも、聞く耳を持たないプリンセスナイトの人間らに対しついに我慢の限界を迎えたサレンは積み上げた王宮騎士団・副団長というキャリアを投げ捨て、孤児たちを保護するギルドを設営するに踏み切ったのである。

それだけ、正義感が強く優しい彼女だったが…

盟友の崇高な信念の現実をジユンは知っている。

「…サレンちゃん、気持ちは解る。でもね…あんまり、こういうことは言いたくは無いんだけど、融資をまた断られたんだらう?」
「!」

信念・理念だけで全てがうまくいくほどギルドの運営は甘くはなかった…ましてや、孤児遺児支援となれば尚の事。されど、プリンセスナイトから距離をとっている分、支援は無に等しい。だからといって、第三者からの支援も前・副団長の肩書き持つてして何とか自転車営業にこぎつけるのがやっとな有様。ましてや、非営利のギルド…お世辞にもうまくいっているとは言いがたい。

「運営に苦勞していることはこちらの耳にしている。このままだと、そう遠くないうちに限界が来るのは明白だ。このギルドも…君自身も。だからこそ、傘下ギルドの仲間として友として力になりたい。だから…」

「気持ちはありがたい…でも、あたしが始めたこと、だから自分でなんとかする。そう決めたから。」

「サレンちゃん…!」

ジュンが説得するも、頑として首を縦に振らないサレン… その時

「オイオイオイオイ、さつきから黙って聞いてりや何なんだアンタはよお?」

突然、ふたりの会話に割り込む騎士団員の男。兜をとり、ズケズケ

とやってくるモヒカン頭…治安維持より専らチンピラ地味た野犬のような顔が牙を剥き笑む。近くにいた女性団員が制止しようとするが、振りほどいて強引に顔を突っ込んでくる。

こんな無礼極まりない行為、勿論ジユンが黙ってはいない。

「無礼な！誰が口を挟んで良いと言った!？」

「いいや、挟ませてもらうね許可なんて貰わなくても！前・副団長様どうにも気に入らなくてねえ！」

しかし、男は全く怯まずサレンに噛みつく。

「元副団長さんよ、アンタの理想は立派だとも…なんたつて『聖女』とまで言われているくらいだもんなあ。身寄りの無いガキどもを一手に引き取るなんてそう出来るもんじゃない。でも、本気で救う気があるのか？理想を追い求める自分に酔っているだけじゃないか？」

「…なつ、なんですって!？」

「だって、そうだろ？他人の手は借りてえが、元仲間の助けはカンに触るから借りたくねえとか損得勘定抜きにしたただのエゴじゃなきゃなんだって言うのかなア？産まれも才能も、何もかもを恵まれながら出世を蹴って偽善に走るなんざ残された俺達を馬鹿にしてるとしか思えねえ！他の奴等もそうだろ！」

辛辣な言葉…でも全てが間違っではない。

男の言葉に目を逸らす他の団員たちが、何よりも証拠。皆が何処かで思っていた…義憤を抑え、他人の不幸に目を瞑ればどれだけ輝かしい誰もが羨む未来が待っていたか。かつて、彼女の門出を祝った者でさえ片隅で愚かなと惜しむ思いがあつたのだ。だからこそ、暴力地味た論でさえ誰も『違う』と否定出来ないのである。

空気の流れは最悪、まずいと悟ったジユンが強引に止めに入った。

「やめないか！ クリスちゃんも止めてくれ!!」

流石にここまで事態となれば止めに入るであろう現・副団長…さ
れど、ジユンが言葉を強くしても彼女の目は泳いでいた。心ここにあ
らず、まるで別の何かに気をとられているように…

その時だった…

——お前みたいな奴等がいるからア…！

「！・」

地鳴りのような声、憤怒に帯びていたおぞましい憎悪が救護院を満
たす。

直後、戸惑う面々の前に黒いヘドロのようなものが床から滲み出し
怪人として形を為す…

「オーズ！！」

招かぬざる客、アナザーオーズの襲来だった。

転生カリバーさん、死す（窒息）

『許さない、お前みたいな奴等がいるから……!』

唐突なアナザーオーズの襲来。

同時に大量の屑ヤミーたちも屋内と外にも湧いて、団員たちは浮き足立つし子供たちはあつという間にパニック状態だ。すぐさま、ジューンは剣を抜きサレンは子供たちを庇い孤児院の外に逃がそうと行動に入る。

阿鼻叫喚。最中、アナザーオーズはサレンを責めていた団員に牙を剥きクローを振り上げるが寸前でクリスティーナが剣で割って入り受け止めた。

「お前、何を呆けている……!」

「おっと、すみません。お仕事、お仕事。」

団員の男は借りにも上司に庇われたにも関わらず、ヘラヘラとしながらやつと剣を抜く。そのまま近くの屑ヤミーの頭を鷲掴みにするなり、『オラア!』と壁に叩きつけてフラフラする背中を滅多切り：お巡りさんよりかはチンピラ寄りな剣法は周囲の花瓶やテーブルなども破壊していく。

一方、アナザーオーズはクリスティーナに蹴りとばされて窓から外に放られ：運悪く、子供たちを連れて逃げるサレンの前に。呻きをあげながら立ち上がる怪人に咄嗟に剣を抜き構えるサレン：…だったが、その前に団員のひとりが立つ。

「……は僕に任せてもらおう。」

「……へ?」

灰のような銀髪に眼鏡…団員にこんな人間がいた記憶は無いのだが……

(…覚えてないのか。まあ、面会もしなかったしな。)

残念そうに団員は顔をしかめながら、邪竜が描かれたライドブックを取り出す…そう、彼は…

「ジャアアクドラゴン!!」

★ ★ ★ ★ ★

「——変身!!」

「ジャアアアクドラゴン!!」

月闇の柄でドライバーのライドブックを開いて変身完了、仮面ライダーカーリバー見参。うん、サレンは変身終わった僕の姿を見てやっと『あの噂のー!』という顔…もしかしてこの格好じゃないと印象残らないのか僕。こっそり、一般団員のよろいを着て紛れこんで救護院に来たが特に誰も気にしなかったぞ…

『カーリバー!? 何故、ここに!?!』

アナザーオーズが大袈裟なりアクションしている。

まあ、驚くほどのことじゃない。師匠に『鎧着込んでついてこい』と言われただけ…お留守番はキヤルちゃんに任せて(事後承諾)恐らく襲ってくるであろうお前を待ち伏せしていたんだよ。そして、僕が本

来ならここにいないというのを知っているというのことは…

「お前、王宮騎士団の人間だな。」
『ッ!?!』

凶星か。と言つても、この予測は既に師匠が考えていた内容を吹き込まれただけで、僕自身は皆目検討もついていたのは内緒。サレンも『なによ、それ?』と戸惑っているが事情は僕にもわからない、これ以上はクリスティーナ師匠は説明してくれなかった。

取り敢えず、素性の一端がわかったところでダメ元で投降を呼びかけてみるか…

「悪いことは言わない、本をこちらに渡せ。貴公には過ぎた力だ。」
『うるさい!あの女のお気に入りなんて気に食わない!!八つ裂きにしてやる!』

知ってた(予定調和)

両腕のクローを展開して襲いかかってくる。こちらも、月闇で弾いて応戦:カンッ!!カンッ!といなしてからの蹴って跳躍。相性が噛み合わないアナザーライダー相手は必然的に火力勝負になるので、お気に入りの青いライドブックを使う。

「キングオブアーサー!!」

「むんッ!」

召喚の勢いで振り下ろすキングエクスカリバー、元ネタがあのアーサー王の剣となれば威力は伊達では…

『やはり、お前の剣は芸が無い。』

—ガッ!!

っ!?

★ ★ ★ ★ ★

青い大剣が異形に届くことはなかった。

振り下ろしきる寸前で、アナザーオーズはキングカリバーをスライディングからカリバーの懐に入り、蹴り上げて弾いたのである。当然、それなりの質量のものが急にあらぬ方向を向けばバランスが崩れてしまう。そこを問答無用にクローで斬り裂くアナザーオーズ。

「ぐああああっ!?!」

火花をあげカリバーは地面へ転がり、拍子で主の手から離れたキングエクスカリバーとライドブックはアナザーオーズの手がキャッチ。そのまま、ライドブックを胸に押しあて吸収すると蒼き大剣はドロドロと形を変え細身な片刃のシンプルな剣『メダジャリバー』へと変化した。

怪人グリードから奪った力(コアメダル)を己のものとするオーズの性質が、ライドブックという異質な核のアナザーライダーであるからこそ出来た技なのか。はたまた、欲望の王と王の剣の物語が相性が良かったからかは謎だが転じてかなりのピンチである。

『ふむ、悪くないな。よく馴染むー!』

感触を確かめるアナザーオーズ：馴染むってそれはそうだ、元々は奴自身のオリジナルが使っていた武器なのだから。

『ゆくぞっ！』

「！」

直後、カリバーの眼前に異形の影

繰り出される残像すら置いていかれるような素早い剣戟が迫り、月闇が暴れまわるように弾き続ける！ 甲高い鉄の音の連打と達人というよりかは人の域を脱したかのような両者の立ち合い、近くには旋風が起きそうな激しい乱舞だが確実にカリバーが圧されつつあった。一撃、また一撃と紫の鎧が裂かれて血飛沫が跳ねていく…！

「ぐ…！ あ…！」

『お前の剣、妙だ。太刀筋は悪くないのに、まるでスカスカ…形だけで中身がまるで無い！』

「うるさ…い…！」

このままではジリ貧だ。

悔しいが剣では勝てそうにない。ならば、わざわざ相手の得意分野で戦う必要は無いのだから と間合いをとったカリバーは控えのライドブックを取り出して月闇に読み込ませる。

「ジャアクケルベロス！！」

「これでどうだ！」

切先から放つ雷の潮流。しかし…

『無駄だ。』

「!？」

これをなんと、アナザーオーズは下半身を蝟のように変身と肉体を半ばスライムのように変質させて潜り抜けた。

液化化、特定のライダーや怪人が持つ強力な特殊能力：オーズもこの能力を持つ。おまけに電撃を扱う分、こちらの雷に由来する力は減衰か通らない。

『ハーハハハッ！』

「…しまっ」

こうなつてはもう完全にアナザーオーズの流れ。下半身の触手に絡みつかれた上に液体化した異形の肉体が呼吸を奪いつつ、今度はカリバーに高圧電流を流しこむ。暴れて振り解こうとするカリバーだったが、獲物を捕えて離さない蝮の力は尋常ではなくライドブックも手を伸ばすことすらかなわず徒労に息を消費するだけ…

「ゴボボボ…い、意識が…」

ついに視界も暗くなり、意識も遠のいていく

駄目だ、この…ま…ま…までは……

「ゴボツ…」

限界。

ついに、完全に生命に必要な酸素を使い果たしてしまう。いくら闇の剣士として凄まじいポテンシャルを持ってど、人間という枠組みに収

まる生命体では呼吸を封じられるだけで容易く命をなど押し折られるのだ。

糸が切れたように崩れ落ちる紫の鎧……。ガシャン！と無機質な音が響き、それだけで変身者がどうなったかを示すにはあまりに十分。

『他愛もない。』

事切れた騎士をつまらなげに吐き捨てるアナザーオーズ。なら特に用は無いと蝟の下半身でズルズルと彼を己の体内に引きずりこみはじめると取り込んで喰らうつもりなのだろう。歪な欲望の王とて闇の剣士と他のライドブックも獲てしまえばどんな恐ろしい事態になりうるかは誰も検討がつかない……

ジュンや他の騎士たちも屑ヤミーの相手に手間取り、サレンも子供たちがいる手前迂闊に動けない。

……しかし、

「！何をしている?！」

それでも、唯一の蜘蛛の糸となったのは異常に気がついたクリステイナーが咄嗟に身を翻して走り出したこと。七冠の全速力ともなれば、間合いを詰めるなど一秒もいらぬランドソル最速の……

「退け。」

「……!?!」

否、

彼女を後ろから追い越した『炎』がアナザーオーズを勢いよく斬りつけ、カリバーを開放させた。異形の蛸足が千切れ飛び、悍ましい悲鳴が上がる…！カリバーはそこらに転がり、アナザーオーズは完全な実体・基本形態に戻ると己の強化を邪魔にした不屈き者を睨む。許すまじ、力の渴望をもう少しで充たせるはずだったのに…

対して、乱入してきた炎の正体は『少年』。

若草色のマントと黒いマフラー…腹には怪しく橙と漆黒に輝く無銘剣・虚無がおさまるドライバー。その顔は…

「ユウキ…？」

サレンは思わず名を口にしてしまう…

ここ最近になって救護院に幼い従者と共に転がり込んできた居候で、メタ的な視点から見れば原作主人公『ユウキ』、もといプレイヤーの分身にあたる存在『騎士クン』。本来、ある理由からまともな倫理観・思考能力を失い赤ん坊レベルの自我までになってしまったはずだが…その顔に子供のような緩んだ笑みも立ち振る舞いひとつ無い。歳に不相应な眉間に皺を寄せる鋭い眼つきに、浮かび上がる焼け爛れるような涙腺。間違っても赤ん坊なんて言えるものか…もつと熱く危険な『何か』。

熱風が辺りを支配していく中、彼は一冊のライドブックを取り出す

…

「エターナルフェニックス!!」

——かつてより伝わる不死鳥の伝説が今、現実となる！——

開放されたのは永遠なる不死鳥の本。

それをドライバーにセットすれば、獲物を追う獣のような乾いた疾

走感の溢れる駆動音が響く。

『何者…!』

「——シートツ…」

アナザーオーズを嗜めるように人差し指を口元に…

そして、剣はドライバーから炎を迸しらせ、勢いよく引き抜かれる。

「抜刀!!」

「変身。」

「エターナルフェニックス!!」

——虚無! 漆黒の剣が無に帰す…!」

次の瞬間、彼は自分の背中から生えてきた灼熱の翼に包まれ変身。黒と橙の燃え盛る業火のような荒々しく鳳凰のような意匠も見て取れる騎士がそこに立つ…

かつて、オリジナルのセイバーの物語で立ちはだかった世界に絶望した不死者・バハトの使う力と全く同じ姿、万物を滅却する永遠の戦士にしてダークライダーの系譜…その名を

——仮面ライダーファルシオン

ただ、その名前を知る唯一の者は冷たい微睡みの底にいた。

羽ばたく不死鳥

「――成程な。アナザーライダー、資格無き者が力を獲て生まれ、歪められた英雄像が化物になったもの…それがあの怪物らの正体。その誕生には悪意ある何者かが関わっていると。」

時間は1週間と少し前…ペコリーヌ脱出の直後の辺り。変身したままのカリバーとクリステイーナは夜のランドソル城広間にて話をしていた。お互いに知りたいことがあるからこそその情報交換…無論、両者とも全ては包み隠さず話すつもりは無いのだが。

取り敢えず、カリバーはアナザーライダーについての情報を提供する。

「ただ、僕の知るソレとは差異がある。僕の知るアナザーライダーは『本の怪物』なんかじゃない。元々のアナザーライダーが何かしらの原因で変異したか或いは、本の力でアナザーライダーを再現しようとしているのか。何にせよ、自然に発生するものじゃない。」

「では、悪意ある者がいると仮定して目的はなんだ？」

「わからない。むしろ、本に落とし込むことで僕がその力を使える以上、かえって不利益なはずだ。」

カリバーは自分が転生者やセーフポイントに案内役ヒルマのことは伏せる。一応、出自に関しては団員に登録する際に本の噂を耳にして遙々東の最果てから来たと伝えてある…殆ど嘘は言っていない。まあ、転生者云々はカリバー自身もうまく把握出来てない上に伝えたところで余計な混乱があるだけだろう。

さて、一方のクリステイーナは…

「まあ、そこは追々考えても詮無いことだ。そう言えばお前には伝えていなかったことがある。貴様のような本の剣士だが…どうやら、お

前だけではないようだ。」

「……」

「その様子から見るに知らなかったようだな。」

もうひとりの剣士…聞き捨てならない。

「ランドソルの昨今流れてきた噂に『炎を操る剣士』が都市内に沸いた魔獣や郊外に棲み着いている怪物や賊どもを一網打尽にして荒稼ぎをしているというものがある。だが、姿を見た者はごく僅かでギルド管理協会もその素性は知らんとのことだ。陛下もその足取りを裏で熱心と追っているようなのだが…心当たりはないか？」

——炎を操る剣士

カリバーの脳裏を過るふたりの仮面ライダー…セイバーの物語において、各騎士において司る属性はバラバラだが『炎』だけは2人いる。ひとりは言うまでもなく、炎の剣士である仮面ライダーセイバー…物語の主演である彼。

そして、あともうひとりは…

「…（出来れば、あまりこちらの可能性は考えたくはないが…）」

「——アイツが言っていた不死鳥の剣士、ファルシオンか！」

吹き荒れる変身の熱風に煽られながらクリステイナはファルシオンが先日、カリバーから教えられた不死鳥の剣士だと察した。つまり、奴がランドソルで魔獣狩りで荒稼ぎしていた謎の存在の正体。

一方、ファルシオンは周囲を気にすることなくアナザーオーズに一瞬で間合いを詰め無銘剣・虚無で斬りかかる。滅却の業火を纏う斬撃は剣に優れたアナザーオーズでいなしきれるものではなく、今度は彼女側が圧されていく。重い一撃一撃、液状化して間合いをとろうとしても高熱の一太刀が熱波となり離脱を許しはしない。チートの権化と名高い液状化の能力だが、弱点としては透過が不可能である熱や光といった非物理の範囲攻撃には弱い：ファルシオンの剣撃が放つ熱波はその唯一を突くに充分なものだった。

『く、くそー！』

「弱い：弱すぎる。その剣の扱いを見るに素人ではなさそうだが、小細工と小蠅のような剣捌きで俺には届かないぞ。」

『黙れ！わたしの剣を馬鹿にするなあ!!』

ならばと、翼をはやすアナザーオーズ：飛翔する猛禽と化した異形は一気にファルシオンに滑空して迫る。

——ああ、なんと愚かな。

「地に足つけぬ剣技と地に足がついていない剣は別物だろうに。」

【 必殺黙読！ 不死鳥必殺撃!! 】

こんな程度、彼には猫騙し以下。

素早く背を低くして滑り込むように突進しながら、ライドブックを刃に翳す。同時に刀身はより強い業火を纏い、異形の一閃を鼻先でかわしたながれからすれ違いに強烈な一撃。これを受けたアナザーオーズの翼は散り、無様に地面へと転がった…。

「…強い。」

クリステイーナは直感する…この不死鳥の剣士は自分や騎士団長であるジュンと真つ向から張り合えるかもしれない実力者かもしれない。カリバーが手も足も出なかったアナザーオーズを軽く手玉に取る様は戦慄すら覚える…厄介事は嫌いじゃないが、今のタイミングで敵対はしたくないものだが…

そんな思惑のクリステイーナを尻目に、呻くアナザーオーズへ近づいていくファルシオン。

「さあ、本を渡してもらおうか。持っけてもお前を蝕む呪いにしかならないぞ。」

『…まだ、だ…！ うっ!?』

「！」

その時、遮るようにシユルルツ！と何処からともなく植物の蔦がアナザーオーズに巻き付き、ファルシオンから引き離すように引きずっていく。救護院の方向にジツパーのような空間の裂け目が出来ており、そこから伸びていたと気がついていた時にはもう遅い…炎を飛ばそうとしたファルシオンだったが、救護院に当たる可能性があったため剣先は振り上げられて寸止めされて肝心の獲物は空間の裂け目と共に消えてしまった。取り逃がしたのである。

「…ちっ。まあ良い…」

さて、とファルシオンは今度は転がっているカリバーの元に。虚無の剣先でこ突いてみるが、特に動く様子は無い。

「なにが、『闇の観測者』だ…ただの貧弱な亡者ではないか。『魔女』の

手先なのは間違いないだろうが…」

つまらなげに吐き捨てる興味を失ったのか今度はサレンと孤児たちの所へと歩いていく。サレンはファルシオンのことを知らなかったようでとても驚いた様子で、子供たちは羨望の眼差しを向けている。

「あ、あんた…ソレ……」

「ああ、少し訳アリでな。怪我は無いか？」

幸い、サレンや子供らに目立った怪我などはない。

ただ…

「サレンちゃん、彼は…」

王宮騎士団がファルシオンを見過ごせるわけもなく、ヤミーを片付けたジユンがサレンに問う。何はともあれ、カリバーに次ぐ新たな本の剣士となれば素性を知りたいとなるのは当然の流れだろう。

すぐにサレンは説明をしようとするが、ファルシオンが制止する。

「王宮騎士団だな。」

「ああ、騎士団団長のジユンだ。まずは助力を感謝する。それと貴公には色々と事情を聞かせて貰いたいのだが…」

「断る。」

「…はっ」

「今は関わるべきじゃない、そういうことだ。サレン、世話になったな…これは家賃だ。受け取っておけ。」

待て…という暇なくファルシオンは不死鳥に変貌して飛び去っていく…金貨・銀貨のありつたけ詰まった大きい革袋を遺して。突然の目まぐるしい展開にこの場にいる殆ど全員が置いてきぼりだった…仕方ないことだろう。されど、放ってはいけないこともある。

「バカ弟子、しっかりしろ！おい！」

カリバー…クリステイナに抱き上げられ、ドライバーから本を引き抜かれて露わになった素顔はまさに死んだ魚。血は通わず、口はだらしなく半開きで瞳は濁っている…。

死体。

闇の剣士はあまりに呆気なくその命を落としていた…

転生カリバーさん、蘇生する（リスポーン途中）

「やっし…」

王宮騎士団から逃れたファルシオン：人目がつかないギルド管理協会の裏に着地すると変身解除。ボツと炎が揺らめいて現れたのは騎士の少年：ではなく、怪人・デザスト。何も知らぬ人間が見たら悲鳴をあげるところだが、ここに人影などない：だからこそ、彼は選んだのである。まだ慣れないこの身体では戦いの後には異形の姿になってしまう。人の姿に為るためには『コレ』がいる。

「スピリット」

ドライバーに接続する若草色のライドブック：すると、瑠璃色の光に包まれてデザストは騎士・ユウキの姿へと変身したのだった。

これで一安心、ドライバーをしまおうと残った若草色のライドブックを手に取り彼は呟く。

「すまない、もう少しあの場所にいたかっただろう。」

この姿、この肉体は自分のものじゃない。ましてや、この物語自体が本来から自分が居て良いものではないのだ。

しかし、為さねばならぬことがある。

だからこそ、この肉体を：物語を借り受けたのだ。そして、必ず返すと誓った：全てを全うし、全ての命を救った最後に。この若草色の本は怪物の姿を隠すヴェールだけではなく、その誓いの証という意味を持つ。

「今暫し耐えろ、全ては忌まわしき『魔女』を討つために。そして、お前の悪夢も必ず断ち切る…。そのためにも、今の足がかりはあのカリバーだけだ。奴を辿れば必ず…」



——やだ、僕弱すぎ？

あーなんてざまだ。2度目の死がこうもすぐに来るなんてゴーストもびつくりだ。タケル殿、笑ってごめん…呼吸も身体の自由も奪われて高圧電流で感電させられれば普通に死ぬ。身体はともかく、元々がただの一般人だったことをホームラン級フルスイングで現実が教えてくれる…主人公補正つてなんだ。
教えてくれ、キャルちゃん…緑のクソ眼鏡はジュエルを砕くだけだ。

「——さ——」

せめて、美食殿には合流したかったなあ…

転生して良くなったのは民間の事務員から公務員騎士になったことぐらい。ヒロインだって出会ったのなんかほんの一摘み…あんなまじりゃあないか。

「——カリ…— さ…—」

あーやつぱり、僕にカリバーなんて務まるわけ…

「——こつちを見てください！ カリバーさん！」

あれ？何か聞き覚えがある声…

ん？闇の中でキョウカちゃんが浮かんでるな？

「あなたにまだ死なれては困ります！ 『闇の観測者』としての使命があなたにはあるでしょう！」

…闇の？ え、なにそれ。

キョウカちゃん、まだ中二病にははやいぞ。君のご両親も泣くぞ、その齡にしてそんなセンスは…ぶつちやけ、死に際に見る光景が中二病幼女とか僕自身が泣きそうだ。申し訳ないよ、なんかこう…色んな方々に。

「ふざけてないで…！ ああ、もう取り敢えずもう良いです。とにかく、この質問に答えて下さい…」

——貴方にとって『闇』とはなんですか？」

…

…

………はい？ (困惑)

えーと、どういうことだ？

もしかして、僕のことを遠回しにロリコンって言ってる？（震え）

「(カチン)」

ザクツ（顔面に月闇がブツ刺される音）

★ ★ ★ ★

「ギャアアッアッアッアッアッ!?!?」（飛電特有の汚い悲鳴）

キョウカちや…!? あれ、なんともないぞ。

中二病幼女に顔面ストレート（剣）を喰らわせられたと思ったら、飛び起きて微妙に見知った天井。揺り椅子に眠らされていたので、拍子でぐらぐら前後している…。我にかえって辺りを見回せば黒い本棚のアジト、即ちセーフポイントだなここは。しかし、何故？僕は死んだはず…

「…夢?」

「夢じゃないわよ。アナタは死んで、ここにリスポーンしたの。取り敢えず、記念すべきファーストデスおめでとう☆ 残機概念は無いけど、くれぐれも連続で死に続けないようにね。面倒だから。」

ヒルマだ。ああ、そういえばここに来たばかりの頃に言っていたな。死んだとしても、このセーフポイントにリスポーンしてやり直せ

る。あと人の死を祝うんじゃない。

あとなにかあった：——そうだ！

「アナザーオーズは!?」

「：そうね、それに関してはちよつと予想外の流れになつて。」

『見たほうが早いかも』とヒルマ：指パッチンすると空中に映し出されるホログラム。ん？騎士くんが何か見覚えがある剣を：あれ無銘剣虚無じゃないか？：つて変身した!?しかも、そのままアナザーオーズを圧倒している!?

(あ、赤ちゃんの戦い方じゃない：)

騎士くんといえば、基本的に戦闘においてはヒロインたちの力を引き出すバッファアール以上は目ぼしい戦力となることはアニメにせよゲームにせよ稀だったはず。無論、普通の騎士くんなら仮面ライダーになるなんてありえない。加えて、あの剣技に身のこなし、時系列的に見ても場合によっては剣の師事をするペコリーヌと合流はしてないだろうことに目を瞑つてもおかしい。

：：どういうことだ。と思つていたら、ヒルマが話を続ける。

「あの無銘剣虚無は私の紛失した聖剣の一振り。なんで、あの子が持つてるのかしら：：おまけに使いこなしてるなんて。」

「君が手配したんじゃないのか？」

「違うわ。私が手配したのは貴方だけ。彼の面倒まで見る必要もないもの。」

ヒルマも無関係？いや、聖剣を紛失というのは問題だが。ふむ：謎は膨らむばかりだが、考えられる可能性としては…

(：：何らかの理由で自我が完全にあるのか。：：もしくは憑依系の転生

者?)

騎士くんが本来の人格を取り戻している可能性と、原作のキャラクターに人格が成り代わる憑依系転生者。僕のような場合と違い、人格の問題さえクリアすれば既存のキャラ設定をそのまま継承して転生した世界に馴染みやすいのが利点だ。二次創作界限でもこの手の主人公の人気は根強い。

ただ、問題として…

(なんにせよ、物語が原作通りにはいかないということになるな…。)

騎士くんがどんな形にせよまっとうな精神ならばもう原作通りという筋書きは通用しない。スタート地点から違う、そこから築いていく人間関係もまた差異を産んでいく…最悪、ペコリーヌらと出逢わない場合は完全に物語が破綻するぞ。

…頭を悩ませていると

「基本、放任させるつもりだったけど事情が変わったわ。貴方にミツシオンを与えるわ。」

ヒルマ…?!

「あのファルシオンについて調べなさい。場合によっては、聖剣の奪還を何よりも重視して…最悪、彼の生死は問わないわ。」

「…戦つても勝てる気がしないんだが。」

「何回死んでも、相手が死ぬまで殴り続ければ勝てるわよ、いずれ。そのためのリスポーンでしょ。」

プリコネでどうしてそんなダクソかブラボみたいなことしないといけないんです? (絶望)

転生モノ数あれど、そんな扱いされるオリ主なんて早々いないだろう。…あんまりじゃないか(血涙)。フロムゲー系オリ主は人気でも、フロムゲーの世界に転生するやつはおらんやろ。しかも、大抵は強くてニューゲームだろそのジャンル。僕の初期ステはカリバーであること以外、カス以下だぞ(自己申告)

「あーもう、ゴチャゴチャ煩いわね。やれやれ、じゃあこれを装備に追加してあげるから頑張りなさいな。」

「うお!?」

そして、ポイツと投げ渡されたのは…雷鳴剣 黄雷!? 確か、外に刺さってたやつ…

「それじゃ、頼んだわ。」

…待っ



「さて…ね。」

カリバーが消えたセーフポイント。

ヒルマは独り考える…あのファルシオンは何者なのか。騎士くん||ユウキのことだつて把握している。プリコネという物語において本来の主人公であり、物語の主軸になる少年…世界の選択権を握る存在。可能性の交錯、しかしこんな事象は自然には起こらない。

「…お前が誰にせよ、これが最後のループ、『最後のデヴオリューショ

ン』を邪魔させないわ。」

映像にはアナザーオーズに勝利をおさめたファルシオンが映る…
それを鋭い目つきでヒルマは睨みつけた。

そう聖剣使いは自分の手許にだけいければ良い。

今更、イレギュラーなどあつてたまるものか。

転生カリバーさん、蘇生する（スリスリの変態）

——別に、死ななくたっていいじゃない。

医務室のベッドで冷たく硬くなった彼にキヤルは思う。

本来、自分と留守番するはずだったこの男は書き置きだけ残してホイホイとサレンディナ救護院の訪問団についていきやがった。すぐに察した、クリステイナーが手を回したのだ。恐らく、昨今問題になっているアナザーライダーとかいうバケモノ絡みだろう。

よくも自分を差し置いて……！帰ってきたらシバき倒してやると思っていた矢先、慌ただしく担ぎ込まれてきた男は事切れていた。ぶつけるはずだった鬱憤は空回りして戸惑いに代わり、我に返った時には王宮騎士団の専属である主治医が『手遅れです……』と呟いていたところである。クリステイナーも珍しく焦燥しながら食い下がってはいたものの結果は覆りはしなかった。死人では誰であろうと手の施しようがないのだから。

（コイツ、身内とかいるのかしら。東の最果てから旅してきたとは言ってたけど……ま、私が気にしてもしようがないか。せめて、安らかに眠りなさいな。……？）

別に自分がこの音にすべきことも出来ることも無い……くるりと背を向け立ち去ろうとした彼女は尻尾に何かが引っかかるような違和感を覚える。振り返ると遺体の手がベッドから垂れ下がり、指が絡んでいる。

「……っ」

うっかり触れてしまったのか……ただ気分があんまり良いものじゃない。しかし、ぶんぶん振って振り解こうとするが離れない……ああも

うなんで…!?

ガシッ

「にいッ!？」

その時、手がギュッと強く力を込め尻尾を握った。
そして、気がついた…

ギョロリと見開くおぞましい男の眼が自分を見ていたことに…

★
★
★
★
★
★

——あ、キヤルちゃんだ。(安堵)

寝たきりの僕のためにずっと看病してくれた…わけではないよな。
何か真っ白になって魂抜けてるし。寝起き？蘇りの拍子に尻尾を掴
んで驚かせて気絶させたつてところか。いやあ、悪いことをしたな…
ん？

(キヤルちゃんの尻尾…)

右手のフサフサとした感覚…キヤルちゃんの尻尾が僕の手の中に

…

「…」

——スリスリスリスリ（頬ずりする音）

…意外とゴワゴワしてる（…・ω・…）

ちよつとまがさしたんだが、背徳感に見合っていないうん。痴漢でシバかれてぐっすり熟睡出来なくなる前にキヤルちゃんを僕の代わりにベッドに寝かしつけてと…ヨシ！

取り敢えず、急ごう…今頃は死人（蘇ったけど）を出したことに揉めに揉めてまくってる頃合いだろう。

月闇もある。身なりはこの際仕方な…

「あ… ああ…」

む？ 見覚えがあるメイドが眼の前に…ああサレンの従者のスズメだったな。

「あ、あなた…死…?!? へんた…っ!?!」

む、どうやら厄介なことになったようだ。スリスリする現場を見られてしまったからには仕方ない。目撃者は居ないに越したことはないけれど、僕とて紳士（？）であり曲がりなりにも騎士…ここは平和

的に解決しようじゃないか。

「僕はカリバー…誰も呼ばないが本名は別にある。そして、この月闇は斬った相手を暗黒空間へと閉じ込める能力があるんだ。君の選択肢はふたつ…この場で見たことを綺麗に忘れるか、秘密を抱いて未来永劫の暗黒を彷徨うか。騎士道精神に則り君に好きに選ばせてあげよう。」

「ひ、ひいいー!」

な? 紳士的だろ?



「…というわけで、事情は理解して頂けたかな?」

「(カタカタカタ…)」

そんなに怯えなくたって良いじゃないか…。(哀しみ)

平和的かつ紳士的な解決はした…。取り敢えず、蘇生に関しては生まれ持った特別なレアスキルということとで誤魔化したのだが…どうにも彼女に僕は恐れの対象になってしまったらしい。いずれ敵対するだろう偽・王女以外は可能な限り仲良くやっていきたい身としては残念な限りだ。

「さて、この際だ。色々と君に聞きたいことがある。良いね?」

「は、ハイ!?! な、なんでしょう!?!」

悲しい出会い方になってしまったことは目を瞑ろう。個人的に色々と気になる点を訊いておこう。まずは…

「彼…不死鳥の力を操る本の騎士についてだ。彼は何者だ？」

まずは、仮面ライダーファルシオン（＝仮称・転生騎士クン）について。ヒルマを強い興味を持っていたし、プリコネの物語において凄まじいイレギュラー…あれの情報がまず欲しい。

「ゆ、ユウキさんのことですか…。ええっと、素性は私にもよくわからなくて。」

元々旅人だったらしいのですが、当分はランドソルに居付きたいからギルドに所属したかったとかで管理協会から1ヶ月くらい前に紹介されてサレンお嬢様が迎えいれたんです…。人手は足りなかったし、ユウキさんが高難易度のクエストもひとりりでバンバンこなしてお金も入れてくれるし、従者のコツコロちゃんも子供たちの面倒を見てくれるので大助かりで頼りにしていました…。

その正体が噂の騎士だったなんて夢にも思いませんでした…。」

…？ ランドソルに既にある程度の期間、滞在している？

待てよ、ペコリーヌの一件がまだ1ヶ月経ってないぞ？ そうなるとゲーム原作にせよアニメにせよ時間軸にズレがあるし、その頃はまだ僕も転生していない…。もしかして、この世界線は思った以上に原作とかけ離れているのか？…まあ、僕やアナザーライダーなんてものが跋扈している時点で今更だが。

取り敢えず、救護院の活動を助けていたのなら善良な転生者なのか？その割にはサレンがアナザーライダー化していたり、彼女らにあまり余裕があるようには見えなかった。

「ああ、どうしよう。ユウキさんがいなければ救護院が立ち行かなくなるのも時間の問題…私がもつとしっかりしていれば…！」

ん？ …待て。

「救護院には融資が出ているはず。そんなに厳しいのか？」

「…そ、そうなんです。ギルド活動をはじめから間もなく融資の大半が突然、打ち切られてしまったんですよ…。理由を訊いても、何処も一身上の都合で出来なくなっただけで教えてくれないんですよ！」

成程、それが疲弊の理由か。

融資が壊滅したとなれば資金繰りは最早、生命線を絶たれたも同然。原作でも火の車だった運営に更にサレンは身を削る事態になったのだろう。

(…だが、何故だ？ 融資が絶たれる理由は？)

疲弊の理由はわかってても、融資打ち切りの原因は謎。考えられるのはプリンセスナイトからの圧力：輝かしいキャリアを積んできた彼女を何らかの形で利用しようとしていた権力者などがいても不思議じゃない。救護院設立はそんな人物たちの期待を裏切ることになりうる…故に行われた報復という可能性。

ただ、あくまで推論だ…。ましてや、そんな卑劣な行いを覇瞳皇帝やそもそも、王宮騎士団の幹部らが許しはしまい。可能性は低い。

なら？

— あるいは、師匠が言っていたな…

— アナザーオーズだったか…今回の件、大体の『黒幕』が誰かは検討がついている。恐らくは我々の身内だ。だが、白昼の下に堂々と素顔を吊るし上げるのは少々不都合が生じるのでな…というわけで

協力しろよ、我が弟子。

そして、言われるがままキャルちゃんに留守番を押し付けてこつそり一般団員に紛れて同行したわけだ。彼女の言葉の意味合いから察するにアナザーオーズの正体に勘付き、それが王宮騎士団の誰かだと割り出したので内密に処理したかったのだろう。結局、誰なのかは一応、教えてはくれたんだが：

アナザーオーズは団員ばかり狙う理由は教えてくれなかったなあ……。それにしても、何故に護りが手薄になったランドソル城ではなく救護院を？師匠はどうして襲われると察知できた？

（――スツキリしないな。どうにも僕には見えないところが多過ぎる。）

「やっぱり、プリンセスナイトの助力を受けるべきなんでしょう。でも今更、どんな顔すれば良いのやら……こんなこと貴方に言っても仕方ないですけど。トホホ……」

スズメはひとりで悩みの渦をグルグルしている……そういえば、サレンは政府であるプリンセスナイトの干渉を嫌っていたとか。救護院の運営なんてプロパガンダにはもってこいだし、そっちが本腰になってしまったとしたら彼女の優しい理想とはかけ離れるだろう。されど、このままでは現実のために理想は折れる……アナザーファイズの件から本当に災難続きで可哀想に……

……待てよ？

（おかしくないか？ 何故、救護院まわりばかりでトラブルが起こる？）

あまりに不自然だ。 2体続けて現れたアナザーライダーは悉く救

護院へ致命的な被害を出している。王宮騎士団もまあボチボチ出ているが屋台骨が揺らぐほどじゃない…

もしかして、王宮騎士団への攻撃はあくまで攪乱で本当の狙いは…

「まずい！」

「え？ 何がです？」

急がなくては……サレンが危ない。

転生カリバーさんと過ぎた力 その1

——とある青年の話。

青年はとある遠方の町に住む豪族の次男坊。

故に彼は産まれながらにして家督を継げる立場にはありませんでした。当主である両親は長男である兄にのみ心血を注ぎ、青年には最低限しか接しません。それ故に自由だった彼は領民と交流を持ち、身の差がありながらも慕われるようになりました…。

ですが、それを快く思わなかったのは兄である長男。いずれ領民からの心が自分に向かなくなると危惧した彼は両親を言い包め、中央の大臣に賄賂を渡して弟である青年を無理矢理に王宮騎士団へ入団という建前の領地から追放をしたのです…。

王宮騎士団は多くの生粋の貴族や有力な豪族の血縁から成る騎士団。青年は片田舎の出身として肩身が狭く、加えて元々の素養が低かったため徐々に孤立していきその精神を擦り減らしていきました。でも、家族が帰郷を許してはくれません…。

辛くて、寂しくて、泣きたくて…そんな時でした。

青年が『聖母』に出逢ったのは

聖母の名前はサレン…王宮騎士団の副団長、彼女の目に『僕』が目にと留まったのは本当に偶々で剣術の稽古で散々先輩方に恥をかかされた夕方。道場の片付けを押し付けられ、泣かされているみつともない姿なんて見られたくなかった…。でも、彼女はそんな僕の手を笑顔でとってくれたんだ。きつと努力は報われる、応援しているからと。

「貴い御方だ、あなたに恥じない自分でありたいと思つて努力した……
剣も！ 知識も！ 魔術も！ 死物狂いで、あなたの隣に居て恥じ
ない騎士でいたいとただそれだけで……！ なのに！」
「どうして王宮騎士団を離れたんですか!? 救護院？ そんなもの、
プリンセスナイトの老人どもの天下り先で充分でしょう!? なんてあ
なたがわざわざそんなことのために全てを捨てなきやいけないん
ですか……!?!?」

「——言いたいことはそれだけ？」

サレンは睨む。夜更けだが、まだ昼間の戦いで散乱する救護院……その隅っこに手脚を縛られ追いやられていた。向かい合う先のテーブルにはふてぶてしく座る甲冑姿のモヒカン団員……昼間、彼女へ暴言を吐いたあの団員である。この場にはふたりだけで子供たちを近所の宿舎に預けていたのがせめてもの幸いだっただけか。

明らかに異常な会話の光景……さながら、犯人と人質といったシチュエーションだがサレンは一切、怯まない。

「悪いけど、あたしは必要だと思つたからやつただけ。子供たちに手を伸ばすことは王宮騎士団にいる限り出来なかった……だから、抜けたの。例え、今が苦しかったとしても一度も後悔なんてしてない。」

「……ククッ。やはり、あなたは貴い御方だ。それで、愚かでもある。だ

からこそ、アナタは然るべきところに居るべきなんですよ…王宮騎士団にね。」

一方、団員は不敵に嘲笑う。その手には穢れたライドブックが握られていた…その本は

「鎧 武」



「じゃあ、お嬢様は…!?!」

「ああ、今頃は敵とふたりつきりだろうな。」

カリバーの予想は的中している。

今、ランドソル城を飛び出した彼とスズメは救護院を目指して走っている。道すがら同僚たちに死人が動いている事態にギョツとされたが構っている暇はない。

「スズメ、君をランドソル城に医務室の手伝いを頼んだ団員が来たと言ったな…それが恐らく敵だ。今の救護院は子供たちもいないし、彼女ひとりとなればまたとない襲撃のチャンスだ。黙っているわけがない!」

「で、でも…!」

「君たちを襲ったアナザーライダーという怪人は原則、自然発生はしない。現れるとしたら必ずそこには糸を引く誰かがいる。目的はなんであれ、彼女自身か救護院に向いていると考えるのが妥当だ!」

…そんなっ!? とスズメの顔がみるみる青ざめていく。無理もない、主をむぎむぎ危険に晒してきたともなれば背筋が凍るだろう。しかし、このまま仲良く走っていては時間を無駄に喰うだろう。仕方ないと月闇とライドブックを取り出すカリバー。

「すまない、一足先にいかせてもらおう！」



「…！」

『驚きましたかあ副団長？　これが俺の力なんですよお?!』

サレンの目の前で団員の青年は和風の落武者を彷彿させる薄汚れた怪人・アナザー鎧武へと変身した。禁断の果実の力を操る鎧武者の戦士・仮面ライダー鎧武…その物語から生まれたアナザーライダーである。

その歪な姿はサレンにも覚えがあつた。

「あなたは…まさか！」

脳裏に浮かぶ薄っすらとした記憶。ギルド管理協会へ救護院運営の相談に向かう道の途中…確かコイツが現れて…そこで記憶が途絶えた。そのあとだ、アナザーファイズの一件を王宮騎士団に保護されて聞かされたのは…

——つまり

『お気づきになりましたかあ？ アンタに本を埋め込んだのは俺なんですよおお…自分で救護院をぶっ壊したら目えさましてくれるんじゃないかって期待したんですけど？ まさか、暴走しても意地でも壊そうとしなかったのは本当に脱帽しますよ。』

一連の全てが彼の仕業。他人の夢を自分の手で壊させる…悪魔的所業。もし、救護院がアナザーファイズの手で破壊してサレン自身がそれを自覚する事態になっていれば…確実に立ち直れなかつただろう。

『本当はここまでする気はなかつたんですから。あなたが悪いんです…俺が投資家ども脅して融資を辞めさせ、そうすれば諦めて現実見えてくれるって。でも中々諦めなかつたじゃないですか、挙句の果てに金づるの男まで抱え込んで。』

「金づる？ ユウキのこと…？ 悪いけど、家賃以上のお金は貰ってないの。あとこんな卑怯な真似をするアナタに彼のことを悪く言う権利は無い!!」

『っ！ そういうこと言ってんじやねえんだよ!!』

自分のことは棚に上げ、逆上するアナザー鎧武。8割はヒステリーに走っているように狂いだし、テーブルを蹴りとばす。そのまま、胸倉をグイツと掴み上げ怒りで燃え盛るバイザーでサレンを睨む。

『アンタは副団長だろ！ そんな小汚え売女みたいに見えることしてんじやねえって言ってんだ！ どんなに言い繕うが俺達を捨ててオトコ困ってるようにしたら見えねえんだよ!!何が、ガキを救うためだ、ああ!?!』

——サレンママどうしたの？ 誰かいるの？

「!」

怒号が響く中、似つかわしくない幼子の声：

救護院のドアから：まさか孤児の誰かが!?

「来たら駄目！はやく逃げなさい!!」

——サレンママどうしたの？

『おや？おやおやおやあ？ こんな夜更けに出歩いている悪い子ちゃん
は誰かなあ〜?!』

青ざめるサレンとニタリと嘲笑うアナザー鎧武。飛んで火に入る
夏の虫とはこのことよ、サレンから手を離れたアナザー鎧武はドアノ
ブに手をかける。こんな非常事態など露と知らぬだろう幼子なら人
質に丁度良い：ガチャリと開ければ

「悪い子ちゃんとは上司に向かって随分じゃないか？ンン？」（27さ
い）

『!?!』

クリスティーナちゃん、27さいが満面の笑みで待ち構えていた。
幼女どころの騒ぎじゃない、面食らったアナザー鎧武に鉄拳制裁が顔
面ヒットし救護院から叩き出すとクリスティーナはすぐにサレンを

助け起こす。

「大丈夫か？」

「クリステイーナ…え、今の声ってあなただったの？」

「そうだが、何か問題でも？」

あ…いや…と目そらしするサレン。仮にも助けに入った恩人にツツコミを入れるのは野暮だろう…今は優先すべき問題は眼の前だ。

『てえんめええ?!?!? なんて、ここにいやがる?!?』

想定外の来訪者と仕打ちに激昂するアナザー鎧武…対して、不遜に笑うクリステイーナ。

「前から貴様が怪しいと踏んでいたからだ。救護院での言動…そして、元々は大人しく犬つ子のようにサレンを慕っていた貴様がある日を境に性格が豹変し血統主義に走り出したとな。噂によれば、愛すべき前・副団長に名前は愚か顔すら覚えられていなかったからとかなんとか…」

「え?…」

面食らうサレン。まさか、動機がそんな程度の理由なんて夢にも思わない…しかし、アナザー鎧武は強く齒軋りをしていた。凶星だったのだろう、声を荒げる。

『ああ、そうだよ！忘れてやがった…部下だったのに！救護院が開いたばかりの頃、すぐに顔を出しに行ったのき…そしたら、すつとぼけた顔で誰ってよ。こっちはずつとアンタを信じてきたのにこの仕打ち…！だがな、神様はチャンスを下さった…この力を授けて下さった…！』

(神様…?)

犯行動機はあまりにも呆れかえるばかりの内容だが、クリスティーナは気づく…力を授かったという言い回しなら、『力を与えた存在』がいるということ。同時に過るカリバーが言っていた言葉…

——アナザーライダーは極稀な事例を除いて自然発生はまず発生しないし、大抵は特殊な存在から力を与えられた人間が変身する。対処は今の所、大火力で押し切るオーバーキルしてコアである本を取り上げるしかない。

——生身の状態で見分けるとしたら、今まで持っていないかたはずの超能力なんかの発現やよくあるパターンとしては『性格の豹変』だ。大人しかかった人間が急に不遜な態度や情緒不安定になったりとか割と目に見えてあったりするぞ。

——ただ、根本的な対処は裏で糸を引く存在を抑えるしかないな。

(…成程。ガッツリそのままだな。)

アナザー鎧武が笑いたくなるほどパターンに当てはまるじゃないか。どうやら、随分とはた迷惑な『神様』とやらがいたものだ…さつさと引きずりだして叩きのめしてしまわねば。どうせ、邪神きどりの類いだ、ぶちのめしたところで罰などあたるまい。

『神に感謝を、私に正しさを与える機会を下さったことを！』
「では、その神とやらについてじっくり洗いざらい話してもらおうか。」

『出来ませぬかねえ？部下死なせる不始末なんてサレン副団長もやってませぬよお?!』

「…ッ」

安い挑発だ。——だが、苛立ちは顔に出てしまうくらい昂る。

そう、自分が大人しく留守番させておけばあの男は死なずに済んだ。失策の責任は、己でつけ…

「死んでないぞ、この腐れオレンジ野郎!!」

ドゴツ!!

『ぐえっ!?!』

「!」

その時、屋根を飛び越えて乱入してきたのはウルフルフェノクのビジョンと共にダブルライダーキックをかましてきた仮面ライダーカリバー。スズメは一端置いて先に救護院へ駆けつけたのである。

無論、彼が生きていた…もとい蘇生したことなんてこの場の誰も知らない。混乱が巻き起こるのは必然…サレンどころかクリステイナーでさえすぐに声が出なかった。

だが、悠長にはしてられない。

『お前、なんで生きてやる!?!』

「ヒーローは一度死んで蘇る…というやつさ。」

『バカにしてんのかア!!』

激昂したアナザー鎧武は次元の裂け目クラックを頭上に生成するや、中から昆虫の蛹のようにずんぐりとした灰色の怪人たちインベス呼び出す。ダース単位の群れだ：アナザライダーとセツトはザコの部類だろうとカリバーだけでは骨が折れるのは明白。流石にまた死にたくはないので…

「師匠…！」

「ええい、話はあとだ。奴を倒すぞ。」

再び師弟の背中合わせ… 闇夜を照らす月光がその行く末を照らす…

転生カリバーさんと過ぎた力 その2

『『『ぐるぐるるるる…』『』』』

「なんだコイツらは？ 蟲かなにかか？」

「インベスだ！ 直に触られたらマズいことに…」

迫るインベスの波を斬りはらっていくクリステイナとカリバー：所詮は下級クラスの怪人でこのふたりなら大した脅威にもなりはしない。だが、生身に爪なんかで直接攻撃を受ければ傷口から種か胞子が侵入して寄生木状態になる恐ろしい一面を持つ。カリバーは良いとして、クリステイナは危険性が…

「愚問だな、こんな虫けらどもが指一本触れられるものか！」

しかし、インベスたちは彼女の嵐のような剣撃の前に爆散：その数をあつという間に減らしていく。この時、カリバーは前世の時の彼女に関する能力を思い出す…。そうだ、この人は範囲攻撃以外は基本的に通じないレアスキル持ちだったな。それなら、緩慢なインベスなんて文字通り指一本触れることすら叶わないだろう。心配する必要は無かったようだ。

さて、この展開はアナザー鎧武にとってはよくないものだ。舌打ちをして更にクラックを開き続ける。

『お前らあ、調子に乗るなあ!!』

異形の叫びに呼応したのか、出現するインベスの数は殲滅速度と拮抗するほど勢いは凄まじい…倒しても倒しても、底なしと言わんばかりだ。

「数で押し切るつもりか！ ならば！」

「キング・オブ・アーサー!!」

対抗するためカリバーはキングエクスカリバーを召喚、二刀流の乱舞で周囲のインベスを薙ぎ払い一網打尽。デカいは正義、デカいは強い、やはり大剣は素晴らしいと言わんばかりの威力だがアナザー鎧武はニヤニヤと笑い余裕すら見せる。

『おっと、真面目にやっているとバカ見ちゃうよ!』
「!」

奴が狙ったのは救護院、柑橘類の断面を模した大剣を振り上げ放つ巨大な斬撃。まずい!と判断したカリバーはすかさず割って入りキングエクスカリバーを巨大化させ大盾代わりにガード。間一髪で間に合ったが、一撃は重く足元がバリバリと砕けてしまう程…

「くっ!…まずいなこれは。」

多勢に無勢…ザコは無限湧き。サレンも剣を持って応戦はしているが、今の砲撃のような大技を彼女や救護院から庇いながら戦うのは現実的ではないだろう。もっと、素早くカタをつける方法があれば…

(打開の一手を…む?)

そういえば、雷鳴剣黄雷をヒルマに渡されてたな…どうして剣をわざわざと思ったカリバーだが、よくよく考えれば月闇で引き出せるライドブックの力は原始の聖剣という特性故か通常の聖剣とは差異がある。今までレジエンドライダーの本で引き出してきたのは月闇による『怪人の力』…逆に、それ以外の聖剣なら…!

「…まさか!」

「ファイズ進化人類史!! 仮面ライダーファイズ!!」
「COMPLETE」

この状況にお逃え向きの力があるじゃないか。

カリバーは月闇ではなく、雷鳴剣黄雷へ翳す…これにより現れたのはオルフェノクではなく赤いゆを象る複眼が輝き、本来胸部にあるベキ装甲が肩にスライドしコアを露出した器械的な白銀のライダー…『仮面ライダーファイズ アクセルフォーム』の幻影。

(うまくいった!)

やはり、月闇以外の剣は純粹に仮面ライダーの力を引き出してくれるのだ…!己の推論が当たったことに喜びが洩れるカリバーに対し、未知なる力に狼狽を見せたのはアナザー鎧武。

『な、なんだソイツはアアア!?!』

「知りたいか?なら、10秒間とつくり味わうと良い。」

口で説明する必要はない、とくと味わえ

——閃光の裁きを

「START UP」

『!』

瞬間、カリバーとファイズの姿が閃光となり消える。

アナザー鎧武が追えたのは紅と紫の残像が次々とインベスを爆殺していき、みるみるその数を減らして自分へ迫っていく恐怖のみ。数秒後…ついに周りで護りを固めていたインベスすら鎌鼬のように斬り刻まれて無防備に。

『くそがアア!!』

もうやけくそに大剣を振るしかない…しかし、そんな程度は軽くカリバーにかわされて跳躍した彼はファイズの幻影と完全にシンクロし、右足から三角錐の紅いポイントを打ち込み拘束しライダーキックを打ち込む。

「はあっ！」

『く、くそ！俺が！俺が、こんなところで…！まだ何も始まってないのに…っ！ 畜生オオオオオオ!!!』

そして、怨嗟と悲鳴の残響を残しながらアナザー鎧武は貫かれて爆発四散。変身者だった団員とコアの穢れた本は投げ出され、地面に転がった。団員は朦朧としている様子で逃げることも出来ないだろう。取り敢えず、これにて『サレンディナ救護院の問題』は解決だろう。少し間を開けてカリバーが幻影と共に着地…その姿にふと違和感を覚えたのはサレン。彼に重なるファイズに強く心と脳裏が騒ぎたつ。

「——大丈夫か、サレン？」

「…タクミ？」

「え」

過ぎった朧気な記憶にふと…口にした知り得ないはずの名前。しかし、反応したのは消えていく幻影ではなくカリバーだった。転生カリバーさんの本名とは違うのだから当然の反応…すぐに自分の行動の奇妙さに気がついたサレンは『はっ!? ゝ、ごめんなさい!』と慌てて謝罪。きつと心身疲労が溜まっているんだらうと彼女自身は胸

の中で結論づけた。何せ色々ありすぎたのだから…

★★★★★

タクミ？ …乾巧のことか？

突然、何を言い出すんだサレンママ。彼女が知るはずもない…プリコネの世界にその名前を持つ男がいるはずがない。仮面ライダーファイズにおいて、タクミといえば主人公である乾巧でこの物語に何の縁もない。なのに何故…

(そういえば、彼女はアナザーファイズだった…何か関係があるのか？)

思い当たる節はやはり、アナザーファイズ化。穢れたライドブックにより産み出されたアナザライダーはもしかしたら、未知の影響を与えるのかもしれない…今後も注意しておくべきだろう。

——別に都合よく会うための口実じゃないぞ。

さて、残るはアナザー鎧武だった団員。穢れたライドブックはクリステイナーが拾いあげ、続いて彼女は団員を『起きろ』と蹴りとばして覚醒させる。ドカッて音した…痛ぞ。

「さて、貴様には色々聞かねばな。」

「…副…団長？ 俺は一体？…ここは？」

「なにを寝言を。この本の出処についてや諸々、全てを話してもらう。その後に貴様には相応の処分が下る…覚悟しておけ。」

「処分？…ま、まっってください!!? な、なにがどうなって…」

ん？ 何か様子がおかしい… 師匠、ちょっと待っ…

藻搔く手がガリガリと顔面を抉り血が滲み出るほど搔きむしっても内側からの激痛は止まらない。

「お、おい…!？」

流石のクリステイーナもこの発狂には戸惑わずにはいられない。カリバーやサレンさえも呆気をとられていると彼は自分の剣を腰から抜くなり首に刀身を押し当てた…。

「許して下さい…サレン副团长…。」

「! や、やめなさ…。」

——ザシユ

転生カリバーさんと過ぎた力 その3

——…血

鋼色の刀身から溢れ滴る赤い雫…

しかし、刃は主の首を搔つ切ること叶わず横から伸びた傷を厭わずがっしと掴む手袋に阻まれていた。

「全く…詰めが甘い。」

見知った顔と冷たい一言…掴んでいたのは救護院を立ち去ったはずのユウキ。少年の体躯でありながら成人の掴む剣は岩に挟まれたようにカチカチと震わすだけで精一杯という異様な握力で自害を許さない。そんな彼に団員はひいひいと泣きじやくりながら懇願する。

「死なせてくれ！死なせてくれええ!!」

「たわけ。頭を冷やせ…そして、命をもって償う意味を今一度考えろ。」

しかし、ユウキは情け無用と顔面ヘグーパン…余程の威力だったのか団員は一瞬で伸びて動かなくなってしまった。暫くは動きそうにない彼は今のうちに拘束しておけば問題ないだろう。さてさて、こっちは片付いてもまだ全てが終わったわけじゃない。

(聞かねばならないか…)

カリバーは王宮騎士団として、何より転生者として仮称・ユウキの素性を知らねばならない…あるべき物語を全うする者なのか、それとも我欲の向くまま悪虐の限りを尽くすつもりなのか。最悪の場合、対峙しなくてはならないこともありうる…無論、その展開は望まぬところだが。

「君は…」

「俺に構っている場合か？ お前、つけられていたぞ？」

意を決した一言目は容易く出鼻を挫かれる。

話し方が完全に騎士クンじゃない。原作の本来の性格とも全く違う威圧的な声色…しかし、彼の視線はカリバーたちの背後に向いていた。その時、ようやくまだスポットライトが当たらない『もうひとり』がいることにやっと気がつく。

『…チツ。…気づいたのか。』

「！」

アナザーオーズ：『彼女』は剣を握り佇んでいた…。

狙いは恐らく、アナザー鎧武に変身した団員。すぐに身構えるカリバーだが、それを制したのはクリスティーナ…珍しく笑みもなく真面目な顔で怪人を見据える。背中で語る『一度、私に任せてくれ』と。ならばとカリバーは刃を下ろす…

(…まあ、会話では止まらないだろうな今の『彼女』は。)

結果がどうなるかをこちらも見据えながら

そして、アナザーオーズへ語りはじめたクリスティーナ。手には穢れたライドブックが弄ばれている。

「さて、全ては終わった。お前がもうその力に継る意味は無いぞ。」

『…』

「正体はもうとつくにわかっている…なあ、お嬢ちゃん？」

『!』

お嬢ちゃん、クリステイーナがそう呼ぶ人物は限られる。動揺し足を止めたアナザーオーズは自らの穢れたライドブックを取り出すと変身解除、素顔の銀髪の少女が姿を表す。

「どうしてわかった？」

王宮騎士団・団員…トモ。彼女こそがアナザーオーズの正体である。

★ ★ ★ ★ ★

彼女の素顔に僕はあまり驚かなかった…理由は簡単、予めその正体をクリス師匠から聞かされていたからだ。なんでも、彼女自身もアナザーオーズと城内で交戦した際に立ち回りと独自の剣技であるミクマ流に似ていることに気がついたことがキツカケらしい。

更に襲われた団員たちが王宮騎士団の一般公募に反対し、僕やトモのような庶民や獣人のメンバーと一悶着お越していた輩ばかりという。状況証拠に加えてある人物からの『密告』が決定打になった。

王宮騎士団の救護院の来訪だつて証拠を得る手段で、副団長が団長をうまく言い包めたに過ぎない…。無論、予め子供たちをサレンに『大切な話の邪魔になる』とそれとなく別の場所に誘導させたのは抜け目のないと思う。…最もこんな事実を団長やサレンが知ったら激怒するだろうが。

(結局、結果論か…)

僕もこの作戦は当然ながら渋った。ただでさえサレンは消耗して

いるのに、鞭打つような真似は人の心が無いじゃないか。しかし、決まってしまった事項を覆す力も時間も無く、結果として悔しいが、アナザー鎧武まで引つ張り出せたのだから作戦としては大成功だろう。

…あとは

(彼女をどうやって止めるかだな。平和的にいけば越したことはない。が……)

まあ、そんな可能性に縋れるほど残念ながらお人好しでもないんだな僕は…

★ ★ ★ ★ ★

「…密告があった。」

クリステイナーナの冷たく告げた一言で、全てを察するトモ。自分がこの異端の力を持つと知る人物はひとりだけ…

「マツリちゃんか…絶対にモノにしてみせると言ったのに…!」

「笑わせてくれる。私からは力に吞まれかけているようにしか見えな
いのだが…」

確かに髪はボサボサ…血色も悪く目許は年頃の少女には痛々しい
隈まで。そんなボロボロの肉体から滲む禍々しいオーラは穢れたラ
イドブックによるものだろう。口調も心なしか荒い…精神も蝕まれ
てきているのか。

ならば、早く彼女から本を取り上げねば!カリバーは叫ぶ。

「その穢れた本をこつちに渡せ！君もサレンのように暴走したら……！」

「暴走なんかしない。そして、渡すのはお前のほうだ……その男はこちらで処分する。」

しかし、トモは聞く耳持たず再びアナザーオーズへと変身。意識はあつても自我は完全に歪んでいる……カリバーは彼女の原作設定をそこまで深く理解はしていないが、間違つてもこんな間違つた力に魅入られるような弱い人間ではなかったはず。

気は奨むものじゃないが、彼女を元に戻せる手段は剣による荒療治のみ。迷う暇は無い、救わねば……抜けられない深みと背負いきれない罪を重ねる前に。

「そうか。ならば……力付くだ。」

『ハッ、貴様ごときに遅れをとるものか!!』

走りだす両者。そして、ぶつかり合う剣と剣。

月闇とメダジャリバーが甲高い音を鳴らし、激しく死合いの舞を繰り広げる。互角……否、やはり純粋な剣技では分が悪いのかカリバーが圧されはじめ、ジリジリと後退しはじめてしまう。

「くっ……！」

『弱い、失せろ！』

ついには一撃をもらって弾きとばされるカリバー。その隙にとアナザーオーズは標的を気絶している団員へと飛びかかる……が、クリステイナーが立ちはだかり剣を抜く。

「頭を冷やせ。私刑などお前のやる柄ではないだろ！」

『黙れ！ソイツがマツリちゃんに何をしたのか知らないくせに!!』

アナザーオーズの勢いは衰えない。脳裏にチラつく友人を侮辱し高笑いしていたこの男の記憶が決して消えぬ燃えたぎる怒りに薪を焚べ続けるのだ。…この歪な欲望の力が目覚めたのはいつかはもう覚えていないし、どうして目覚めたかなんてどうだって良い。全てが正しくなるまで力を振るうのみ。

『マツリちゃんのためにも私が王宮騎士団を立て直す…！そのためには…！』

「…っ！ 血迷うにも程がある！」

もう目の前にいるのは直向きな少女騎士ではなく、欲望のまま吼える怪物だ…それでも仲間である少女の豹変に目を細めるクリステイナー。自由奔放の度が過ぎる彼女でも、やはり思うところがあるということなのか…

その最中、態勢を崩したカリバーも『う…っ』よろめきながらなんとか復帰。ライドブックを取り出し、アナザーオーズへの反撃を試みる。その一手は…

「キング・オブ・アーサー!!」

「これでっ！」

キングエクスカリバーの召喚からのぶん投げ、カリバーのお気に入りの戦術。ただ今回は属性を乗せずに投げただけ…これには背後から狙われつつも余裕の嘲笑をするアナザーオーズ。

『またか！芸のな…!?!』

この程度ならばと飛び退いて回避：：した途端に覆い被さる影。投げられたキングエクスカリバーは巨大化・変形しロボット形態になったのだ。

まさか、剣がロボットになるなど想定外で意表を突かれた彼女を鋼の剛腕がガツシリと拘束する。これで動きは封じられ、カリバーは速攻でカタをつけるべく地を蹴った。

「その欲望、僕が絶ち切る！」

『舐めるなア!!』

しかし、アナザーオーズには逆転の切札がある。ドロリと身体が蕩けると液化化してキングエクスカリバーの拘束を脱出：再び自分に挑む患者を呑み込むべく迫るがカリバーとてバカではない。既に対策は織り込み済みと雷鳴剣黄雷と先とは別のライドブックを取り出す。

「昆虫大百科!!」

『!?!』

ヤワな物理攻撃なんぞ通じない液化化：：ならと選ばれたのは昆虫大百科、本を翳すなり凄まじい緑の光がアナザーオーズの眼を潰す。昆虫大百科、様々な昆虫の記憶の生態が記録される本からカリバーが選んだ能力は発光能力を持つ儂い水辺の昆虫『ホタル』。非物理は雷以外は乏しい彼なりの創意工夫であり、その効果は靦面だった。

『ぐああああああ?!?!? 目潰しとは卑怯なっ!?!』

「悪いが、もう死にたくはないんでね。」

液化化が解けのたうち回る彼女には申し訳ないが、一度殺されてい
る身として手段は選んでられない。

「習得一閃！」

「むんッ！」

これで戦いの行く末は決まった…暗闇の斬撃が弧を描く。

怪人の肉体は斬り裂かれ、汚濁のような断末魔とつんざくような少
女の悲鳴が重なって爆発が起こる。…終わった。これで一段落……

「あ…ああああ!!!」

「!」

否、燃え盛る炎の中……変身解除をされても尚、トモは穢れた本を
手放してはいなかった。

転生カリバーさんと過ぎた力 その4

「この力、離すものか……！」

完全に想定外だった……！

超常たる怪人の力に依存してしまう一般人というのはライダーシリーズにおいて時たまにあるのは頭にあっだし、彼女の言動からも察していたのに……迂闊だった。アナザーライダーが原作でその描写がされたことが無かったから倒せばカタがつくと思っていたが、燃える業火の中でも彼女は欲望の本から手を離さない。このままでは……！

「よせ！ その本は危険だ……！ はやく離すんだ!!」

「嫌だ！ やつと手に入れた力だ！ 誰にも見下されない、憧れと肩を並べられる力なんだ！」

「ちがう！ それは間違った強さだ！ 君には本当の……正しい強さとは何かわかつているはずだろ！」

そうだ、君の強さはそんな醜く歪な欲望なんかじゃない。君は正しい強さを知っている……！人と剣の在り方、その憧れをジユンに求めたはず……だから、そんな力は……

「ならアンタは正しいのかカリバー!?!」

——え？

「同じ本の力を使うアンタと何が違う？ 本が無ければ何も出来ないくたばり損ないが何をほざく！」

……

.....

★ ★ ★ ★ ★

「僕は…」

カリバーの動きが止まった。

動揺、まだ決着がつかない戦いの場面でそれは致命的である。

『アアア!!!』

「！ バカ弟子!!」

トモからアナザーオーズの怨念が飛び出し襲いかかる。クリステイナーが声をあげ、ようやく我にかえったカリバーだが迎撃は間に合わずクローにより引き裂かれ鮮血が舞う…そして、最後の足掻きを果たしたと言わんばかりにより怨念は霞となり消滅…ライドブックは大人しくなり、汚れた本となり力なくへたれこむトモの手の中におさまった。全ての力を使い果たしたのか、炎は消えて彼女はうつろな目をして意識を失っている…

そんな彼女の横からヌウと手を伸ばして穢れた本を回収したのはユウキ。『ふむ…』と興味深そうに眺めたあと、視線を地面に呻くカリバーへ…。

「…全く、どういいうつもりだ。コイツに何が出来ると言うんだ？」

つまらなげに吐き捨てる可不死鳥の炎を纏いその場を後にした…。

それから間もなく、ジュンたち騎士団が慌て駆けつけてきたが…その時には全てが終わったあとだったのは言うまでもない。

★ ★ ★ ★ ★

それから数日……

トモ並びにアナザー鎧武だった団員の処分が下された。

トモは謹慎処分…といっても、事実上の療養みたいなもので大事にしたくないというサレンディナ救護院と母体であるプリンセスナイト側の意向もあつて、かなり軽めの処分で済んだ。衰弱は著しいが、精神もスズメの治療も相まって少しずつ回復に向かっている…。メインヒロインではなくとも、プリンセスのひとりである彼女。この事件が悪い影響を残さなければいいのだが…それが気がかりだ。

そして、例の団員…。救護院の出資者など外部・内部の人間に手を出してしまった以上は精神状態に異常をきたしたという状態を鑑みても軽い処分で済ませるのが厳しく、事件捜査への協力の後に正式にギルド退団処分をさせられるそう。事件後、話してみる機会があったが怪人の時とは一転して人がよさそうな青年だった…やはり、あの狂気は穢れた本の作用なのか。

後味悪さは酷いものだが…取り敢えず、もうサレンディナ救護院は安全だろう。

「…報告は以上です。」

「ありがとうございます。取り敢えず、一段落ですね…。子どもたちに被害がないのは幸いです…。」

ところで僕は今、救護院にてサレンに事の一部始終を報告している。わけあって、変身したままだがこのほうが子供たちにはウケが良い。なにはともあれ、解決…全部が全部片付いたわけじゃないがもう救護院が荒らされることは早々ないはず…それでも、彼女の顔は浮かないが…。

「あのうまく言えないのですが…。」

…ん？　なんだろう？

「わたしも暴走した時…声が聞こえた気がしたんです。『自分で夢を壊すな。』って…誰かがずっと叫んでたような…。だから、救護院を壊さずに済んだのかもって。それに、あの力自体はどこか懐かしいような気もして…。」

アナザーファイズになっていた時のことか。別に何の縁もゆかりもないファイズの力が懐かしいとは妙だが…考えてすぐに何か思い浮かぶことも今はない。

「…ごめんなさい、変なこと言って。」

「いや、構わないさ。もし他にも気になったことがあったら遠慮なく王宮騎士団を頼ってくれ。あなたに力になりたい人は沢山いる。僕もそのひとりだ。」

「お心遣い、重ね重ね感謝します。…やっぱり、あたしって不器用だ

な…溢れた弱い人を救うつもりが、結局誰かを切り捨てていた。ままたならないわ…本当に。」

溜息をつく彼女…やはり、心が消耗している。

本来の主人公、ユウキだったらきつと寄り添える言葉をかけられたんだろう。でも、僕は彼にはなれなかった…。だから、せめて…

「人はひとりで届く手の大きさなんてたかが知れてます。だから、手をつないで夢見た明日に手を伸ばす…それは恥ずべきことなんかじゃない。」

こんな言葉くらいが精一杯。もっと素直に周りを頼れたら環境は好転していくはず…。後々には美食殿も結成されるだろうし、そうすれば…あのファルシオン騎士クンが美食殿結成するのかわからないけど…

そして、僕は救護院を後にした…時刻は夕暮れ。はやくランドソル城に戻るかと思っていたところ意外な顔が。

「…師匠。」

「見ないと思ったら…全く、上司の仕事をとるとは偉くなったんじゃないか…ええ？」

我等が副団長・クリスティーナ師匠。とつたんじゃなくて団長から頼まれたんだぞ…『クリスちゃんだとまた余計な誤解と火種が生まれかねない』って。

「ま、概ね団長あたりが手をまわしていたというところか。」

あ、分かってるんだ…。わかってるなら改めてもらって…無理だ

な（諦め）

「ついてこい、話がある。」

…？



「その鎧を解け。」

「え…」

誰もいない城壁、燃えるような夕焼けに照らされるこの場所に連れてこられふたりきり。愛の告白ならもってこいの雰囲気だが生憎そんな生温いイベントじゃないらしい。彼女に笑みは無く眼は鋭い。

「隠しているつもりだろうが、バレているぞ。」

…ああ、やっぱりそのことか。

僕は観念して、本をドライバーから抜いた…そして、露わになる肉体は簡単に言えば服を着たミイラだ。完全に水分が抜けた肌はカピカピで肉と一緒に縮みきって骨にくっついていてるような有様。目玉は腐りかけのように黄色いし、寝っ転がれば変死体のようにしか見えない。

「やはりか。蘇生か、もしくはその妙な剣やら本の反動か？」
「…」

ご察しのとおり、蘇生の反動だ。

正確にら蘇生後、間もなくカリバーの力で更に肉体を酷使したから限界を迎えた。変身していなければかなり息苦しいし、こんな姿を他人に見られるわけにもいかなないのでずっとライダーシステムを使っていたわけだが…そんなにおかしかったか？

「事務仕事や食事の時まで鎧を着るトンチキなぞ、団長以外はこのランドソルにはいるまい。」

まあ、それもそうか…（納得）

「治るのか…？」

「暫くすれば、いずれ…。」

治るはず…：要はこの姿はヒルマ曰く、蘇生の反動からくるある種のエネルギー不足のようで、ライドブックから肉体にエネルギーが補填されれば回復するらしい。ただ数日はこのまま…まあ仕方ない。死体にならなかつただけマシと思おう。

「只の人間ではないと薄々思っただけだが…不死の呪いを受けているのかお前。死んでも魂を強引に肉体にくくりつけて動かす…大抵は死霊使いに隷属されているものかと思っただけだが、明確に意思があるのは珍しい。…：ならばこそ、お前の素性をより詳しく知る必要があるな。」

「…」

そうなるよな。しかし、困った…転生者云々は伝えるにしても面倒だしあまりに突拍子もない。

かと言って入団直前に覇瞳皇帝の前で堂々とホラを吹いた手前だけに迂闊なことは尚言えないし、嘘に嘘を重ねるのはいずれ整合性が

とれなくなってしまうだろう。…どうする？

「……と、詮索したいところだが生憎、陛下から余計な勘繰りはするなとキツくお達しがきていてな。これくらいにしておこう。」

…へ？

「あとあの小娘に言われたことはあまり気にするな。アレの本心ではあるまい。今日はもうゆつくり休め。」

許された…いや、見逃された？

この場合、徹底的な追求が来ると思ったが彼女なりに思うところがあるのか？いや、陛下のお達しって…

「——（お前のことは気に入っている。くれぐれも裏切ってくれるなよ?）」

—ッ!?

耳打ちされた…！　こんなカツコイイ耳打ちされた不覚にもドキドキしちゃうじゃないか…って戸惑っているうちに何処か行ったな。本当に自由だなあの人…

…『気に入ってる』か。有望な新人という意味合いかはたまた面白い玩具ということなのかはわからない。ただ…

「僕はそんな大したもんじゃない…」

トモが言いかえされた通りだ、僕は『正しい存在』じゃない…プリコネの物語の住人としても、カリバーとしても。取り敢えずはカリバーとして形は保っていても本質的には僕もアナザーライダーと大差がないのかもしれない。決して僕はプリンセスと共に立つナイト

でもなく、聖剣を握る文豪でもない…居なくたって物語は成立する。

「僕はきつと、剣豪にもナイトにもなれないのか…。」

『——別に知っている可能性に準ずる必要はないですよ。』

…？ あれ、今キョウカちゃんの声が聞こえたような？



「…それで、彼は『味方』かい？」
「さあな。」

カリバーと別れたクリスティーナは待ち構えていたジユンと合流していた。

クリスティーナはあいも変わらずだが、ジユンは只ならぬ剣幕である。

「陛下の采配といい、やはり彼には何かある。多分、『相談役』も一枚噛んでいるんじゃないか…。」

『『ハミル』のことか。だが奴からその名前は出てこない…避けている

か、知らずに操られているのか。取り敢えず、暫く様子見だ。もし必要なら私が斬り捨てるさ。」

斬る…確かに今のカリバーならクリステイナに全く齒がたたないだろう。ジユンもそのことは疑ってはいない。

だが

「しかし、どうせなら…」

「？」

「ただ斬り捨てるより、殺し甲斐があるくらいに育ててから…というのも悪くないなア？」

「…」

相変わらずだなあ、クリスちゃんは…ジユンは苦々しげに苦笑する。

転生カリバーさんと再会の王女（真）

……空が落ちてくる

大地を呑み込むような曇天の渦から空が落ちてくる。

「…世界を…救う！」

そして、カリバー・ジャオウドラゴンが立っていたのは聖剣がいくつも刺さる嵐の丘…その頂上。その手に握るオムニバスライドブックをバツクルに接続して、力を解き放つ。

「変身！」

「オープン・ザ・オムニバス！ 仮面ライダーソオオロモオオ
ンツツ！！」

カリバーは禍々しいエネルギーに包まれ、仮面ライダーソロモンへ。紫の鎧はうって代わり金と赤の毒々しい意匠に…兜の面影は残っているが完全な別物だ。左手に新たに大剣カラドボルグを握り見据えるは破滅を招く空の大穴。滅びへのカウントダウンが間近となる中、カラドボルグと天に掲げ…全ての聖剣と本で空中に大樹を模した魔法陣を創りあげる。そして、形を為すのは…

「…これだけの力ならば！」

空に弓引く、天を穿つ一矢

大気のマナ、地面の霊脈からすらもエネルギーをありったけ吸い上げて形成する強大な光の砲撃。人の身では聖剣の力を持ってしても灼き切れるだろうが構わない。もうこの男に帰る場所などないのだから…

「ご照覧あれ！ クラヤミの騎士、最後の意地を!!」

放つ、文字通り命を賭けた全力全霊を…！見届けよ、誑かされ死した哀れな友たちよ！最後の最後で正しかったのは…

——ザクツ

「…ぐふっ!?!」

しかし、ソロモンは背後から貫かれる。
胸から突き出る血よりも紅い刃…火炎剣烈火。

「き…さま…アア…」

振り向けば見知った顔…それは火炎の龍騎士。

最期の花舞台…全てを台無しにした張本人は仮面ライダーセイバーだったのだ。

★
★
★
★
★
★

「…っ」

最悪の夢見だ… そして、最悪の寝覚め

僕は悪臭が立ち込める暗闇の中にいる。カリバーに変身してたおかげでギリギリのラインで生きていたが、状況はかなり芳しくない：息苦しい肉壁がぎゅうぎゅうと迫ってきて、ちよつと強めな酸性の液体がじゅわじゅわと染み出して足許に溜まる上に鎧はびちやびちや…ほんとにクソヤ…コホン。

そう僕は今、わけあつて『魔物の胃袋の中』にいる。

…まず、この状況を説明し

「プリンセス・ストライイイク!!」

——ん？

★
★
★
★
★
★

「久しぶりの大物、ヤバいですね☆」

ランドソル外れにある湿地帯にて…

横たわる鮫とフグと蝦蟇を足して割ったような巨大クリーチャーの上で大喜びしているのは我等がヒロイン、ペコリーヌ。まあまだその名前は貰っていないので呼び方としてはまだ不当かもしれないが…

さてこのクリーチャー、要は魔物だが彼女の手によりシバかれた半陸生のヌマシャークの一種である。鮫が沼にいて手脚があるとか意味がわからないという方もいると思うが、ファンタジー界隈でサメは家の下水から宇宙に霊界まで幅広く活動する生物でありツツコむのは野暮。むしろ、沼にいてちよつと化け物してくらいは薄味過ぎる個性だ。

そして、どんなシャークだろうとゲテモノだろうが取り敢えずは胃袋に放り込むのがペコリーヌというヒロインなのだ。

「ここ最近は何もじかったですから、これでお腹いっぱいです☆」

そして、何処からともなく取り出す解体グッズ。何処そのモンスターを狩るゲームで見たような大型のナイフを取り出して手際よくゴリゴリとウロコを剥ごうと……

ゴツゴツ…

「あ、あれ…。ウロコが堅すぎて刃が入らないですね…。フグシャーク系の魔物は、柔らかいお腹が毒袋に近いので背中から捌かないといけないのですが…」

ぐうぐう…

「困りましたねえ…もつと本格的な解体の道具を用意しておくべきで

した……。漁村に戻ろうにもその前にお腹と背中がぺったんこして
くつついちゃいそうです……。はあ……」

まさかのトラブル。これにはペコリーヌも途方に暮れる……残念な
がらここ数日は満腹にいたる食事が出来ていない彼女。充電切れギ
リギリのラインでそこら辺の草木や動物で踏ん張ってはきたものの、
これ以上は根性でもどうにもならない。動けるうちにこのヌマ
シヤークを解体して胃袋に放り込まないと……

「何か代わりになるものは……なるものは……」

うーん……と唸っている彼女の目についたのは瑠璃色に輝く愛剣。
その切れ味、強靱度はランドソルの王家に伝わる秘宝なだけあり折り
紙つき……この魔物をしとめたのもこのプリンセスソードのおかげだ。
………ということはウロコを剥ぐくらいなんて造作もないはず……

「……はっ！ 駄目駄目駄目駄目！ これは大切なお父様とお母様から
授かった……」

ぐううくくく……

「でも、背に腹は代えられない……のです……」

お父様、お母様、お許してください！」

それから、暫くして…

「Oh…」

プリンセスソードをゴリゴリと解体包丁扱いという覇瞳皇帝も知ったらドン引きするような行為をした彼女が目にしたのは…やはり

「死体…ですよねこれ？」

背中をかつ捌くとズルリと出てきた体液まみれのカリバー。刃先に異物感を感じて引つ張り出してみたらちようど彼の角の部分を掴む形でぶらさげる形になっている。ピクリとも動かない…まあ、胃袋から出てきて生きているのは赤ずきんか寄生虫くらいなもの。魔物を食を嗜む上で腹を捌くとヤバいぐらいじゃ済まない光景なんてザラにあったりするし特別に驚いたりしない…

過去に討伐した大物、村を丸ごと呑み込んだドラゴンサイズのオオナマズの胃袋には…皆まで言うまい。取り敢えず、これくらいならまだ許容範囲内だ。

「どうしましょう…流石にこれは躊躇われますね…。」

躊躇うより食べるべきじゃないと即断するべきじゃないか…一国の女王の精神は悪い方向に凶太くなっていた。…これも覇瞳皇帝つて奴の仕業なんだ。(言い掛かり)

しかし、腹は倫理観など知らぬとぐうぐうと訴えてくる。

「お腹が…もう…。でも、この一線を越えるわけには…。」

「生きてるよ（唐突）」

「ふおうっ!？」



…まあ、取り敢えずだ。ちよつと時計の針を戻そうか。

「（えい、えい、）むんっ！」

『グギャアアア!!?』

ヌマシャークの脳天に月闇を突き立て、僕はその巨体から命を奪い取った。巨体はぐらぐらと断末魔をあげながら湿地の泥に沈み、やがて踞るような形で動かなくなる…。

「討伐完了だな。」

「流石ツスね、カリバー…あのオバサンの弟子だけあるツス。」

今回は王宮騎士団の仕事として泥怪鮫ヌマシャークの討伐を獣人族の少女・マツリちゃんと赴いている。ゲーム・アニメ共にトモの相手（？）の彼女。それがどうして一緒にいるかといえば、前回のアナ

ザーオーズ事件のせいでトモが離脱中だから副団長に体よく押し付
…短期間のコンビを任せられたのだ。

騎士団長も『——君は特に獣人族に忌避感を抱いてないようだし、
短い間だが頼む。』だと。

(でも、師匠…もとい副団長を割と毛嫌いしてた記憶があるんだが
…。)

そうマツリちゃん、クリステイーナを堂々と『オバサン』呼びする
ほど毛嫌いしていて噛み付いたり(物理的な意味ではない)している
様子がうつすら原作知識としてある。そして、僕は副団長の弟子かつ
何処その馬の骨と知れぬ輩…絶対、印象悪いなこれ。

「しかしまあ、なんでこんなランドソルの近くに…。早めに対処でき
たのが幸いッス。」

「…ああ。」

そして、今回はこのヌマシャークの討伐。本来ならもつと人里離れ
た泥沼の湿地に棲息する魔物のはずがどういいうわけかランドソル郊
外…しかも、人々が往来する道に出没し旅人や商団を襲うようになっ
たらしい。

本来、速やかに討伐クエストが行われるべきなのだがこのヌマ
シャークはどういいうわけか受け持ったギルドは悉く失敗し、頼みの王
宮騎士団はペコリーヌ帰省からアナザーオーズの一件で混乱の真っ
只中で対処が遅れ、被害は拡がった。それから、遅れ遅れのやっとの
対処を任されたのが僕とマツリちゃんといいうわけだな…。もつと他
に適任の人いると思うんだが…

「…」

「…」

……………気まずい。

本当に会話が續かない。そもそも、アナザーオーズ事件のはじまりはマツリちゃんに対する暴言だったらしい。そして、暴走したトモを止めたのも僕…一応。お互いに気まず過ぎてギクシヤクとした空気がずっと続いている…。

10代前半の女のコと何が悲しくてこんな…

「カリバー…。」

「!？」

うわ、びつくりした…。な、なになかな…

「トモねえちゃんのこと怒ってるツスか？」

…お、おう？

「…なんだ、急に。」

「この間の事件の時、アンタは命に関わる怪我をしたって聞いたツスよ。それをやったのもトモねえちゃんです。酷い言葉をかけたって。」

ああ、やはり彼女のことを気にしていたのか。命どころか致命傷をもらって死んでいるが…でも、蘇生したからノーカンくらいにしか僕は思っていない。まあ、蘇生云々は副団長以外に話してはいないからその認識になるのは仕方ないな。

「ほ、本当にトモねえちゃんは優しい人なんですよ！ただ、あの本のせいでおかしくなっちゃって…止めたかったけど…何も出来なくて…。結局、副団長に泣きつくしか出来なかったツス…。」

「…」

後から聞いたが、クリス師匠が事を把握していたのはマツリちゃんから泣きつかれたからだ。だからこそ、僕と協力して内密に処理を…可能なら団長にすら知られないように彼女たちからライドブックを取り上げる予定だった。

結局、アナザーオーズ事件の真相は想定外が重なったものの何とか一般団員には怪人たちの正体を含めて洩れることはなかったが…

(…わかっている。原作知識もそうだが、明らかにアナザーライダーのライドブックが精神に影響を与えるのは明白だからな。)

取り敢えず、特に僕としても責めるつもりはない…主要キャラではないといえ、万が一にも王宮騎士団を離脱なんてされようものなら原作にどんな影響があるかわかったもんじゃなし…それに

———ならアンタは正しいのかカリバー！同じ本の力を使うアンタと何が違う？ 本が無ければ何も出来ないくたばり損ないが何をほざく！

「…彼女の言うことは…別に間違ってもない…。」

「カリバー…?」

…! うしろ?」

え?

——ぱくん！



そして、トドメを刺し損ねていたヌマシヤークに丸呑みされ冒頭に至る。

「なるほどく、とんだ災難でしたね☆」

「君にとつてはとんだ災難程度なんだなコレが…」

流石、メインヒロイン。呆れとも感心ともつかぬ物思いをしながら変身を解除するカリバー…それにペコリーヌは『おお！』と声をあげる。

「す、凄い。どうやってるんですか!？」

「企業秘密だ。」

「素顔は…だいぶ血色悪いですね。栄養が足りないのかも…ご飯にしましよう。」

「だいぶ失礼だなキミ?」

血色の悪さは生まれつき…なはず。

「すぐに準備しますから、待っていてください。それに、あなたには色々訊きたいことがあるんです。どうして私のことを知っているのか…そして、今のランドソルはどうなっているのか…。」

「む…」

ああ、やっぱりそんな展開か。

再会は予期していたカリバーだが、正直なところ思ったより早かった…というより不意打ちだ。可能なら美食殿設立と同じタイミングが良いと思っていたが、ここで下手なネタばらしは物語の行末を歪めてしまう。これ以上、イレギュラーなんぞあつてたまるか…というのが本心。しかし、この場で逃げるわけにもいかないか。

(腹を…括るか。)

転生カリバーさんとマジで真っ黒でヤベー奴 その1

…時を同じく

湿地帯近くの森ではユウキとコッコロの姿があった…。

王宮騎士団に目をつけられた手前、熱りが冷めるまで宿をとりつつ細々とクエストをしながら日々を繋いでいたふたり。今日は危険度の低い採取クエストを任せられ、目的のキノコ狩りに勤しんでいる。

「主様、こちらにもキノコが。やはり、湿地帯が近いですからキノコ類の生育が素晴らしいですね。」

「あまり離れるな。クエストの注意書きによれば化けキノコとやらも出没するらしいからな。」

ユウキは先走りがちなコッコロをたしなめながら前に行く…。一応、危険は皆無ではない。『化けキノコ』なる人間と同様に四肢を持ち、他者を肥料にしようとする殴りかかる魔物がいるらしい。おまけに獣並みの知性と群れる習性があるのが厄介だと受付嬢の緑メガネから注意を受けた…

…まあ

(いくら奇怪でも所詮、キノコ風情に遅れはとりはしないがな。)

自分はそのらの呑気なキノコ狩りの村人とは違う。この世界で目覚めてからというものの独りで足が生えた菌糸類よりもっと危険な存在を倒してきているのだから。飛竜だろうが、化け猿だろうが、化け魚だろうがファルシオンなら負けることはありえない。

(ただ今回はコツコロがいる、気をつけなくては…)

「ふふっ、主様と一緒にクエストなんて久しいでつい、気分が舞いあがってしまって…いけませんね。」

「…そうか。」

救護院に世話になっていた時は専らコツコロには留守番を言いつけていたせいも、散歩する子犬のように嬉しそうだ。仕方ない、いくら従者とはいえ流石にまだ幼い彼女を危険なクエストに連れていくわけにはいかないのだから。

ただやはり、置いてきぼりにし続けたのはよく無かつただろうかという考えてしまう。

「(…)…父親？ よせ、縁起でもない。従者とはいえ、幼子の面倒くらいこの歳なら見るのが普通…」

「(…)おい、待て。小遣いまでもらっていただと…？ まて、待て待て…普通、従者に賃金を払う側だろ貴様…！」

「主様…？」

「あ、いや…なんでもない。」

不思議そうにこちらにコツコロが顔を向けていた…。

何とか取り繕い事なきを得たが、万一にも健気で心配性な彼女が医者なんかを手配をしたら大変なことになる。恐らくランドソルにはまともな医者なんて恐らく存在しないのだから。

取り敢えず、キノコ狩りに仲良く精を出し一時間…ポーチと背負う籠がいっぱいになった頃のこと。

「クエスト達成の値まで採取できました。今夜はこれでキノコパーティーですね。……主様？」

「…」

嬉しそうなコツコロとは対照的にユウキの表情は怪訝なものだった…。辺りを見回し、マントに隠していた無銘剣虚無に手をかける：

「妙だ…化けキノコはともかく、獣一匹の気配すらない。」

違和感。豊かな森なのに動物と呼べるような生命体の存在をずっと感じず、ざあざあと風にざわめく枝の音以外は何も耳に入らない。それに正午あたりだというのに心なしか先より薄暗くなってきたような気がする…。

「嫌な予感がする。コツコロ、街に戻る…」

「主様！」

なんだ？コツコロが何かを見つけたようで、茂みを指さしている。促されて覗き込むユウキの目に映ったのは…

「これは…死体か？」

倒れて白眼を剥いている男がふたり。片方は金髪で細身でもうひとりには毛がモジャモジャの大柄な男。そして、周囲に散乱しているキノコたち…試しにひとつを拾い上げたユウキはそれに眼と口とおぼしき器官があるのを確認した。

「化けキノコの幼生…死んでいるな。」

化けキノコの最初期の幼生は確かサイズは普通のキノコと変わらないときく。一見、可愛らしい見た目だが騙されてはいけない…時によつては幼生たちは群れを為し人間くらいは普通に襲うのだとか。そして、寄生された生物はあつという間に生きながら養分を吸い尽くされてしまう。

しかし、奇妙なことに獲物になった男たちに群がつたであろうはず

の幼生たちが死んでいるか衰弱している様子。一体なにが…

「主様、こちらの方達まだ息が…！」
「なに？」

息がある？よく観察すると確かにまだ微かに呼吸をしている男ふたり…『う…あ…』とか弱く呻く様は風前の灯火のようであるが、こうして見つかったことは彼等にとって幸いだった。

「ゴツゴロ、すぐに応急処置。まだ助かる見込みはある。ベースキャンプに戻って医者を…」

…む？」

すぐに彼等を運び出さんとしたが、ザリツと誰かの足音が耳に入り身構えるユウキ。森の深みから何者かがこちらへやってくる。

そして、数秒後…：現れたのは白い防護服にガスマスクをした人間。ファンタジー色の近いこの世界にあまりに不釣り合いな格好にユウキは警戒を強め、ゴツゴロは生まれてはじめて見る何の生き物なのか検討がつかないそれに困惑していた。

「何者だ…？」
「…」

防護服は答えない…ただ、ユウキが手に掛ける無銘剣虚無を硝子ごしの眼でまじまじと眺めている。

「逃げた被験体を追っていたが…驚いたな。『無銘剣虚無』、実物を見るのは初めてだ。」

「…！（虚無を知っている？）」

まさか…無銘剣先虚無を知る人間なんて限られている。恐らく『自

分と同じ世界』の出身かそれに縁があるということ。そして、自分以外の生き残りなんぞ忌まわしいアイツしかいない。

「貴様、『魔女』の手先か？」

「魔女？さて、何のことやら…。それよりも、一応き聞いておくけど、君は何処のトライブの転生者なんだい？」

転生者…俺のことか？

しかし、トライブとは？知らぬ単語故に無言でいると防護服は何かを納得したようにガスマスクの下で口角を吊り上げた。目の前にいるのはレアでおまけに事情も知らない絶好の獲物だと。

「あく、君はフリーの転生者なのか。なら、ちょうど良い…君を狩ったところで特に問題は無いってことだろう？」

「ビルドドライバー!!」

「! コツコロ、下がれ!!」

「エターナルフェニックス!!」

防護服はハンドルがついたベルトを取り出す…Ⅱ宣戦布告の合図である。咄嗟にユウキはコツコロを下がらせ、ライドブックを構えた。

戦いは避けられない、更に赤い引き金式のアイテム、ハザードトリガーと2本のメタルタンクフルボトルを自らのビルドドライバーに接続する防護服にライドブックをドライバーに滑らせるユウキ。

「ハザードオン！」

「タンク!／タンク！」

「さあ、実験をはじめようじゃないか。」

「——かつてより伝わる不死鳥の伝説が今、現実となる！」

「…やつと見つけた手掛かりだ。逃すものか！」

溢れ出す不死鳥の炎…それをハンドルを回すビルドドライバーから形成された人間大ほどの鉄板ハザードライドビルダーが阻み変身者を焼くことを許さない。

睨み合う両者…変身シークエンスはどちらも間もなく終わる。

「…ガタガタゴットン！ズツタンズタン！」

「…Are you ready？」

「変身!!」

「アンコントロールスイッチ！ブラックハザード!!ヤベー！」

「抜刀！エターナルフェニックス!! —— 虚無！ 漆黒の剣が無に帰す！」

不死鳥の業火を放つファルシオンと対抗するのはハザードライドビルダーにプレスされ、加えてこれを吸収して形成する漆黒の仮面ライダー。揺らめく炎のような鋭い肩アーマーに戦車を模したグレーの複眼。それは、原典の物語では自分を救わなかった世界への復讐のために悪を選んだ科学者の力…その名を

「…仮面ライダーメタルビルド。以後、お見知り置きを。」

転生カリバーさんとマジで真っ黒でヤベー奴 その2

僕とペコリーヌは近くの滝がある泉に移動して腰を下ろすことにした。

幸い、泥で濁ってない水があると危険な魔物もまず棲息していないということで長話するには丁度よかった。変身していたとはいえ、化け物の胃袋の中にいたから顔は洗いたかったし、ペコリーヌも落ち着いて食事が出来る場所が欲しかったところ…

とにかく、休憩が必要だったのだが…

「君のその華奢な身体にどうしてこれだけの魔物肉が入るのか…」

「中々の美味でした☆」

ペコリーヌは止まらなかった。無駄のない動きでキャンプファイヤーを1分たらずで組み上げ着火：更にいつの間にか解体していた魔物肉を丸焼きにしてあつという間に自分の胃袋におさめてしまった…。人間より遥かに大きい魔物だったはずなのだが、軽く腹が膨れるだけなのはおかしくないか？やはり、腹にブラックホールでもあるんじゃないのか彼女？

「いやあ、危うく干からびるところでした。王家の装備は燃費が悪いのが難点です。」

ぽん！とお腹を叩く笑顔は眩しい。

最初の別れた時には酷く打ちのめされた背中が印象的だったが、どうやら回復している様子。根本的な問題は解決出来ていないが、それ

こそ原作キャラたちの仕事だろう。タイミング的にそろそろ騎士ク
ンとコッコロとの初エンカウント…

…しかし、不安は拭えない。

(……この先、物語は原作通りになるのか?)

ランドソルにアナザーライダーの出現、覇瞳皇帝が持つオムニ
フォーサイドブック、プリコネのキャラであるユウキが変身する
ファルシオン。直近の問題として、ファルシオン：仮に彼が原作キヤ
ラに憑依するタイプの『転生者』な場合、物語をどう舵取りするかな
んてわからない。事実、彼はオーズのレジエンドライドブックを何の
意図があつてか持ち去っている。ヒルマも取り返せとは言っていた
し…

(彼は味方なのか… それとも…)

「カリバーさん。」

「ふあ!?! …ああ、なんだ?」

しまった物思いに耽りすぎたか。一応、原作キャラ前にこれはいけ
ない…

「色々教えてくれてありがとうございます。ランドソルのお父様とお
母様が無事なことが知れただけでも本当によかった…。」

一応、彼女が食事しているその傍らに座りながらランドソルの現状
について話した。アナザーライダーや王宮騎士団とサレンディナ救
護員の動乱…あとは彼女の両親である王と王妃に大部分をはぐらか
す程度になったが覇瞳皇帝についても。

ペコリーヌも最後の点については食事の手を止めてい食い入るよ
うに聞いていた…。そして、両親の無事を伝えると胸を撫で下ろすも
…瞳からは 暗さが消えずまだ陰が濃い。

(まあ、本当に表向きは為政者としては信頼もある上に、彼女の両親ともまるで本当に親子のようなやり取りをしていたな…。)

本当にそこにいるべきなのは、彼女なのに。

「どうして、こんなことに……」

…あー、食べる手が止まってる。これは駄目な流れだ。空気を変えよう。

「答えが出ないことを考え続けるのは文学以外は不毛の極みだ。まずは食え。僕も頂く。」

「ふえっ？」

栄養と睡眠が足りないで考え事なんかネガティブな方向に行くだけだろ。まだ脳ミソがガス欠みたいだし、僕も正直なところお腹減ってたしな！この鮫野郎の肉を今度は喰いかえしてやる…！パクパクですわ〜！

化け鮫フカヒレをがぶっ… うわあ、淡泊う… (超薄味)

ねえ醤油とかない？ ない？ ああ、そう… (絶望)

「うふふ…あははははははは！ 面白いですねカリバーさんって。」

今、僕を笑ったな？ もっと、笑ってくれよ。(^U^)
やっぱりね、笑っているほうが一番だよ彼女は。

「そうだ、カリバーさん。はじめてあった時に私のこと『ペコリーヌ』って呼んでましたよね。」

ん？確かにそう……あ。

しまったああああ!?その呼び方はコッコロちゃんがつける渾名でまだ彼女はコッコロちゃんにエンカウントしてないから駄目なやつだ！今更だけど、やらかしてるじゃないか僕!?

「そ、そそ……そうだったけ……? (震え)」

「ランドソルでは本名を名乗るわけにはいかなさそうですし、名無しのごんべえというわけにはいきませんからこの『ペコリーヌ』という名前を名乗らせてもらっています。お腹ペコペコのペコリーヌ、なんだかしくくりきて気に入ってるんですよ☆」

「そう、か……なら、よかった……うん……。」

初エンカウント時の自分を殴り飛ばしてやりたい。

これ騎士クンたちとの初エンカウントの時にフオーロしないと面倒くさいことになるのでは？彼女がランドソルに再び戻ってくるのを見るに原作だとそろそろ第一話あたりだろ今。このまま彼女に貼り付いてファーストコンタクトに立ち会うか……あー、でもマツリちゃんに無事を伝えないと。でも、どうしようか……下手をしたら今日にもそんなイベントになりうる可能性が……

……

「……む？」

なんだ？ おかしな気配がする……

森の奥……鉄?……炎?……底知れない何か?

「!……カリバーさん、感じますか?」

ペコリーヌも勘づいたか。

何者かがこちらにかなり早い勢いで近づいてくる……。森の奥に揺

らめく山吹色、引き裂かれるような木々の音…。なんだ？なにがくる？

「…来ますッ！」

あれは…

「ファルシオン！」

★ ★ ★ ★ ★

…何なのだコイツは？

メタルビルドと交戦状態に入ったファルシオン。今迄、剣士や蛮族から魔物まで幾度となく相手をしてきたが、今回は毛並みがあまりにも違いすぎて攻めあぐねていた。

メタルビルドが使うのは二丁拳銃のトランスチームガン…恐らく彼用にチューニングされた黒いもので、木の幹ぐらいならゴリゴリと挟る弾丸を間髪入れずに撃ちまくってくる。剣でいなしながら、反撃の隙を窺うも10経っても分りロードすら行う気配すらない…あんな調子なら銃身がイカれてしまいそうなものだが。

「どうした、逃げ回るだけかい？」

「ほざけ。」

挑発。恐らくだが、コイツは遠距離だと分が悪いと判断して懐に飛び込んでくるのを待っている…。確かに銃撃は強力だが、決定打には

物足りない。

狙いは明白だが、ここはあえて飛び込もうじゃないか！

「…むんツ！」

「馬鹿正直に前から来るか。」

馬鹿正直に？バカめ、無策なわけ無いだろう。

「精霊たちよ、主様に力を…！」

「！」

追いかけてきたコツコロによるバフ魔法、加えて取り出す本を剣に翳す…

「虚無の…玄武神話!!」

「はあっ！」

玄武神話、強き母なる大地を象徴するエレメントと無銘剣虚無の滅却の炎を掛け合わせ、放つは獄炎に熱する礫の散弾。

思わず怯むメタルビルドへ更に容赦なく一太刀。寸前でこそ逃げられたが、手放してしまったトランスチームガン2丁が両断され爆発したのだった。

「やっってくれる…！」

開く間合い…再び詰められるうちにメタルビルドはドライバーのハンドルをまわし、巨大なランチャー砲、フルボトルバスターを形成して片手でファルシオンへ向ける。

「大砲か。だが…！」

当たらなければどうということはない。見るからに一発の威力はトランスチームガンを上回るだろうが懐に入れば確実にまた攻撃を入れられると止まらないファルシオン。そう…

「…フンッ。」

「！」

砲口が自分ではなく、コッコロを狙っていると気がつくまでは…

「コッコロ…ッ！」

「え…」

叫びも虚しく、バシユッ！とファルシオンをかすめて幼い少女目掛けて飛んでいく砲撃。いくら強い仮面ライダーだとしても不死鳥の翼で音速の動きは叶わない…。

無慈悲な砲弾が少女を粉碎…

否ッ！

「はあああああ!!!」

「!!」

寸前で阻む白銀の刃。

コッコロの前に割って入り砲弾を弾いたのはプリンセスソードを携えたペコリーヌだった。突然の乱入者…それは彼女だけではない。

「ジャアアクトオラゴン!!」

「ぬんっ!」

「ほう…!」

続けて頭上から斬りかかる紫の影。砲身で振りおろされる刃を防御し、その正体にメタルビルドは仮面の下でニヤリと笑う。

「カリバーか…面白い!」

「貴様、転生者だな!」

——激突。

転生カリバーさんとマジで真っ黒でヤベー奴。　その3

…仮面ライダーメタルビルド

登場作品は平成ライダーシリーズである仮面ライダービルド…その後日談にあたるスピンオフ作品である仮面ライダーグリスにのみ登場するメインヴィランたるダークライダー。本来ならビルドの暴走フォームであるハザードフォームを完全に制御、あまつさえ強化まで施された仮面ライダーだ。

ただ、このライダーは…いや、仮面ライダービルドという物語は世界線の直接的な繋がりにはセイバーとは無い。

だからこそ、カリバーにとってその登場は想定外であり…故に『転生者』と即断するには充分だったのである。

「…カリバー、ファルシオンに続きレア物だな。」

メタルビルドの飛び退き際、耳に届いた淡々とした声もやはり前世で知る演者の声と違う。それに、カリバーやファルシオンの名を知る時点で確定だ。

「まさか、僕以外の転生者がいるとはな…。しかも、メタルビルド……統一性ないぞ。」

「？　何を言ってるんだキミ…？」

首を傾げるメタルビルド…　カリバーとしても特におかしなことを言ったつもりはないのだが。

一方、コッコロを庇ったペコリーヌは怒り心頭に切っ先を向けた。

「あなたは一体、何者なんですか!? こんな小さな子を躊躇いなく……!」
「また新しい原性のNPCか。鬱陶しい、そのふたり以外に用は無
いんだが……」

しかし、彼女の問いを受け流しメタルビルドは新しいフルボトルに
手を伸ばす……

それを『待ってくれ』と制止するカリバー。

「君はどうして敵対する? ライダー同士なら助け合えばいいだろう
? 争うことはない!」

「……」

固まった……

そして、数秒の沈黙を経て……

「……驚いた。」

「は?」

「未だにそんな寝言をほざく輩がいるのか。……いや、君等もしかし
て転生してから日が浅いな?」

何を言っている? 呆れながらの口ぶりから少なくとも自分より
転生者キャリアが長いことは察せるカリバーだが、奴の真意が掴めな
い。転生者キャリアがなんだというのだ……。

「……僕はまだ数ヶ月といったところだな。それがどうした?」

「成程、境界の事情など知る由もないということか。道理でセキュリ
ティが甘いわけだ。」

セキュリティが甘い? なんだ、何を言っている?

「補足しておくが、ワタシはこの世界の転生者じゃない。『インベーター』：所為、敵対侵入者という奴だ。」

「…?」

「知らないならそれで構わない。君達を狩らせてもらう。」

そう告げるとフルボトルバスターを大剣形態に変形させ有無を言わず襲いかかるメタルビルド：その一撃をペコリーヌが刃ですかさず防ぐ。ガキン！と音を金属音が響き、ザリザリと少女の踏ん張る足に舞いあがる土煙が一撃の重さを物語る…。

(お、重い…！)

「だから、君に用はないんだがね…。」

「ペコリーヌ！」

庇われたカリバーは焦る…このままではいけない。されど、前衛向き彼女の前へ強引に出るのはかえって悪手だろい…焦燥にかられながら、メタルビルドの封じるべくライドブックを選ぶ。

「ジャアク昆虫大百科！」

「これで！」

「！」

昆虫大百科：何気にカリバーのお気に入りの一冊だ。闇黒剣月闇の刃に翳すと人間大ほどの巨大な毛虫が降ってきて粘着質な糸を吐きつける。これにより、糸まみれになったメタルビルドは勢いと機動力を封じられペコリーヌに圧しかえし、ギャン！と弾かれ火花が散つた。

尚、毛虫は蛾・蝶などの幼虫なので昆虫の括りではある。(キヤルちゃんには見せられない)

「ぐぬツ!?…舐めてくれるなよ。」

しかし、メタルビルドもそう簡単には怯まない。

「アギト!!」

紅いフルボドルを取り出すとベルトのメタルタンクボトルと交換しハンドルを回す。形成されるのは金の双角のような唾をあしらわれた紅い片刃の剣…明らかにビルド系とは不釣り合いな神秘的なそれにカリバーは目を丸くする。

「アギトの武器…だと!」

「転生者ならこれくらい普通だ。むんっ!」

メタルビルドが手にしたのは本来から仮面ライダーアギトが持つフレイムカリバーと呼ばれる武装だ。間違ってもメタルビルドが持つ縁も無い刃が振り抜かれるかり、炎のキャタピラ状の斬撃をとばしてくる。カリバーとペコリーヌも自らの刃で防ごうとするも、ガリガリと抉るような勢いと灼け付く高熱に耐えられず、今度はこちらが弾きとばされ地面に転がった。

「転生者の…力か、これが…っ!」

「…ぐっ、あ… 流石にヤバいです…ね…。」

追い詰められるふたり…しかし、メタルビルドの背後からファルシオンが迫る!

「成程、その手合いの力なら俺にもある。」

「『デイケイド世界旅行記! 仮面ライダーデイケイド!!』」

無銘剣虚無にライドブックを翳せば、マゼンタと山吹色の幻影が斬撃の嵐となり牙を剥く。世界の破壊者と全てを無に帰す滅却の業火が織り交ぜられた縦横無尽な苛烈なる鎌鼬、メタルビルドはフレイムカリバーとフルボドルバスターを交差させてガードをするが、防ぎきれず身体のあちこちから激しく火花が散る。

好機ツ、戦いのケリを一気につけるべくファルシオンが畳みかける！

「コツコロ！」

「はい！ 精霊たちよ、主様に力を!!」

コツコロによるバフ魔法支援、呼応してファルシオンに強い業火が纏われ：怯むメタルビルドに向かって金色の人間大ほどのカードの列が伸びていく。

「カラミニティストライクツ！」

そのカードの列を弾丸のように回転し、突き抜けるファルシオン。一点突破に趣きを置いた必殺技カラミニティストライクと仮面ライダーデイケイドの力を上乘せした一撃は容易くぶち抜き、目が眩むほどの爆発を引き起こす。

「…他愛もない。」

「ほう、やるじゃないか。」

「!」

だが、尚も燃え盛る炎から声がする。

声は人間ひとりがすっぽり入るキャタピラの繭とも言わべき球体から……。やがて、表面が剥がれると中からメタルビルドの姿が現れる。ダメージは多少なりとも蓄積しているようだが、余裕が見える立ち姿は本来の威力はかなり軽減されてしまっているのだろう。

「では、次はこちらの番だ。」

「マックスハザード・オン！ オーバーフロー！！」

「ハザードフィニッシュ！！」

そして、攻撃のターンはメタルビルドへ。

ハザードトリガーのスイッチを押し、ビルドドライバーのハンドルを回すと灰色のエネルギーが炎のように滾りキャタピラのエフェクトが大蛇の群れのように右足に収束していく。間違いなく大技を放つつもりだろう。

まずい！カリバーは慌て雷鳴剣黄雷に持ち替え、ファルシオンに並び立ちライドブックを取り出す。

「ファルシオン！」

「戦国鎧武絵巻！ 仮面ライダー鎧武・ジンバーレモン！！」

「…フン。」

「オーズアニマルコンボ録！ 仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボ！！」

恐らく、個々だけでメタルビルドへの対抗は困難。それは、カリバーとファルシオンどちらも認識していたこと……。だからこそ、一言だけでそれ以上の意思疎通は不要だった。互いにライドブックを読み込ませ、必殺技で迎えうつ。

「迅刃雷鳴斬ッ！！」

「エターナルロストブレイズ…！」

「ムンツ!!」

剣撃な稲妻を伴う柑橘を思わせるエフェクトをした斬撃と紫の不
死鳥へ。そして、メタルビルドの回し蹴りは津波のような灰色の炎と
キヤタピラを象るエネルギーとなり、両者は激しく衝突。ぶつかりあ
う衝撃だけで周囲は大嵐が如き有様で、ペコリーヌとコツコロが互い
の武器を杖がわりにしないと直立できないくらいの暴風が吹き荒れ
ていた…。

それが続くこと数秒、一際大きい爆発と共に技はどちらも相殺され
て仮面ライダーたちが地面に転がる。

「…ど、どうだ?」

「…っー!」

痛みに呻きながらも、黒煙の先に目を凝らすカリバーとファルシオ
ン…：流石に、メタルビルドが如何に凶悪なライダーとは言え、ひと
たまりもないだろう。というより、これ以上は勘弁してもらいた…：
い…

「ワタシとしたことが…。やれやれ、ビキナーと侮り過ぎたか。」

「!?!」

嘘だろ。…：思わず口から洩れてしまう。

メタルビルド、未だ尚も健在。装甲も亀裂が走りビルドドライバー
もパチパチと火花を散らして煙をあげているが、膝をつきながらまだ
変身を保っている。

「いい加減にしてもらいたいものだがな…。」

ファルシオンも悪態をつかずにはいれない。

しかし、メタルビルドは立ち上がるも手をあげて制止の姿勢をとった。

「まあ、待て。これ以上の戦いはお互いに不毛だ。君達にとってもワタシを敵に回すことは大きいリスクを伴う。

……ここはひとつ、『交渉』と行こうじゃないか。」

交渉…？

もうろくでもない臭いしかしくないのだが…と思う矢先のカリバーたちの眼前にドズン！と巨大なロボットが立ちはだかる。タイムマシーン…？

む…待て、手に誰かを握って…あの黒い猫耳は!?

「キヤルちゃん!？」

転生カリバーさんとマジで真っ黒でヤベー奴。 その4

何でここにキヤルちゃんが…？

少し時間を巻き戻そう。

まず疑問一…その答え。そもそも、プリコネ原作の冒頭はペコリーヌがキヤルに魔物をけしかけられるのをキツカケに騎士クンとコッコロと出逢うところから本格的に始まっていく。これは概ねアニメだろうと変わらないはず。

本来ならば、原作通りの展開を迎えるはずの物語…しかし番狂わせが起こってしまった。

「ちよつと、なんでアイツがここにいるのよ!？」

茂みから急襲をしかけようとしたキヤルの目に映ったのはペコリーヌと談笑するカリバー…そう、はからずも彼こそが原因だった。仮にも王宮騎士団のメンバーがいる中で、魔物を差し向ければ間違いなく大目玉をくらう。ましてや、クリステイーナの弟子ともなれば尚更…。それに、強行したとしても事情を知らないカリバーは魔物をペコリーヌと共に撃破してしまうのが関の山だろう。

「どうする？手ぶらでなんか帰れな……」

「こんにちは。君はこんなところで何をしているのかな？」

…え？

不意にかけられた声に振り向くと人影が。防護服と自分に向けられた銃口…彼女に残っている記憶はプシユンと気抜けした音と共に自分の意識が朦朧として暗転していくところだった。



「その子を離せ！」

「離すと思うかい？」

卑劣極まりない人質という行為に憤慨するカリバーを嘲笑うように、メタルビルドは彼を殴りとばす。すぐにファルシオンとペコリーヌが応戦しようとするも、見計らうメタルビルドがタイムマジーンを掌で操作しキヤルを握り締め上げる力をあげる。ギチギチ、ボキボキと鳴る音…甲高い少女の悲鳴が響きわたり、これでふたりを足止めさせるのには充分すぎた。

手を出せなくなった一行…その有様を確認すると改めてとメタルビルドは口を開く。

「さて、状況を理解できたようだ。勘違いしないでもらいたいが、ワタシは無益に命を奪いたいわけじゃない。あくまで、君達の持つ『仮面

ライダーの力』が欲しいだけだ。君らの持つ全てをこちらに引き渡せば彼女の安全は保証しよう。勿論、その聖剣の力も含めて：ね。」

狙い：仮面ライダーの力。カリバーとファルシオン自身の力からライドブックのままで根こそぎ奪うことが目的のメタルビルド。ただ、それに何の利益があるというのだ…？

「…メタルビルド、そんな行為に何の意味がある？」

カリバーもその点は気になっていた…。

その答えは至ってシンプル…

「——単純なことだ。ワザワザ研鑽を積むより、他の転生者から力を奪ったほうが手っ取り早く強くなれるからだ。」

…：…啞然。

手軽に強くなれる…ただそれだけのために卑劣極まりない行為にも手を染められるなんてカリバーやペコリーヌには到底理解できない。精神は戦士とは程遠い…やっていることは野盗と大差ないじゃないか。

言葉を失うカリバーをメタルビルドは嘲笑う。

「理解は示そう。前世の価値観・倫理観は早々捨てられない…：そして、そんなヤツほど他の転生者の喰い物になる。こんなふうだね…！」

向けられたブランクのフルボトル…：すると、カリバーから紫色のエネルギーが吸い上げられ容器の中に。変身解除と共にメタルビルドの手の中のそれはカリバーフルボトルへと変化…：そして、闇黒剣月闇とライドブックは色を失い無機質な灰と化してしまう。

そう、カリバーの力を奪いとったのだ。

「なっ…!?!」

「転生者は殺し合い、弱い者は強い者にシャブリ尽くされ踏み潰される。初心者だろうが、運が無かろうが、関係は無い。これでわかったかな？」

…さあ、次はお前だファルシオン。」

静かに舌舐めずりする視線は次の標的をファルシオンに移す。

このままいけば、彼も邪悪な意思に丸呑みされてしまっただろう…それでも、人質がいる限りは迂闊に動けな…

「許せ、ユウキ。——あの娘は諦めてもらう。」

——…は？

カリバーが己の耳を疑うより早く速く、切っ先を向けメタルビルドに間合いを詰めようと踏み込んでいたファルシオン。恐らく『本来のユウキ』なら絶対に行わない決断を僅か1秒もしないうちに下し、躊躇なく剣が振るわれる。

されど、メタルビルドの意表を突くことは叶わない。

「薄情だな、君は。ならば…」

卑劣漢が言うか。そんなことを言わせる間もなくタイムマジーンがファルシオン目掛けキャルを投げつけ怯ませると、メタルビルドは

ドライバーのハンドルを回し再び必殺技の態勢へと入る。

「ハザードフィニッシュ!!」

「仲良く死にたまえ。」

「させません!」

咄嗟にキヤルごとファルシオンを突き飛ばして身代り防御に入るペコリーヌ。プリンセスソードを盾に唸りをあげるメタルビルドのライダーキックを受け止め、地面に亀裂が走るほどまで力をいれて踏ん張る。

拮抗する両者、実に数秒間……

「剣が戦車に勝てるわけないだろう。」

「いいえ、負けません!この剣はあなたのような卑怯者なんか折れるような鈍らなんかじゃない! なにより、わたしは平然と命を軽んじる人を絶対に許しません!!」

「そうか。なら、良いことを教えてあげよう。メタルビルドは前身であるハザードの能力を全て引き継いでいる。

———勿論、この力はあらゆる防御を無効化にする能力も含めてだ。」

「!?!」

無慈悲な宣告と共に爆発。

メタルビルドはペコリーヌを貫き、勢いでキヤルもろともファルシオンを粉碎する。

直後、カリバーの前に空中から突き刺さるひび割れたプリンセスソードが彼等の完全敗北を無言で示すのだった。



「あ…ああ……」

なにが、少しでも原作通りにだ…幕開けすらいかなかったじゃないか。

皆、死んでしまった。ペコリーヌも、キヤルちゃんも、ユウキも…。残るコツコロも僕にはもう護れる力は無い。『本が無ければなにもできない』、トモの言うとおり僕に所詮は仮面ライダーなんて無理だったんだ。力も奪われ、地面に転がりこの始末…畜生。畜生…

「クソ…!!!」

『—だったら、本さえあればなんだって出来るんですね?』

…キョウカちゃんの声? 頭の中から…?

『—諦めるにはまだ早いですよ。これはまだありうる結末のひとつに過ぎないんですから。』



「——単純なことだ。ワザワザ研鑽を積むより、他の転生者から力を奪ったほうが手っ取り早く強くなれるからだ。」

「…!?!」

聞き覚えのある台詞がカリバーを再び嘲笑う。

「理解は示そう。前世の価値観・倫理観は早々捨てられない…そして、そんなヤツほど他の転生者の喰い物になる。こんなふうだね…!」

「このやり取りは…」

メタルビルドから向けられたブランクのフルボトル…そうだ、このあと力を奪いとられたあとに皆が全滅してしまう流れだったはず。ターニングポイント、運命を変えるならここしかないがどうしたら…………待てよ?」

(あのボトルがウォッチと同じ特性なら…?)

閃き。カリバーは咄嗟に、腰にひっさげていたファイズ人類進化史を翳す。すると、フルボトルが吸い上げたのはファイズ人類進化史の紅いエネルギーであり必然的にフルボトルはファイズのそれを封じたもの。無論、カリバーは力を失うことはない。

「なに?!」

メタルビルドも完全に意表を突かれ、隙を晒してしまう。すかさず、ファルシオンがミドルキックを叩き込み蹴りとばすと翻して即座にキヤルへの救助へ向かう。タイムマジーンの手を切り落とし、握り

しめられてる彼女から鉄の指をほどいて解放する。

「キヤル…無事で良かった…。——カリバー！ ペコリーヌ！」

安堵…そして、形勢逆転。

不利になったメタルビルドと相対するは、ファルシオンによりブースト…加えてコツコロにバフ魔法をかけられたカリバーとペコリーヌ。

「弱者が喰われるだとお？ ならア、『俺』がお前を喰い千切るツ！」

「習得三閃！」

「私はあなたを私は許しません！ プリンセス・ストライイク!!」

怒りを添えられ掲げられ、振り下ろされる剣が二振り。

うごめく闇と白銀の光が渦を巻く、巨大なエネルギーがメタルビルドに怒涛の勢いで襲いかかり反撃の余地すら与えずゴオオ！と呑み込む。森が吹き飛び、地が削れ、出来上がるクレーターにそびえるティアラを模したエフェクト…それは勝利の証。

それは、惨い未来が回避されたことの証明でもあった。

★ ★ ★ ★ ★

「主様、ご無事ですか!?!」

「ああ、問題ない。」

あたふたとかけよるコツコロを宥めるファルシオン……。想定外の強敵にアクシデントが重なったが、まあなんとかまともな『魔女』の手掛かりを掴めそうなのだ良しとしよう。問題は、あれだけの必殺技を受けて奴：メタルビルドが原型を留めているかどうかだが。

話せるラインが最低限、あの程度のクソ野郎は情報を吐き出させ終わったら息の根を止めてやれば良い。そうすれば世のため人のため…別に心は痛まない。

「あとは…」

残る問題：ペコリーヌとキヤル。さあ、どうしたものか…キヤルは気を失っているから良いもののペコリーヌはそうはいかないだろう。うっかり、先は『ユウキが』彼女の名前を呼んでしまった。気がつかれていたら、間違いなく問い詰められる。

「…（体よく誤魔化すか。）」

そして、最後にカリバー…

「…（もう少し、お前を観察させてもらおうぞ。）」

お前は様子見だ。なにはともあれ、腰をひとまず降ろしたい…

「驚いた…。過小評価しすぎたか。」

「「「！」」」」

否、そんな余裕などなくまたも、空気が張り詰める。

晴れていく黒煙…。そこに破けた防護服の男がひとり。マスクは破け、元は端正だったであろう顔に悍ましい爛れた火傷痕には怒りを燃やしていたペコリーヌでさえ息を呑む。ただ淡々とした口調は微かに痛みへの呻きを含みながら、自己紹介を口にする。

「今回はワタシの負けだ。敬意を払って君達に名乗らせてもらおう：ワタシは『転生者・ウラガ』。：いずれ、また会おう。」

「逃がすか！」

ファルシオンは逃がすまいとするが、それよりはやくタイムマジーンが彼を連れ去り何処かへ飛んでいく。こうなってしまつては流石に消耗した今の有様では追えない：悔しいが手掛かりは逃してしまつたようだ。

それに離れたところから、甲冑が擦れる音と複数の足音が近づいてくる：：：恐らく、王宮騎士団か。ファルシオンとペコリーヌとしては都合が悪い相手だ。

「：：キヤルちゃんは僕に任せてくれ。君達は立ち去るんだ。」

それを察したカリバーが気をまわし、へろへろな状態でありながらもキヤルをおぶって歩きはじめ。ペコリーヌが駆け寄ろうとする

も、ファルシオンが制止……この場は彼に任せることが最善だろうと無
言で諭す。

「カリバーさん……またお会いしましょう。絶対、絶対ですよ！」

そして、蜘蛛の子を散らすように去っていく彼等を見送りながらカ
リバーのおぼつかない足取りは真逆の方向へ。

「……さてと。」

背負っているキヤルは安らかに『すう……』と寝息をたてており、目
だった外傷等も幸いなことに見当たらない。

しかし、次に同じようなことがあったとしたら？メタルビルド……転
生者ウラガは尚も健在で奴の口振りからするに転生者は間違いなく
他にもいると見ても良い。そう考えた場合、この世界の物語は『原作』
通り動いてくれるのか……アナザーライダーの脅威もある中で自分は
何が出来るのか。

「……強くなるしかないか。」

結局、これしかない。

まだ在り来たりな幸せな日々はまだ来ない。そんな時間に自分が
入れるかはわからない……それでも、ただひとりになっても戦う。も
しかしたら、それが自分が『仮面ライダー』に為った意味なのかもし
れない。

——歩き続けなさい、カリバー。あなたは決して孤独な暗闇に
迷うことがないよう導きますから。

「あれ、またキョウカちゃんの声がしたような……」

颯爽！登場！転生セイバーさん、悪夢をゆく！（は？）
その1

ヒルマ「さくて、これまでの転生カリバーさんは…

…ちよつと事故りつつも原作がはじまるとウキウキに思ってた転生者くん。しかし、立ちはだかったのはメタルビルドⅡ転生者ウラガ！ 目的はなんとカリバーとファルシオンの力を奪うこと！」

カリバーさん「おい待て、今回のタイトル…（困惑）」

ヒルマ「辛くも退けたものの…（ㄉ、）ハア…厄介な奴に喧嘩を売ってくれたわホント。転生者同士のイザコザはマジで面倒くさいのに。」

カリバー「なあ…！なあ…!?!」

ヒルマ「主人公の選別ミスったかしら？それじゃ、最新話をどうぞ
♪」

カリバーさん「『転生セイバーさん』って何なんだ!?!?」

★★★★★

——汝、何故に『クラヤミ』に惑ったのだ…？

信じていた。異なる信念を抱いた…道は確かに違えた…でも辿り着く行く末は同じだと信じてその背中を見送った。遙か彼方に感じるあの日、友と握った聖剣の誓いは決して変わりはないと…

しかし、『お前』はかつて闇の剣を担った者と同じく力に溺れた。

友を、神官を、まだ若い騎士たちも、王族も、何もかもを斬り捨て…剣を奪い、本を奪い、大いなる力へお前は手を伸ばした。その果てに世界の破滅を望む心は野心なのか絶望なのかわからない。

——…：…：…教えてくれよ、友よ。何故、裏切った？

火炎剣烈火を引き抜き、そのまま血溜まりに没む遺体に問いかけても答えるはずもない。紅い剣士セイバーの胸にあるのは勇気ではなく、あまりにも虚しい嘆きのみ。最早、騎士の生き残りは自分のみ…息絶えだえになりながらも狂気に堕ちた盟友を自分は斬り捨てた。聖剣と本で成り立つ術式は消え、力を失った聖剣たちが墓標のように地面に突き刺さる。

終わった、何もかも。これで、全てが元通りに…：

「元通りなんかにはならないわ。この世界は終わる。」

唐突に響いた女の声。そして、見上げれば…

——空が、空が落ちてくる…!?

曇天を突き破り得体の知れない巨大な質量がこの大地に向かって

「うおっふう!? ……っ、夢か。」

歳の割に気抜けした渋めな声の悲鳴をあげてしまった悪夢から目覚め。タイムマジーンのコックピットに即席で作られたベッドの寝心地に時空移動しながらの睡眠のせいかな夢見は最悪の一言：世界最後の日なんて縁起でもない。あんなものはB級映画にでも任せておけばいい。

モジャモジャの赤毛頭をかきながら、枕代わりになっていた『火炎剣烈火』を眺める：夢見の原因はこれか？何かセイバーとかも出てた気がするし…

「ふあゝあ。まあいいや、朝飯でも食べるか。」

時空移動しているから朝も夜もないとか野暮なツツコミはなしだ。目覚めた今が希望の朝、それで良い。ポーチからクソデカサンドイッチを取り出してムシヤムシヤ… ついでにタブレット端末を弄びながら組織からの依頼を確認する。項目が多いのは『PKトライブからの護衛依頼』：これに青年は顔をしかめる。

「またかよ。最近、多いぞ…」

あまり穏やかじゃない。この手の依頼の多さは『並行世界間での治安悪化』を意味する：起床早々気分が憂鬱になるが、ふとタブレットと一緒にポーチから出てきていた写真に目が移る。自分とそれを囲うように女の子たちが映る一枚：もう彼にとっては随分と昔に感じるも、尚色褪せぬ景色。

…無意識にしかめっ面が少しだけ緩む。

「帰りにえなあ…。帰れるのか…。俺は…」

「…自分が何しでかしたか解つとんのか？」
「…」

どうも、転生カリバーさんです。僕は今、コカトリス亭という食堂にいる…御察しの方もいると思うが後々にペコリーヌがバイトすることになるマスターが物騒なイケボのあの店。やってみせろよ、マ●ティー…なんて巫山戯る間もなく、とある理由があつて立ち寄つたこの店で出待ちしていた案内役ヒルマに捕まった。

それから…

「解つとんのかつて聞いとるんじやー!!」

めつちや、説教を受けてる。僕なにかした？

「虫丼食えよ…」

虫丼…？ え、何それ…

「虫丼食えよおオオオ!!」

やめろー！ 白米に原型留めた虫乗つけた丼ぶり押し付けるなあ
!?

そんなもの、ペコリーヌしか喜ばない（キヤルちゃん死ぬ）
モラハラよ、パワハラよ、助けておまわりさん…僕がおまわりさ
んだったな（絶望）

「おい、いつまでその茶番を続ける気だ？」

あ、ハイ すみません。

同じテーブルに座る騎士クン（？）からの凄まじい剣幕…コツコロも若干ながら怯えているじゃないか。

さて、僕とヒルマ…それと彼等がここに同席している理由はある。お互いの事情を知りたいということ…そして、先日襲撃してきたメタルビルドこと新たな転生者ウラガについてヒルマに問うためだ。…まあ、僕はペコリーヌの現状を知る目的もあるのだが。

「これは失礼…そうね、そろそろはじめましょうか。」

空気が切り替わる…まず、話を切り出したのはヒルマ。

「改めて私は転生者の案内役ヒルマ…この世界の管理者と想ってくれて良い。あなたには色々と言いたいことがあるから呼び出させてもらったの。」

…どうやって、この世界に転生したのか？ …その無銘剣虚無はどうやって手に入れたのか？ 色々と見過ごせないのよあなた。」

あ、やっぱり転生者なのか。今更だけどな…

気になるのは案内役ヒルマが彼を把握していないという点。僕は何の因果か彼女に目をつけられる形での転生だが、彼はどんな経緯で騎士クンに憑依転生したのか…。憑依系にありがちなハーレムを作るとかそんな下卑た理由な気はしないんだかね。

「…まずひとつ訊きたい。」

お？どうした騎士クン…

「……………『転生』とはなんだ？」

…

……

「は？？」

★ ★ ★ ★ ★

「買い出し♪買い出し♪今日は買い出し♪」

「ペコ姐さん、うちの八百屋に是非！」

「荷物持ちは俺らが引き受けますよお！」

ランドソルの商店街：ペコリーヌとそれに腰巾着のようについてまわるヒゲモジヤな厳つい大男と細身なりーゼント男が上機嫌に歩きまわっている。そうこの男ふたりは『イカッチ』と『チャーリー』：アニメ版プリコネのオリジナルキャラクターでペコリーヌの舎弟のような役回りだ。じつはふたり、先日のメタルビルド襲来の被害者で今回はこれがペコリーヌと出逢うキツカケになったのである。（実はカリバーさんが最初に森で目撃した死んだおばけキノコに埋もれて干からびていたのも彼等）

「イカッチさんにチャーリーさんもそんなに気を遣わなくて大丈夫ですよ、自分で持てますから！」

「いやいや、ペコ姐さんに助けてもらった恩に比べればこれくらい！」

「そうですよ、俺達はペコ姐さんについていくって決めたんですから！」

気持ちには嬉しいが、力仕事の補佐なんて今の自分には必要ない…苦笑するペコリーヌだが不思議と胸に安心感と懐かしさがこみあげてくる。前にもこんなことがあったような…そうそう、『シヨイチくん』と買いだしに行つた時もこんな話をしましたっけ…？ コカトリス亭に帰つたら、マスターと一緒にメニューを考えたりして…

【—DEVOLUTION—】

(……………しよ、シヨイチくん？ 誰のことでしょう…。)

何だろう、聞き覚えのないはずの名前なのに。

まるで、旧来の知人のように自然と頭に浮かんだ名前…でも、頭の中で顔が輪郭を結ばない。なのになんで…

(私は…何かを忘れてるんでしょうか？)

「姐さん…どうしました？」

「ふあ!?だ、大丈夫です！ 先を急ぎましょ〜！」

チャリーが心配そうに覗き込こんでいる…いけない、いけない、心配をかけるわけにはいかない。きっと何かの思い過ごしに違いない…はやく買い出しを済ませてコカトリス亭に戻…

「あゝアん!? ふざけんじゃねえぜ!!」

「『—』」

突如として、平和な日常をぶち壊す怒号。

何事かとあたふたしていると、向こうの通りで山のような柄の悪い大男が山吹色のマフラーをした風来坊とおぼしき青年を突き飛ばしている様子が目に飛び込んできた。どうやら火元はあそこらしい…すると、チャーリーが青ざめた顔でペコリーヌに耳打ちする。

「…(ペコ姐さん、ありや質の悪い当たり屋ですよ！ランドソル外れにある洞窟を根城にしてるならず者で、力に物言わせて他人から金巻き上げたり、色んな店に言いがかりつけて潰してまわってるヤツツス！あのアンチャンには悪いですけど、関わらないほうが良いですよ!?)」
「……当たり前…。」

ペコリーヌとてそんな手合いは旅する中で出会う機会はまあまああったので驚きはしない。問題としては、被害にあつてる青年…地面に転がった彼は当たり屋に蹴られたり罵倒されたりとされるがまま。ドゴツドゴツと踏みつける音とうめき声が凄惨さを窺わせ、道行く人も思わず目を背けてしまう程。

「ごめんなさいで済めばよお、王宮騎士団も法律もいらねえんだよなあ？ よくも俺の大事な女の服を汚してくれたこの落とし前、どうつけてくれるよ…ええ？」

「悪かったよ、本当に。ワザとじゃないんだ…朝からろくに食べてなくてついうっかり…。」

あー、成程。風来坊の彼、どんな成り行きか知らないが当たり屋の後ろにいる水商売を思わせる服を着た女性（恐らく当たり屋の恋人）に因縁をつけられてしまったのか。彼女のケチャップで汚れた服と手に持つサンドイッチが全てを物語っている。

「手持ちが無いなら作りやがれ、それが誠意ってもんだろ？ せめて、手拭いぐらいは出せ…」

リンチの次に、当たり屋は風来坊の山吹色のマフラーに手を伸ばす

…布巾代わりにでもするつもりなのだろう。しかし…

ガシッ

「…おい、人が下に出てりやつけ上がりやがってこの豚野郎。」

睨。

伸ばされた腕は逆に鰐に咬まれたが如く締め上げられ、赤毛に隠れていた憤怒を秘める瞳がチラリと覗く…。触れたのは手拭いにあらず、仏の顔も何度と言っても逆鱗に触れば数えることなく堪忍袋の緒が切れる。グンと引っ張られるや自重に巨体が耐えられずよろめき、垂れてきた頭に砲弾のように凶暴な笑みを浮かべた頭突きがめり込む。

高慢な鼻は文字通りにへし折られ『ぐええ!』と流血を伴う汚い悲鳴が上がり、転がる巨体。近くの通行人たちは慌て逃げ、商店街の店舗は煽りをくって魚や野菜やらが地面に投げ出される。

「て、テメエ!？」

「生憎、腹の虫が鳴いてる上に居所も最悪なんだ。ただで済むと思うなよ? その贅肉まみれの腹、挽肉にしてやるぜ!!」

そこからは大乱闘。殴る蹴るの応酬、投げる投げられたり血飛沫が舞う有様の阿鼻叫喚…喧嘩の嵐は大きくなっけいき商店街の被害は甚大へまっしぐら。ペコリーヌにも顔面目掛け弾丸のように林檎が飛んできたため、パシッとキャッチ…その顔から笑顔は消え険しい。

「コイツはひでえ…ペコ姐さん逃げましょう!このままじゃ、俺達も巻き込まれちゃう!!」

「さ、はやくはやく……ペコ姐さん？」

イカッチとチャリーが逃げるよう促すが、逆にペコリーヌは荒れ狂う喧嘩の嵐……その中心へ。

狂気の沙汰、飛び込むなんて自殺行為。しかし、彼女は拳を握りしめ……

「食べ物を……」

「……え？」

「粗末にはいきません!!!」

ドゴオオオ!!!

颯爽！登場！転生セイバーさん、悪夢をゆく！（は？）

その2

…転生者つてなに？

いやまさか、目下転生者みてえなやつがする質問かよおそれが？

僕もヒルマも予想だにしない質問に面食らってしまった。

取り敢えず、ふざけてる様子でもなさそうなので可能な限り懇切丁寧に説明しようと思っただけだ…

「…ラノベとはなんだ？」

「ハーレム？ 転生者とは皆そんなことをするのか？」

「ギフトやら、チートとはなんだ？」

「ぷりこね…とはなんだ？」

喩えが悪かったのか、随所随所で突っついてきて話が進まないの何のって…：最初の前振りを説明するだけでヒルマと僕もグロッキー状態だった…。おかしいな、転生者だろうと原作騎士クンでもラノベや転生くらいは知ってると思うんだぞなあ！（半ギレ）

取り敢えず、当の彼にはご理解いただけただけで混乱の渦中にあるコッコロの頭を撫でながらウムウムと頷いている。…僕にもコッコロたんを撫でさせてくれないか？ 駄目…？ああ、そう（落胆）

「成程、概ね理解はした…。ならば、俺はその『転生者』という括りに入るのだろうか。」

「！」

やはり！ つまり、原作キャラに憑依する憑依系主人公タイプか

… ということは…

「じゃあ…君が転生者なら、その肉体の本来の持ち主の意識は…」
「ある。」

あるの!?! え、まさかの二重人格系!?! (驚愕)

「基本、『本来のユウキ』は表には出てこないがな。まあ、それも俺との『契約』の内だ。お互いの利害の一致でね…」

…: どういうことだ? 本来の騎士クンも転生者の『彼』を許容している? えーと、物語序盤はまだ精神が赤ちゃんだから交渉も何も出来ないと思う…:…: 待った、(精神的に) 年端のいかない赤ちゃんをだまくらかして肉体を乗っとりしたんじゃ…:

「何かお前、無礼なこと考えてるだろ?」

え、なんでバレた? (驚愕 ※2回目)

「…で、貴様らは何者だ? 何が目的なんだ?」

返しの質問。すみません、僕もなんとなくで戦っているのだからわかりません…: ヒルマ、頼むよ説明。あ、なんかもう最初から期待してないわって顔してるぞ…: 酷くない? 教えてくれないのお前じゃんか!

「さっきも言ったけど、『転生者』はある意味で劇薬…: いずれドン詰まりになって自滅する時間軸を別の並行世界の人間を連れてきて状況を打破する刺激とすることが目的。このカリバーもその役割を担う存在なの。そして、私は転生すべき人間を選定し導く『神』にも等しい存在。これで満足かしら?」

転生者ってそんな壮大な役割だったの? 自滅する世界を救うた

めの劇薬……でも、何か引つ掛かるような。元々プリコネに存在しないアナザーライダー出現は自滅の現象にしてはどうも腑に落ちないし、転生者が世界を救う劇薬というのなら僕らを狙ったあの転生者ウラガは一体なんだ？

それは、騎士クンも同じよう……

「待て。ならば、あの黒いメタルビルドとやらは何者だ？ 奴も転生者と名乗っていたぞ。」

「あー……あれか。」

指摘されるや、苦虫を噛み潰したような顔をするなヒルマ。

何か都合が悪いのか……？

「あれは役割を放棄した上に、我欲のまま他の転生者を襲ういわば『侵略者インベーター』タイプの転生者。何のキツカケか知らないけど、私のような管理者の手を逃れたりして、他人のギフトを奪ったり、並行世界そのものを荒らしてまわる厄介なならず者。割と最近、多いのよねえ……。私も何度も手を焼かされたことか……。」

侵略転生者：ハーレム志望転生者が可愛くみえるな。(ドン引き)

転生者ウラガがそれに分類されるなら、他ライダーの力を使うことや他人を襲うことへの躊躇いの無さに説明がつく。強すぎる力は心を歪ませるなんてのはトモの件でもあったが、完全に倫理観がぶっ飛んでたぞ奴……。何か未来予知みたいなやつ来た時、ペコリーヌたちごとファルシオンぶち殺してたし……ああはなりたくない。世界を救う薬が道を誤れば、毒のように牙を剥く……『劇薬』の喩えはあながち間違いではないらしい。

「だから、私はあなたを見極めたい。あなたがこの物語で何を為そうとするのか……。」

「……」

最終的に彼は何を望んでいるのか。

……すると、暫く沈黙のあとに…押さえつけるような静かな声で

「——『魔女』を殺すことだ。」

バアン！

「オイツス☆ ただいま戻りましたよ、店長…あ、ユウキくんにカリバーさん！ いらしてたんですね！」

「…」

唐突な来店のペコリーヌ。

いや、今かなりシリアスめな声してたのに強力な陽のオーラで重い空気吹っ飛んじやったな…うわ、騎士クンが口をへの字にしてすんごい微妙な顔してる…。どんまいだよ本当に。

「ペコリーヌ様。息災のご様子で…」

「コツコロちゃん！ …あれ、何か大事なお話の最中でした？」

そのとおり…なんだが、まあ続け辛い雰囲気だなこれ。ヒルマもやれやれって頭を抱えてる。わざとじゃないんだらうけど、あまりに夕イミングが悪過ぎる…。ん？

何か片手で引きずってる白眼剥いた赤髪の風来坊とおぼしき彼は
一体…

「あ、こっちの人はさっき商店街で喧嘩してたんですよ！悪い人ではないみたいなんですが、お腹が空いてるみたいなのでご飯をあげることにしたんです。」

やってることが、野良犬の餌付けじゃないか…。

あ、なんか『彼』のほうも何か言ってる…

「——俺はこれからこの人のペットにされるんだ…（絶望）」

おっと、それは美食殿のペット枠（猫）が黙ってないZO☆

★
★
★
★
★

「へ、へくちゅん！…だ、誰かを変な噂でもしてるのかしら？」

コカトリス亭の前でかわいいいくしやみ。

キヤルはペコリーヌを追い、ここまでやってきたものの…

「どうしてまたアイツがいるのよ…。本当に行く先々で目障りね…。」

窓から中を覗きこめば、ペコリーヌの周りにまたしてもカリバーが…それにユウキヤコツコロに見慣れない風来坊と取り巻きの多い。困ったものだ、戦力的に真つ向から挑むわけにもいかない上に街中である以上、魔物をけしかけるのも難しい。

かといって、今回はメタルビルドのおかげで逆にターゲットである彼女やカリバーに助けられるという失態を犯した手前、今度は確実にしとめなくては陛下にあわせる顔が…

「困ったわ…引けず、進めず、八方塞がり。せめて、ランドソルの外に出てくれれば…。」

「…どうしたんだ、キャルちゃん？」

「ぎにゃ?!?!」

そんな迷える仔猫の不意をつくようにヌツ！と顔を出したカリバー。

「どうやら、気が付かされていたらしい。」

「な、なによアンタ!? 別にあたしは何も…。」

「何も無い。なら、丁度いい…少し早いけどお昼にしないか。」

「は? 別にお腹なんか減ってな…。」

ぐうぐう

「…」

おや? おやおやおやおやおやおや?

カリバーは口には出さない…きつと殴られるから。ただ無言で真っ赤になるキヤルちゃんの顔をまじまじと眺めている。かわいい。

「お、奢りなさいよね。」

「勿論さ。」

「お待ちせしました☆ 裏メニューの『芋虫のクリームパスタ』になります！」

「…(…? …??)」

困惑と後悔。キヤルは目の前の光景に絶句せざらえなかった…。

促されて店に入るなり、何故か頼んでいないクリームパスタが出てきたまでは良い。問題はパスタにウインナーのように丸々と肥った芋虫が盛りつけられていることだ…。おかしい、ランドソルに昆虫食とかそんな文化は無かったはず…なのに、なんで平然と『食べ物ですが何か?』みたいな顔してお皿の上に並んでいるのか? 理解できない

い…したくない。

カリバー、お前なんでこんなもの頼んだ……

「(原作イベント) ヨシッ！」

なにがヨシだこの野郎。

というか、平然とペコリーヌやユウキまでもが『郷に居ては郷に従え』というやつか…』と黙々と食べはじめている。

やめろ、仮にも陛下が治めるランドソルにこの極小な偏食文化が全体に浸透しているような言い方をするんじゃない。国民が飢えに苦しまないようどれだけあの御方が苦勞なさっている…

「オイオイオイオイ、この店は客に虫を食わせるのかア〜？
ああん？」

あ、まともそうな奴がひとり。

風来坊の彼だけは、拒否の姿勢をとっている。よかった、至極当然な反応には安堵さえ覚え……

「ペットにはペットに相応しいメニューがあると思うんだニヤ。というわけで、特上ステーキ定食セットを御所望するニヤ御主人。」

前言撤回。貴様のようなふてぶてしいペットがいてたまるか。

明らかに被り物の猫耳した抗議は獣人をバカにしてるのかテメエと殴りたい気持ちに加えて常識人は自分しかいないという絶望感に打ちひしがれていると、明らかにカタギとは思えない物々しい雰囲気な店主がフライパンを片手に現れる…。もう一悶着は避けられなさそうだ。

「おい、アンタがこのふざけた虫パスタなんて作ったのは…」
「まずは食え。」

「あん？」

「食ってみろ。話はそれからだ…」

ドスの利いた声であくまで料理を食すことを促す店主。どうやら、絶対の自信があるらしい：風来坊も気圧され『はっ、虫料理なんて美味いわけが…』なんてブーブーと文句を垂れながら芋虫をフォークで刺してパクリ…

「！…ンマイツ!!」

「フツ、だろう？」

え、？ (困惑)

美味い？その虫料理が…？ その言葉に偽りが無いとパスタにがつつきはじめる風来坊。これには店主も得意気…

(…あれ、これ食べないと駄目な流れじゃない？)

このまま風来坊が騒ぎを起こせば、逃げるキツカケになったもののこのままお残しなんてすれば最後、おつかない店主のメンチビームはまったなし。

しかし、キヤルちゃんは虫が嫌いである。

どれくらい嫌いかと言えば、ゴキブリなんて見た時には悲鳴と無差別の魔法の乱射が止まらないくらい嫌いだ。陛下への忠誠心が揺らぐくらい嫌いだ。知能指数が赤ん坊並みになるくらい嫌いだ。とにかく嫌いだ。…そんなものを口の中に入れないといけない。

本当に嫌だ…しかし、ペコリーヌの隙を窺えるまたとない機会。これを逃したら…

——ん？ ちよつと待て、カリバーはなんか距離とつて水飲んでるぞ。

「あんだ、食べないの？」

「ああ…このあと先約があるんだ。プリンセスナイトでの食事会に出席しなくてはならなくてな。」

ふーん。食事会…王宮騎士団の主要幹部をはじめプリンセスナイトの面々で催される定期的な報告会だ。自分は呼ばれたことが無いが陛下や王族の方々を…出席なさって… なさって…？

「は？…なんでアンタがそれにでるの？ 私は一回も呼ばれたことないんだけど？」

「…（目逸し）」

ねえ、お かしい…よね？ 仮にも自分はカリバーより先に…しかも、王宮騎士団の親にあたる組織のプリンセスナイトの一員として少なくともコイツよりは長く陛下に奉公してきた身だ。そんな自分を差し置いて…なんで？

キヤルちゃんからハイライトが消える…。そして、虫パスタから一際大きい芋虫をフォークでブスツと突き刺すとカリバーに突き出し…

「死ねえいいいい!!!」

「おおウツ!」

突撃。しかし、口に突っ込まれる寸前でカリバーは防御…少女のか細い腕を掴み虫が舌に乗ることを防いだ。

「…!! …!!（言葉にならない怨嗟の声）」

「落ち着くんだ、キヤルちゃん…!」

それでも、プライドをズタズタにされた彼女は止まらない…。

すると、ペコリーヌが徐ろにやってくるなり、キヤルちゃんからフオークごと芋虫を取り上げると…

「キヤルちゃん…でしたよね？」

…食べ物で遊んではいけませんよ？」

——ギユツ

あ…。カリバーが制止するより早く無慈悲に可愛らしいお口に強引に押し込んだ…。数秒後、白眼を剥いてバタンとぶつ倒れ…ああ可哀想に失神してる。これは暫く復帰出来ないかもしれない。

★ ★ ★ ★ ★

「ほら、食べてみたらおいしいでしょう？ あれ、キヤルちゃん？キヤルちゃん?？」

…一応、原作の流れで良いんだよね？

僕としては一抹の不安を覚えつつ行く末を見守るしかなかった…。このあと、記憶が確かならコカトリス亭にキョウカちゃんとその友人から成るギルドとある『リトルリリカル』と続いて暴漢がやってくるはず。そして、悪行の限りを尽くす暴漢にペコリーヌが鉄拳制裁をしたことがキツカケに美食殿結成へと結びつく…そんなアニメの流れだったはず。

不確定要素はそこそこあるが、僕は空気に徹したほうが良いかもしれない。美食殿に合流したいのは山々だが、王宮騎士団の務めやアナーライダーや侵略転生者などの対処もある。ここはひとつ線を引

くべきだろう…

「それでは、僕はこれで失礼させて……………」

——何処へ行くんだ、カリバー？

「！」

ゾツと背筋に寒気が走る。不意に後ろからかけられた声は…リリカルのような可愛げも、暴漢のような荒っぽさも無く、ただ瓶詰め薬品のように冷たくドロリとしている。この声は凍りつくペコリーヌやユウキも身を以て知っている…そこらのゴロツキや魔物より遙かに残忍で冷酷で恐ろしい。

「……………転生者・ウラガ！」

「先日ぶりだね、諸君。」

招かねざる客。…火傷を負う顔が不気味にほくそ笑む。

颯爽！登場！転生セイバーさん、悪夢をゆく！（は？）
その3

…湿るような不気味さで、薄ら笑む招かねざる客。

転生者ウラガの登場に空気の緊張は一気に高まる。

（なんで…こんなことに？）

カリバーは知る由もない。本来、現れるはずの暴漢ブライは既にペ
コリーヌが風来坊と諸共にぶちのめしてとつくに病院おくりになっ
ていたことなど知りようが無いし、無論滞りなく原作通りに進むと考
えるのは自然なこと。しかし、代わりにやってくるのがそこの無法
者や下手な魔物より格段に危険な転生者なんてたまったものではな
い。

相手は初エンカウントした時の防護服ではなく薄汚れたベージュ
のコートを装い、既にビルドドライバーを腹に装着している。偶々遭
遇したのではなく、明確にこちらを潰しにきているという意味の現れ
か…

「…ペコリーヌ、キヤルちゃん。」

「コッコロ、下がってろ。」

立ち上がるカリバーとユウキ… 物々しくなる風の流りに周囲の
客たちも怯えざわつきはじめるが、そこにウラガへとギロリと視線を
向ける店主が割ってフライパンを突きつけた。

「オイ、客じゃないなら他所へ行け。ここは飯を食う場所だ。」

「問題ない。——どうせすぐ更地になる。」

「！　　まずい！」

危険。カリバーとユウキが察した瞬間にはビルドドライバーのハンドルをまわしているウラガ。周りには丸腰で無防備な一般人がいるにも関わらず、巻き込むことを厭わぬ変身。狂気の行いに即座にこちらも突進しつつ変身で対応する。

「変身!!」

「アンコントロールスイッチ！　ブラックハザード！　ヤベエー
イ!!」

「ジャアアクトオラゴン!!」

「エターナルフェニックス!!」

変身シークエンスが完全に完了する前に、メタルビルドを店外へ壁をぶち抜き外へ叩き出すカリバーとファルシオン。建物に大穴を開けて店主には申し訳ないが、人命が優先だ。

剣を構え、いざ開戦……と思った矢先に掌を向けるメタルビルド。何か言いたいことがある様子……

「まあ、少し待ち給え。今回はワタシから奪った力……ビルドとアギトの力を返してくれたら見逃してあげよう。2度目の奇跡は起こり得ないのだからね。」

「……？」

——何の話？

全く心当たりが無いふたり……　奴から力を奪った記憶なんて無いのだが……

ただ穴から覗きこんでいたキヤルだけは違う。

(それって……)



——良い、キヤル？ あの仮面ライダーの力がまだあそこに残っているはずだから、貴女に回収を任せるわ。くれぐれも誰かに…特にカリバーには絶対に見つからないようにね。

少し時間を巻き戻す。

キヤルは覇瞳皇帝の言いつけの元、最初にメタルビルドと遭遇した林を訪れていた…。文字通りに草の根をわける搜索活動を行い、愛しの陛下が求める『仮面ライダーの力』を早朝からずっと続けているのだが……

「…と言われたものの、どんなものなのか皆目検討がつかないのよねえく…。」

生憎、彼女に仮面ライダーについての知識は皆無に均しく、そもそも自分が具体的に何を探せばいいのかわからない。でも何かしら持つて帰らなければキツイお仕置きが待っているだろう…

『はあ…』と溜息をつきながら漁る藪の中… すると…

「ん…？ これって…」

何か落ちている…。拾い上げれば、ライドブックにフルボトル…それぞれ、ビルドとアギトで後者は確かメタルビルドが使っていたよう

な。

(もしかして…)

囚われていた際、意識は朦朧とした時にカリバーがメタルビルドに強烈な一撃を与えたのはうつつすら覚えている。まさか、あの時に奴が落としたのか…？

とにかく、これで陛下には怒られないで済むし、ついでにペコリーヌたちも始末してまえば一石二鳥なんて考えていたら…

(つまり、わたしはアイツにつけられてのを気がつかないでわざわざここに連れてきちゃったわけ!?)

とんだ招き猫である。もしランドソル城に直行していたらどれだけの被害が出ていたことか…考えるだけでゾツとする。

そんな青ざめる彼女のことには気がつかず、ペコリーヌは店の客たちを避難させにまわり、カリバーとファルシオンは少しでもメタルビルドを遠ざけるべく奮戦している…のだが…

「2度目の奇跡は無いと言ったはず…」

メタルビルド、余裕を見せ提案した割にカリバーに圧されている。

「何にせよ、貴様の提案に乗る筋合いなど無い！」

「習得一閃！」

問答無用、一撃。

迸る闇の斬撃が漆黒の鎧を削る。かなり強烈なダメージが入ったはず…地面に転がるメタルビルドに確信するも、カリバーは同時に妙な違和感を覚えてる。

(なんだ…。前に戦った時より弱くなっている？ …いや、まるでやる気が無い?)

初戦の時に比べれば、あまり攻撃らしい攻撃も無いのに加えて目ぼしい反撃すらない。そんな状態でありながら、口振りはまるで余裕を崩さない。

妙だ…。力を取り返しにきたというのなら、もっと死物狂いで襲いかかりにきても良いものだが…

「…ユウキ、何か変だ。」

「構わん。コイツを捕らえて魔女のことを吐かせる。」

違和感をファルシオンに伝えるも、無視。

ビルドドライバーを取り上げるべく、わざとらしく転がるメタルビルドへ手を伸ばし…

「…！」

その時、ギャン！と甲高い音を鳴らしファルシオンが自らに向けて投げられた何かを弾く。死角から投擲されたそれは物々しく弧を描いて地面に突き刺さり、正体を見たカリバーは絶句した。

(…サウザンドジャッカーだ?!)

スピアーのような金色と黒の機械槍…まさしくそれは、『サウザンドジャツカー』。仮面ライダーゼロワンの世界において、主人公たちに立ちはだかった強敵たちが愛用していた武装である。勿論、プリコネの世界に存在する物じゃない…

……ということは

「——いやあ、あんまり俺の連れを虐めないでくれないかね？」

予感的中。サウザンドジャツカーを拾い上げる真つ黒なバイクスーツのサングラスをかけた男。カリバーと同一年くらいの外見だが、金髪に浅黒い肌…何よりニヤつく微笑みが醸し出す遊び人のような雰囲気の対象的だ。

このタイミングで現れる新たな人物…様子を窺っていたヒルマは最悪の可能性が現実になったことを察する。

「…新しい侵略転生者？　まずい……」

恐らく、メタルビルドの仲間…能力は未知数だが、奴と同格の実力者の可能性が高い。

そうか、奴はそれを待っていたのか！

気がついた時にはもう遅い。男はドライバーを取り出す。

「ドクター、どうしたんすか？　救援信号が出てたからびっくりして飛んできたんすけど？」

「エデンドライバー!!」

【 L U C C I F E R 】

血管が浮き出るようなユニットが特徴的なエデンドライバー…しかし、取り出し起動した『人間』のゼツメライズキーは楽園ではなく『悪魔』の名を呼ぶ。そして、男は白く発光するそれをエデンドライバーへ装填。

「変身。」

【 プログライズ アーク！ 】

同時に彼の背後から立ち上がる巨大な骸骨の上半身のライダーモデル。妖怪に例えるならがしや髑髏といっても良いそれは呼び出した主の頭に食るように齧り付く。周囲は度肝を抜かれるが、あくまでこれは変身シークエンスの一貫…

【 — The creator who charges forward believing in paradise. — 】

骸骨は粒子となって仮面ライダーとして再構成される。漆黒のボディに浮かぶ骨格や血管のような白いラインに憤怒を顔に浮かべるような髑髏のマスク。

カリバーは知っている…：原典の物語では、楽園の創造主の選択に絶望した果てにその力を奪った傲慢なる悪意の化身。

【 — O V E R T H E E D E N . — 】

「…仮面ライダーシファアー!？」

仮面ライダーシファアー…：ダークライダーの派生、悪意に囚われた者や身を委ねた存在が至る『アークライダー』の一種。仮面ライダー

ゼロワンの劇場版にて主人公たちに立ちほだかつたラスボスであり、同作に登場した仮面ライダーエデンの強化型でもある。

要は強い。恐らく、下手をしたらカリバー単体じゃ手も足も出ないくらいに。

「敵か。」

「友達になりてきたように見えるか？」

カリバーが制止する間もなく、すぐに臨戦態勢に入ろうとしたファルシオン…だが、ルシファーが掌から白いエネルギー波を放ち吹っ飛ばされてしまう。幸い、受け身はとれたものの狙いは彼をメタルビルドから引き離すことが目的だったらしい。ルシファーはカバーするようにメタルビルドの元に歩み寄る。

「らしくないですなあ、アンタが遅れをとるような連中には見えないんですが…。」

「不測の事態でね…力を奴等に奪われた。私の力以外は全てくれてやる。後は好きにしろ。」

「好きにかあ…？」

悪意の視線はカリバー…いや後ろにいるペコリーヌたちに向けられる。仮面の下の表情は舌舐めずりをする野獣のそれ、そんなことなど付き合があるメタルビルドしか知る由が無いのだが…。相手はさしたる脅威でもなさそうで分け前の大半が自分が貰って良いとなれば首を横に振る理由などない。

「良いぜ、助けてやるよドクター。さあ、お楽しみ時間だ。相手してやるよ、ザコども。」

「…！」

——来る！

身構えるカリバーとファルシオン…その隣にペコリーヌとコッコロ…キヤルも並ぶ。

「私たちも戦います！」

「主様、カリバー様、支援はお任せ下さい。」

「乗りかかった船よ！あんなの放置できるもんですか！」

三姫結集。

物語の主軸を担うメインヒロインが戦場に揃うとなれば流石に壮観であるが、残念ながらカリバーに感動している暇は無い。今は未知数の脅威を退けることが先決…と気持ちを引き締めなおそうとしている矢先、何かが頭上から飛んでくる。反射的にキヤッチをするとなれば大きめな白いライドブック。どうやら、ヒルマが投げ渡したようだ。

「カリバー、ソイツにはその本が有効なはずよ！」

（このライドブック…そうか、これなら奴の能力を封印出来るかもしれない！）

迫る新たな敵…。託された力は勝機への糸口になるのか。

…そんな一部始終を、風来坊は不自然にまで落ち着いて観察していた。

颯爽！登場！転生セイバーさん、悪夢をゆく！（は？）
その4

仮面ライダールシファア…

悪魔の名を冠するだけに申し分ないスペックを持つ。

しかし、攻略の糸口が無いわけではない。

「良いか、奴の操るナノマシンと再生能力に怯むな！波状攻撃で隙を突いてベルトを破壊する！」

カリバーは知っている。ルシファアは原型であるエデンと同様ナノマシンを操る能力と上位互換のスペックを持っているが、原作では『初見殺し』の再生能力や諸々の優位性を悉く潰されてしまい、登場から物語クライマックスまでほぼワンサイドゲームで倒されたことを。

分かっているなら戦いようはある。原作と同じ対処でバックアツプのサーバーを無力化するのには難しいが、こちらには聖剣とライドブックによる戦術に加えて5対1と数も多い。仮面ライダー2人にペコリーヌによる前衛とコッコロとキヤルによるバフと火力の後方支援…あと駄目押しとファルシオン（ユウキ）のプリンセスナイトの力によるブーストも加えれば隙など無い。火力で押しきり、ベルトを破壊すれば決着がつく…

…問題があるとしたら

「…カリバーさん、『なのましん』ってなんですか？」

…そもそも、ナノマシンなんて知る由もない少女たち。

まあ一応建前として、このプリコネの物語は異世界ファンタジーみたいなものなので当たり前なのだろうが、ゆっくり説明なんてしている暇なんて無い。悪いが『見ればわかる。』とはぐらかしてファルシオンと共にルシファーへ突っ込んでいくカリバー。

「さあ、来いザコども。料理してやるよ。」

ルシファーも臨戦態勢へ。遠慮は不要、ファルシオンと二手に分かれて左右から斬りつける。サウザンドジャツカーもゼロワン系のライダーでなければ、ジャツクライズによるカウンターもありえないので接近もさして恐れることなど不要…寧ろ、内蔵されているであろうライダーモデルのデータを起動される前に封じることが優先したい。

「どうした、そんなもんか！」

しかし、ライダー2人が一気にかかっても怯まずサウザンドジャツカーを振り回し、押し返すルシファー…曲がりなりにもラスボスを務めたライダーは伊達ではない。ただ、前衛はもうひとりいる。

「プリンセス・ストライク!!」

「ぐっ!？」

追い打ちのペコリーヌによるプリンセス・ストライク。大型の魔物すら時に屠る気高きティアラを描く一撃は悪魔の胸部装甲を穿ち、大きく後退りさせた。今のは確実にダメージが入っただろう。

「ハハッ 調子に乗るなよ?」

ならばと、ルシファーはナノマシンの黒い潮流を頭上に集中させ骸骨を模した砲弾を複数作りあげる。バスケツトボールほどの大きさの一発一発…剣で受け流せるような威力と数ではないだろう…だが、

形成する最中に何処からともなく光弾が飛来して破壊。飛んできた方向に目を向けるとコッコロのバフ魔法を受け強化されたキヤルの姿が…。

——面白くない。

一方的な展開になりつつある戦いに少しずつ苛立ちを覚えはじめるルシファー。後方をどうにかすべく、次はサウザンドジャツカーのレバーに手をかけ…。

「させるか！」

「ジャアクな豆の木!!」

「！」

それも計算の内。カリバーがライドブックを月闇に読み込ませ、豆の蔓を放つ。蛇のように這い回り素早くサウザンドジャツカーに絡みつきこれを封印…これで、厄介なジャツクライズやプログライズキーを用いたハツクライズも使えない。

「小賢しい真似しやがって…！」

「パラダイス・インパクト!!」

なら、もう残る切り札はエデンドライバーからの必殺技のみ…足元に拮がつていくドス黒いナノマシンの海が避けられぬ死を告げる。ペコリーヌたちは水ともつかぬ未知の物体に動揺するが、カリバーだけはこの瞬間を待っていた！今こそ、ヒルマに渡された『奥の手』を使う時…！

「ジャアク氷獣戦記!!」

「チェック・メイトだ！」

月闇に翳したのは大きめの白いライドブック：凍てつく獅子を描かれたそれは『タテガミ氷獣戦記』。絶対零度の冷気を操ることを可能にするこの本は月闇に凍り付く禍々しい吐息を与え、一振りすればナノマシンの黒い海がルシファーすらも巻き込みカチコチに凍ってしまう。

これが、カリバーの狙い：相手が物理的に透過してしまうのなら、固めるから凍らせてしまえば良い。RPGゲームではまあまあお約束な攻略法であるが、ナノマシンの塊であるルシファーにも有効なようだ。

…あとは

「ぐあああ……おのれえ……」

「トドメだ！」

【習得三閃!!】

粉碎あるのみ。斬！斬！斬ツ！と凍てつき悶える悪魔を斬り刻み、決着。

氷の破片が宙を舞い、鎧に亀裂が走ったルシファーは地に伏した。……戦いはこちらの一方的な勝利で終わった。

「やった！ 勝った！勝った！ざまあみろってのー！」
「主様、カリバー様も流石でございます。」

喜ぶキャルとコツコロ……だが残念なことに、もうひとり残っている。
フアルシオンとペコリーヌが既に切っ先を突きつけているが…

「さあ、次はお前だ。」

「大人しく武装を解いてください。」

…メタルビルド。ルシファーという味方がいなくなったことで完全に孤立した侵略者。戦いに参加せず、助太刀の『す』の字の素振りすら見せず傍観していたこの男は仮にも自分を助けに来た助っ人に対して随分と冷たい。元から期待していなかったのか、或いは呆気なさ過ぎて呆れているのか……

何にせよ、多対一…この戦力で負けるはずもないし、いずれ騒ぎを聞きつけた王宮騎士団も来るだろう。勝機が失われる道理など……

「——転生者同士の戦いにおいて……」

「……？」

突然、脈絡なく口を開くメタルビルド。

その声は恐れも怒りもなく淡々と……口を開く。

「原作知識を基に建てる戦術は時に逆手に取られてしまう。初心者がやりがちなミスでよくある死因だ。」

なにを…何を言っているのだ？確かにふたりは背中に悍ましく冷たい震えが走るのを感じた。恐らくメタルビルドはこちら側の何かしらの見落としを指摘しているが…それが何なのかはわからない。いや、理解しようがなかった。

ことの重大さを推し量れたとしても、この場においてはカリバーとヒルマだけだっただろう。まあ、そのカリバーは…

【 JACKING BREAK!! 】

——ゴツ!!

ふたりの後ろで車に撥ねられた野良猫のように宙を舞っていたの
だが…

★
★
★
★
★
★

——何が…起こった…？

地に叩きつけられたカリバーは状況を呑み込めずにいた…。ルシ
ファーが倒れ動かなくなったの事を確認してメタルビルドの方向
をむいた時…不意に凄まじい衝撃に背後から襲われこの有様。悶え

ながらなんとか立ち上がろうとする最中、目の前に立っていたのは：

「残念だったなあ？ 『凍結』なんてなとづくに対策してあるんだよ。」

「…馬鹿…な…っ!？」

たった今、戦闘不能にしたはずのルシファー…。五体満足で戦いで受けたダメージの痕跡も何処にも無い。おまけに封じたはずのサウザンドジャツカーも綺麗な状態で主の掌で弄ばれているではないか。

おかしい。確かに、ダメージは入っていたのは確認していた…そして、回復を阻害する凍結も効果が出ていない。その種明かしは嘲笑されながら行われる。

「不思議かそんなに？ 当たり前だろ、弱点は克服なり対策なりするもんだ。奪い合い殺し合いの転生者の戦いなら尚の事。サウザンドジャツカーだって『予備』は用意しておくし、『生身の肉体』に仕込んだ一瞬で硬化するナノマシンと外側の自在に操れるナノマシンで二重の鎧。」

…そして、『あらゆる転生者どもから奪った力』！火力も抜かりはない!!」

ルシファーがサウザンドジャツカーを掲げると浮かび上がるいくつかのライダークレスト。その中には『仮面ライダーアクセル』を象徴するスピードメーターをイメージした『A』のライダーモデルも存在していた。確か、アクセルは加速の戦士…何より凍結や冷気といった能力には滅法強い。成程、ルシファーは予め用意していたこの力で凍結攻撃を乗りきったのか…

(サウザンドジャツカー2本とか、そんなのアリか…?)

「そして、お前の力もこの中に並ぶ！」

「…！」

最早、唾然とするしかないカリバー…そんな彼に非情な切っ先が鎧の亀裂に嵌り込まれる。腹に大穴を開けたサウザンドジャツカー…そのレバーが注射針のピストンのように引つ張られていくと激しい痛みと全身から一気に血を抜かれるような感覚に襲われる。本来なら、ゼロワン系列のライダー同士でしか起きないはずの現象をカリバーを襲っていた!

「ジャツクライズ!!」

「ぐ…おおおおオ?!?!」

「これが俺の転生特典能力(チート)だ。…終わりだ!」

数秒後、十分にエネルギーを吸い上げるとルシファーはカリバーを蹴り飛ばしてサウザンドジャツカーを引き抜き、トリガーを押してレバーを再装填。闇の力を蓄えた愛武器に不敵な笑みを浮かべると勢いよく振り抜く!

「JACKING BREAK!!」

「ハハハハッ!!!」

放たれるは模造された暗黒の邪竜。飢えた大蛇のように這い回り、一瞬でカリバーとファルシオンやペコリーヌたちをもろとも弾き飛ばして大爆発を起こす。

「ぐああああアアア?!?!」

「「キヤアアアアア?!?!」」

響き渡る悲鳴。仮面ライダーたちは耐えきれず変身解除し、ペコリーヌとコッコロは意識を失い、辛うじてキャルだけが地面に這いつくばり悶えている。戦いは簡単にひっくり返された…もうこの場に

抗う余力がある者は居ない。

卑劣な悪魔は折れた勇者たちの頭上でまた嘲笑う。死を前にする獲物を待つコンドルやハイエナのように……。ただ彼等は悠長に待つてくれたりはしない。

「そら、出しやがれ！」

「ぶっ!？」

虫の息のカリバーを更に容赦なく蹴り飛ばすルシファー。すると、ライドブックがその拍子に懐から零れ落ち……。そのうちのファイズ人類史を拾いあげる。

「ファイズか……—確か、ドクターのビルドとアギトは無えなあ。そっちはどうだドクター？」

「こちらも空振りだ。私の奪われた力は無い。」

メタルビルドはユウキの懐を物色するもお目当ての物は見つからず……。それもそのはず、ライドブックとフルボトルはキャルが持っているのだから。無論、彼女本人以外が知る由もないが……

「さて、どくこだ奪った力はよお？」

「うぐ!？」

ルシファーは既にぼろ雑巾のカリバーの首根っこを掴み上げる……。変身解除された生身の肉体に仮面ライダーの握力は過負荷なんて生易しいものじゃない。首の筋繊維が千切れ血管が破けそうな圧力に加えて脳にまわる酸素が一気に極貧状態へ陥り、辛うじて保つ意識と思考もチカチカと揺れるように明滅する……。

死の瀬戸際、悪魔の質問。唯一、まだ動けるキャルはその恐ろしい光景をただ震えて見ていることしか出来ない……。恐怖が頭も四肢も支配している始末。口は言葉にならない感情をガタガタと垂れ流すの

み…

それでも、とカリバーは最期の力を振り絞った。

「王宮騎士団に行くんだ、キャルちゃん!! 団長たちなら…!!」

「質問に答えろよザコ。」

——ゴキツ

言葉は最後まで綴られない。

あまりにも呆気なく…

彼の首は、簡単へし折られた。

「…あつ いっけね。」

命が奪われた目を覆いたくなる現実
に
ルシファアの気抜けするような言葉が…
キャルの耳にこびり付く。

颯爽！登場！転生セイバーさん、悪夢をゆく！（は？）

その5

「あー、いっけねえ。殺しちゃったよお……。はあくあ。」

物言わなくなったカリバーの死体が無造作にキヤルの眼前へ放り出された。

瞳は左右ともあらぬ方向を向き、口はだらしなく開き血が滴り落ちる死にたての表情に迸る悪寒……。それと恐怖。たった今、自分の目の前で人命が奪われた事実にはキヤルは気が動転して腰が抜けてしまっていた。

一方のルシファーはというと、人を殺めたというのにヘラヘラとまるで気に留めない。うっかり、道端の犬の糞でも踏んでしまったくらいの軽い言葉は罪悪感など皆無だと雄弁に語る。

「ま、いっか。もうひとりいるし。」

そして、悪魔はメタルビルドが踏みつける満身創痍のユウキへと標的を移す。

「さあ、坊や。次はお前だゾ？ 正直に吐いたら、身包み剥ぐだけで勘弁してやるからドクターの力は何処にやったノオ？」

「……知るか。」

「はー、見てないのかな？ テメエも死にたいのかア？ ああん??」

ユウキは答えない。答えようがない、本当に知らないのだから。すると、メタルビルドは踏みつける足を離して威圧するルシファーを制す。

「待て、本当に知らないコイツは持ってはいないのかもしれない。となれば、その転がっている小娘どもの誰かが持っているのかもな？」

「お？　じゃあここで剥いちやうかア？」

「盛るな。そういう意味で言ったんじゃない。」

下衆な会話が耳に入る…次は自分たちに悪魔の指先が移ろうとしている。それなのに、キヤルの足は生存本能よりも絶望の恐怖で支配されて動かない。

文字通りの震える仔猫。ルシファーがジリジリと迫る……

「やめろ、キヤルに触るな…！」

ユウキの悲痛な叫び虚しく、邪悪な手は伸びていく……

「あんまり、乳臭いガキには興味ないんだけどねえ？」

「………ひっ」

その指先が無垢な白い肌に触れ…

「うわっ、きつしよ。」

——斬!!

……触れることはなかった。

下衆の腕は宙を舞い、白いナノマシンと鮮血の混合物をまき散らしながらボトリと地面に落ちる。『あ?』と首を傾げるルシファアの目の前には何処から現れたのか、見知らぬ赤毛の青年が割って入り剣を握り締めていた。右腕を斬り落としたのはコイツだろう。

「なんだ、テメエ…エ…!?!」

青年はそこから間髪入れずにエデンドライバーに蹴りを叩き込みルシファアをふつとばす。如何に強力な仮面ライダーであろうと、変身ツールは急所…生身の人間からの攻撃だろうと場合によっては致命的なダメージになりうる。彼の動きは明らかにそれを『解つていた』もの。

「…!」

「遅い。」

すぐさま、メタルビルドもスチームガンに手を伸ばそうとするも…それより早く切っ先がビルドドライバーのハザードトリガーを突く。直後、ライダーシステムの維持そのものへのダメージがプラズマとなつて変身者本人に牙を剥いた。これで、メタルビルドも一時的ながら行動不能となり地面に転がる…

「いやあ、悪いね。『組織』の人間つてのは動くのに手間がかかっていけねえや。」

何者なのだ？ 突如として、飄々とした態度でダークライダー2人を蹴散らしたこの赤毛の青年は？

誰もなにもわからない……否、ユウキだけは彼の握る刃の名前を知っている……！

「——『火炎剣烈火』だと!？」

「お？リアクション大袈裟過ぎないか？ お前さんも『転生者』なんだろう？ そんなに驚くことは無いじゃん？」

火炎剣烈火……炎の聖剣。その登場はヒルマさえも目を見開いていた。

(嘘……。虚無に続いて失った最後の一振りが……まさか!?)

「おいイ、イ、ドクターアア!! 転生者が他にいるなんて聞いてねえぞ!」

ここにきて、番狂わせ。ルシファーは怒り狂い、意識があるキヤルも置いてきぼりとぼけえ……と呆けている。今、物語の流れは炎の聖剣を握る彼へと中心を据えていた……。廻る世界、紡がれるシナリオは足をすくわれた卑劣漢たちを見放そうとしている。

「俺の名前は『ルイス』、V E トライブ・時の円卓に属する転生者。そして……」

青年は『2021』と刻印された無機質なライドウォッチを取り出す。すると、女性の無機質な電子音声流れはじめた。

「——Lv3相当のPK行為を確認。変身による実力行使を許可、速やかに対象を排除してください。」

「セイバー!!」

続けて青年がスイッチを押して起動すれば腹部にファルシオンのそれと酷似した聖剣ソードライバーが出現。同時にライドウオッチは紅い龍が描かれたライドブックへ姿を変える。

まさか…。ユウキは目を見張る：炎の聖剣に勇気を冠す龍を綴った本は選ばれた者にしか扱えない。もうその人間はいないはずなのに…!

「ブレイブドラゴン!! ——かつて、世界を滅ぼす程の力を秘めた神獣がいた!」

変身シークエンスはカリバーやファルシオンと同じく、剣と本をドライバーに収めて力を溜める。フツフツと沸き立つエネルギーが火花となり、熱がこもった光が不敵な笑みを照らす。

…そして

「変身!!」

「抜刀!」

烈火が再び勢いよく抜き放たれ、ライドブックが表紙を開く。

同時に、炎の竜巻と紅龍の影が舞い上がり鎧を形成していった…。

「Wowow!! ブレイブドラゴン!!」

「烈火一冊! 勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く!」

権現するは烈火の騎士。 勇気の炎を灯す聖なる刃その名は…

「——仮面ライダーセイバー!!」

目を見開くキヤル。カリバー、ファルシオンに続く3人目の剣士の仮面ライダー…その登場を誰が予想出来ようか。そして、無謀にも彼は悪党どもへ挑もうとしている！

対するルシファーも黙ってはいない。切り落とされた腕を拾い上げ縫合すると怒り狂いながら飛びかかった。

「ぶち殺すツ!!」

「ふっ!」

振り回されるサウザンドジャツカー…しかし、一撃一撃をゆつくりと後退りされながら火炎烈火でいなされていく…。突きも薙ぎ払いも、なにひとつかすり傷すら与えられない。

「どうした、そんなもんか?」

「エグゼイド医療日誌!! ノックアウトファイター!!」

回避の刹那、ライドブックを刃に翳すセイバー。焦燥する連撃の間を見逃さず、文字通りに防御力を無視した炎の一太刀でカウンターを見舞う。

「ぐおアアア!? 舐めるなよ!」

思わぬ反撃を受けたルシファーは汚い悲鳴あげながら錐揉み回転してとんでいく。しかし、意地とばかりに受け身をとるとサウザンドジャツカーのレバーを引き再びライダークレストを模したライダーモデルや動物などのライダーモデルをありったけ展開してセイバーへ向ける。ひとつひとつが間違いなく必殺技クラスのそれらだが、すり抜けるようにどれもこれも当たらない。風に舞う羽のようにフワリと

躲し続けながら縫うようにユウキの元へ…

「借りるぜ。」

そして、散乱していたライドブックの1冊を拾い上げ火炎剣烈火へと翳して読み込ませた。

「デイケイド世界旅行記！」

発動したのは3体への分身。ライダーモデルの嵐を相手するには一見、心許なささうだが…

「刃王剣十聖刃!!」

「ATTACK RIDE SLASH!!」

心配することなかれ、かたや最強の蒼き聖剣『刃王剣十聖剣（クロスセイバー）』… かたや世界の破壊者の黒い刃『ライドブッカー』。創世と破壊、強大なふたつは余りあるだろう。

「はあっ！」

「せやっ！」

創世の蒼炎が焼き払う。破壊のマゼンタの斬撃が全てを粉碎する。ルシファアの全力はあまりに容易く振りふせられた。

「なっ…」

「終わりだ！」

慄く暇など与えない。トドメ…

「必殺読破！ ドラゴン一冊斬り！ ファイヤー!!」

「うおおりゃあ!!!」

火炎烈火の刀身が深くルシファアの腹へと滑り込む。普通の人間なら臓物に届く深さに容赦なく聖火の灼熱が流れていき傷口を焼く…。これには断末魔に近いおぞましい悲鳴をあげるルシファア…。それが勝敗を物語っていただろう。

「…貴様ツ ……覚えてろツツ 次合った時…ぎゃああああああああああ!!!」

「セイツ!!」

一閃。

振り抜かれたその数秒後、巻き起こる大爆発。

悪魔を滅した炎をバックに決めポーズをとるセイバーは軽く決めポーズ。

「まくた、カッコよく決めちまったぜ☆」

現れたる3人目。波乱の剣士は一体なにをもたらすのか、今は誰も知る由もない。

転生 ■■■■さん、追憶の夢

——12時になりました。お昼のニュースです。

昨日、XX県Y市で首の無い男性の死体が発見された事件で、現場に残された免許証から同市在住の『■■■■』さんと身元が判明しました。周囲に目撃者はなく、警察は殺人事件として捜査を…

★
★
★
★

……暗い ……暗い ……暗い

………僕はどうなったんだ？

頭がくらくらする。死んでなんかいられない… 守らなくては…

…守らなく……て…

「—ちよ…」

…誰かの声か？ キャルちや…

「—なさいよ… 起きなさいってば!!——リントロー！」

ベシッ!!

「あいた…!? …っ は?あれ?」

痛い。叩かれた衝撃で微睡みから一気に覚醒する。目の前には見慣れた猫耳が仁王立ちして立っている…ああ、キヤルちゃんか。…え、大丈夫なのか?メタルビルドは?ルシファーは?

「なに寝ぼけてんの? 朝練で居眠りするくらいなら、ベッドでしっかり寝なさいよ。それと朝ごはん出来てるからはやく来なさい。」

「…? …?? え?」

「…本当にあんた大丈夫? どっか、頭うつた?」

状況が呑み込めない。キヤルちゃんは僕を『リントロー』と呼ぶし、どういうわけか森の中で、しかも半裸で座禅を組んで膝の上には水の聖剣が青く清らかに輝いている…。

そうだ、僕は僕はルシファーに首を折られ…

「…折れて…ない…?」

慌て触った首は骨折どころか逞しい筋肉が柱のように支えていた…。昔の少年誌に流行った主人公並みのマツシブさだ…鍛錬の積み重ねと豊かな栄養があつてこそ育つそれは一度なら男子の憧れになるだろう。素晴らしい…。

「顔洗ってきたら? それで駄目なら病院よ。」

病院か……。ランドソルの病院は当たりハズレが激しいので勘弁願おう。取り敢えず、近くの小川で顔を洗おうか。取り敢えず、流れの静かな河辺で……

「…………お前は誰だ…?」

なんとということでしょう、水たまりを覗きこんだら見慣れてきた不健康な銀髪顔ではなく超健康体の黒髪爽やかなイケメンがいるのではないですか。…いや、どうということなの?もしかして、また転生したのか?—そんな馬鹿な。

とにかく顔を洗って、剣を担ぐとギルドハウスに向かおうと…

「服…!」

「はい?」

「服着なさいよ!! そんな裸で歩きまわつてるところユウキが真似したらどうすんのよ!」

あー、何か身体が自然に動いていた。女子の園にこの紳士の肉体美は些か不釣り合いか…でも、騎士クンがこの格好を流石に真似しないだろ。一応、アイツ転生者らしいし、赤ちゃんだった頃の騎士クンだったらともかく…

「——おーなーかーすーいーたー!」

なんとということでしょう。(2回目)

ギルドハウスの食卓にはユウキが…ちゃんと原作赤ちゃんがそこにいたのです…。いや、待ち給えよ。君、ファルシオンは?虚無は?転生者の人格は何処に行ったの??

「……? リンタローどうしたの??」

「あ、いや…」

これ演技とかじゃねえ、マジだこれ。というか、僕の呼び方がカリバーからリントアローになってるのはどういこと？台所にはペコリーヌとコツコロちゃんが楽しく談笑しながら朝飯の用意に取り掛かっているし、いつの間に美食殿結成したの…？もう色々わけが解らないんだが……

「キヤルちゃん、リントアローさんの様子がおかしいのですがどうかしたんです？」

「さあ？ さつきからずっとこんな調子なのよ。身体鍛え過ぎて筋肉に頭まで侵食されておかしくなったんじゃない？」

「た、鍛錬を馬鹿にしないで頂きたい…！ …？」

あ、あれ…僕こんなキヤラだったっけ？何かしっくりとしない…

僕は…僕は…？ リントアロー…『仮面ライダーブレイズの転生者』で…鍛錬の最中にペコリーヌに出逢って、それからコツコロちゃんがくれた騎士クンをさがしていて……

(……こんなことあったか？)

なんでだろう…覚えがない思い出が浮かんでくるけど、違和感はあるし薄れてくる。まるで自分が再構築されているような感覚…『仮面ライダーカ■b■』のほうか夢でこっちが現実のような気さえしてきた…。

——好きな方を選べばいい。

痛くて苦しい戦いより、暖かくて優しい日常を…。

ペコリーヌが料理を持ってくる。香ばしい匂いが鼻孔を擦り食欲を刺激し、胃袋がグウ〜と文句を垂らす。

「何事もまず食事から！ ご飯にしましょう☆」

テーブルに並べられる朝食。ペコリーヌの分だけは山盛りで、キヤルちゃんはそのれに呆れ散らかし、コツコロは食べ方がおぼつかない騎士クンの世話をやいていて…

ああ、そうだ。僕は転生したと分かった時からこの輪の中に入るところを夢見ていたんだ…。今はここが、僕の帰る場所…

「———いただきます…」

【とつとつ、起きろ。この寝坊助。】



「！ ……うぐっ!?!」

覚醒。首に酷い激痛…あと何故か動かない。あ、これギプスで固定されてるのか…誰か治療してくれたのか？ベッドの上に仕切りのカーテンに見知らぬ天井に消毒液特有のツンとした臭い…ああ、病院かこい。

…ん?…壁とかそこら中に血痕とおぼしきものが?

(なんか、見覚えが…)

「どうやら、目が覚めたようだなア?」

あ…師匠。…と、あと師匠と同年代とおぼしき眼帯を左眼につけた女性。あの紫髪は何処かで見覚えがあるぞ…えっと、確か…

「…トワイライトキャラバンの?」

「あら、私のこと知ってるのかしら? トワイライトキャラバンの『ミツキ』。この診療所のドクターをしてるの。」

そうそう、トワイライトキャラバンのミツキ。アニメだと病に侵された騎士クンを治療したものの、美食殿と一悶着起こしてしまった女医師。あれ…確かクリス師匠と付き合いあったっけ?お互い年長組ヒロインではあるが、特別接点があった記憶が無いんだが…

…つてことはこことワイライトキャラバンの診療所か。

「それにしても、本当に息を吹き返すなんて。首折れてたのよ…」

「まあ、コイツはそこそこ『特別』だからな。くれぐれも、他言は無用だ。」

師匠がササツと小切手にサインしてミツキに押し付ける。あ、そういう関係性…?

ふくん… いや、待った。

「他の皆…痛ッ?!?!」

「落ち着け、一緒にいた連中はお前より傷は浅い。手当てを受けて回復している。」

そうか…取り敢えず安心だ。メタルビルドとルシファー相手に死
人が（一応）出なかっただけ良しとしよう。ふう…と安堵の溜息を洩
らしていると、眠たくなってきた。もう少し寝ようか…

「待て。悪いが、まだ貴様には話がある。」

——はい？

★ ★ ★ ★ ★

数日後… ミツキ先生から手厚い治療を受け退院した僕。

まだ首のギプスは外されないが、仕方あるまい。取り敢えず、職務
に復帰して事務をメインにあとはパトロールの一日を過ごしている。
今もデスクで書類作成をしている最中だ。タイプライターで仕事を
しながら、僕は物思いに耽る…

（僕が死んでいた間……師匠の話によれば、紅い騎士が現れた…。ソ
イツがメタルビルドとルシファーを倒して姿を消した…）

クリス師匠が当事者から話を聞いた限りを僕に教えてくれて、色々
と死んでいた時に何があったかを知った。あの場にいた人間はトワ
イライトキャラバンにクリス師匠が放り込んでくれたおかげで事な
きを得た…。意図的かペコリーヌらユウキをそのまま確保はしな
かったのが幸いだ。ただ、ヒルマだけは何処にもおらず、例の転生者
の案内人がそうそう簡単にくたばりはしないだろうが…いずれ、確認
をとらなくては。

そして、例の紅い騎士は…

(おそらく、仮面ライダーセイバー……転生者だろう。)

侵略転生者をものともせず、蹴散らしたというカリバーに似た穂のを操る存在ともなればもうセイバーしかない。加えてエンカウントする仮面ライダーは原則、転生者なのでその例に洩れないだろう。彼は王宮騎士団が駆けつけてくる前に去ってしまったらしいが、何故に味方をしてくれたのか？ 転生者同士の違いにおいて漁夫の利を狙ったのなら、こちらが見逃された理由が説明がつかない…。

(まさか、純粹に善意で助けた……?)

ありえる…のか？

今まであった3人の転生者と照らし合わせるとにわかには信じられないが…

「わからんなあ……。気晴らしにパトロールでも行くか。」

ま、ぐるぐると答えにいたらない疑問を考えても仕方ないだろう。溜息をつきながら立ち上がり隣の席の同僚に挨拶する。怪我をおして出勤している上の気遣いか厄介な副団長の弟子という肩書きのせいかはさておき、特に小言すらなく送りだしてくれた。

…さて、問題はパトロールと言っても独りでウロウロは出来ない。副団長のように単独行動がそれなりに認められてはいるが、まだまだ王宮騎士団として日が浅い僕が好き放題やれば流石に他の団員からも印象はよくない。誰か一緒に行ってくれる人が…

「ねえ、見て。カリバーよ……。よく生きてるわね…」

「や、やべ。退散、退散…変に関わって副団長に絡まれたくねえ。」

「あんなのについていたら命いくつあっても足りねえぞ…」

——すつごい、避けられてる…。

駄目そうだな。仕方ない、一応は陛下に認められてる身だし単独パトロールにするか…。そう思って城門まで向かうと…

「…？ 団長にトモ… あと…。」

——キョウカちゃん？

ミミちゃんとミソギちゃんも一緒だ。何か話しこんでいるみたいだけど…？ あ、トモがこっちに気がついたな。

「あ、カリバー…そのすまない。そのちよつと手を貸してくれないか…」

なに、どうした？ お、キョウカちゃんがグイグイ前に出てきたぞ…

「カリバーさん、お願いがあるんです！ 私たちリトルリリカルを…
王宮騎士団に入れてください!!!」

「…」

…は？ (困惑)

転生カリバーさんとリリカルなお願い？

「王宮騎士団に入りたい…?」

やめろ、やめろ、怪我人にキツイ冗談だぞキョウカちゃん。

ミソギちゃんにミミちゃんも何かあんまり乗り気じゃなさそうだし、団長もなんとか言ってくださいよ。こつちにはもう手がかかるヒトリリリカル（27歳）がいるんだかr…

ドスツ（何処からともなく飛んできた大剣が地面に刺さる音）

「」

「——バカ弟子、今、私の悪口を言わなかったか…?」

いいえ、滅相もございません。……ええい、地獄耳め。

団長、可哀想だがこの娘たちには取り敢えず帰ってもらおう。師匠が来たら面倒くさい。団長もなんとかして欲しい…

「私もさつきから窘めているのだが、どうも聞き届けてくれなくてね。なんでも、カリバー…君の戦う姿に感銘を受けたとかどうか。」

ええ…（困惑）これは押し付けられる流れじゃないか。…しかし、団長とて暇じゃない…この城門の番人として役務が終わった後は鬼畜の山積みのデスクワークが待っている。彼女も子供の相手はまんざらでもない様子だが、後々の皺寄せを考えたら子守を優先させるのは負担が大きい。一方で僕は首が折れること以外はただの暇人…

「頼む、頼まれてくれないか？ 安全な商店街辺りを散策するくらいで満足するだろう。」

「…」

ううむ、出来ればユウキやペコリーヌたちの安否もなんとか確認したかったんだが…

「カリバーさん、お願いします！ わたしたち、カリバーさんのように強くなつてランドソルを守りたいんです！」

うおっ!? やけに食いつくなキョウカちゃん…

「キョウカちゃん、やめようよ…カリバーさんだつてケガしてるみたいだよ？」

「そうだよ、また今度にしようよ？」

ミミちゃんとミソギちゃんは乗り気じゃないみたいだな。うん、参つたなあ。追いつくのは別に難しくはないが、この勢いのキョウカちゃんを大人の目が離れてしまうのは如何なものか…。どうやら、僕にも責任がある上に上司からの願いがある手前、あしらうわけにはいかないか…うん。

「…分かった。ならば、パトロールに付き合ってもらおう。団長、トモちゃんを借りるぞ。」

「！ やったあ！ ありがとうございます、カリバーさん!!」

「えっ!? 私も…!? だ、団長!?!」

あとトモちゃんも同行してもらおう。僕だけだと、幼子3人は骨が折れるからな…もう折れてるけど。ほら、団長も領いてOKサインを出した。気まずいだろうけど、マツリちゃんは別件で居ないからしっかり付き合ってもらおうぞ…?

…あー、何か滅茶苦茶、渋い顔してるよトモちゃん。

★
★
★
★
★

「それじゃ、見回りいってきます。」

「うん、頼んだよカリバー、トモちゃん。それと、小さい団員候補さんたち。」

ジュンに見送られ、カリバーたちは城門を後にする…。

それから、一呼吸するとジュンは彼等に悟られないように兜を外す。アイマスクでまだ素顔は隠れたままだが、これで良い。彼はまだ自分の『甲冑の下』なんて知る由もないのだから。

「さて…私の目からも直接、見極めさせてもらおうぞカリバー…。」

彼が来て早、数ヶ月。色々あったが、騎士団を束ねる長として彼の本質を見極めるべき時は必要だった。共にランドソルの平和のため、に剣をとる者か、はたまた厄災をもたらす存在か…もしくは『道化』に過ぎないのか。

このタイミングはまさに頃合いだろう。

★
★
★
★
★

「キヤル、これをカリバーに渡しなさい。」

「へ、陛下？　　そ、それは…。」

キヤルは困惑していた…。玉座の間に呼び出されて何事かとすつ飛んできたら陛下から『新しいおつかい』。それは、彼女が手に持つふたつのライドブックをカリバーに渡すことらしいが…。1冊はメタルビルドから殺される寸前で持ち帰ることが出来た『パンドラビツトビルド』に後は知らない『一本角の騎士』が描かれたライドブック。後者はともかく、散々な目にあってやつとの思いで献上したのものも数日もしないうちに手放すなんて…。忠誠心は無論、揺るぎはしないが思うところがないかと言えば別の話だ。

「…へ、陛下。お、お言葉ですが…。その本はもう必要が無くなったのでしょうか…。」

「そうね…。私が持っていてもうさして役に立たなくなつたのよ。そのほうが有効活用が出来る。アレにももつともつと働いてもらわないと…。」

…なんで。

陛下には自分がいる。どうして、あんな何処の馬の骨と知れない輩に目をかけるの？ 自分のほうがずっと側にいた。自分のほうがあなたに尽くしてきた。期待なら自分が応えられる…。それなのに…

「…(…どうして?)」

「——キヤル。」

「!」

しまった！心が離れていた間にキヤルの目の前に陛下が立つ。そびえる巨塔のような威圧感…。見下す視線は『お仕置き』の前ぶれ。神

にも等しい主の声を僅かでも蔑ろにした従者に罰を下すのだ…。謝罪も許しを乞うても無意味、それは文字通りに身に刻まれている。ヌツと伸ばされた冷たい手に絶望と恐怖でキヤルは萎縮し……

「お願い、わかって頂戴。」

「へ?」

否、その手は予想と反してポンと優しくキヤルの頭に置かれる。まるで、幼子をあやす母親の掌のように。

「今、王宮騎士団をこれ以上は弱らせるわけにはいかないの。そして、カリバーが強くなることはランドソルやなによりも大事なアナタを守ることに繋がるわ。信じてくれるわね?」

「は、…は、はい…!」

夢にも思わない優しい声に困惑するあまり、思わず挙動不審に飛び出す返事。何が起きてるのかまだ脳内は整理できないどころか処理落ち寸前なのだがなんとか思考を保ちきる。崇拜するお方である陛下だが、自分が無礼を働いてもなおおこなに穏やかでいるなんてあまりにも珍しいし、撫でられたのもかなり久しい。

今日は逆に不気味で恐ろしいくらい寛大だ。キヤルとして嬉しい限りだがいつコロコロと機嫌が変わるとしれないのもまた事実。

「す、すぐに届けてきます陛下!」

「気をつけて行ってらっしゃい。私のかわいいキヤル。」

…幸せは冷めないうちに。弾むような足取りでキヤルはその場を後にする。きつといつか以来の幸せな時間だったろう。———例え、それが偽物だったとしても。

「ふう…」

寂しげに溜息をつく覇瞳皇帝。すると、輪郭が布のように解け中は脱皮するように彼女は身体は『別人』へと変化する…いや、正しくは元に戻ったと言うべきか。

「こうでもしなきゃ、睨まれておしまいだものね。」

蒼い瞳に灰がかかった金髪…。服装もランドソルのものとは異なる異邦のもので…纏う藍色のローブはタイムジャツカーの意匠を彷彿とさせる美しい女性。

一方、彼女から剥がれた覇瞳皇帝の形をした皮は黒く脱ぎ捨てられた下着のようにクシヤクシヤになりながらまだ蠢いている。これはプリコネのアニメ版の時間軸で猛威を振るった『シャドウ』という存在である。結局、明確な正体は複数シーズンを経ても語られることはなかったが、この世界においても存在自体はしてはいるようだ。

本来、まともに触れようものなら『ロスト』…すなわち、世界や人々の記憶から殆ど『無かったこと』にされるほど危険な存在だが彼女にとってはこの程度なら指先一つで使い魔や魔導具の真似事をさせることすら容易い。

「さ、陛下。キャルちゃんは行きましたよ。」

女性が呼びかけると、玉座が動き…その下には地下通路の入口が出現して中から覇瞳皇帝が現れる。カラドボルグを引きずり、その姿は国の統治者というよりは戦場帰りの兵士のようにボロボロな有様。こんな姿を万一、キャルが見ていたらパニックになっていただろう。

「ハミル…少し、甘すぎじゃないかしら。見てるこっちが悪寒したのだけでも。」

「私は陛下がうまく出来ないことをやってさしあげただけのつもりなのですか？」

「…タイムジャツカーとやらは、随分と御節介なのね。」

覇瞳皇帝は彼女を『ハミル』…そして、タイムジャツカーと呼んだ。それに対し、彼女は顔をしかめると『ネオ・タイムジャツカーなんてすけど…一応。』と小さく修正を入れつつ、話を進めることにした。

「首尾はどうですか陛下?」

「ええ、新しい力の『濃縮』は進んでいるわ。…これが前の時間軸から出来ていればエリスだつて倒せたでしょう。」

計画は順調に進んでいる…ふむ、喜ばしいことだ。

覇瞳皇帝とカリバー…この2人が全てを打ち砕くカギになる…そのためには、両者共に成長してもらわなくてはならないのだから。

「ところで、予定外の『転生者』が現れたようだけどそれはどうするつもりなのかしら?」

「…」

嫌な質問で返してくる。まあ、予想はしていた…

平然とハミルは予め用意していた答を口にする。

「メタルビルドはともかく、ルシファーとセイバーは想定外でした。メタルビルドとルシファーは弱体化しつつも共に逃走中、セイバーに關してはこちらに危害を与える行動をとる可能性はかなり低いかと。」

「キヤルに手をあげた2人はカリバーにいずれ始末させるわ。ランドソルを土足で踏み荒らした罪をその血肉を贄として償ってもらいましょう。問題は聖劍を持つセイバー…」

「そちらは私にお任せを。アレは味方になるかもしれませんが。」

イレギュラーは多い。だが、メインシナリオの修正はまだ可能。元

よりアドリブは多くなるのは見越している…だから、利用できるものは利用してより確実な道を探っていく。セイバーはそのための一助になるかもしれない。

「そう。なら、アナタに任せるわ。ただ…次にキヤルが死にかけてもしたら…」

「——わかってるでしょうね？」

「…」

圧。

フン、魔王に相応しいドス黒さだが所詮はハリボテ。『本物』の自分には敵いはしない… されど、ここで事を荒立てたところで何の利益も無いのも事実。

「肝に命じておきますよ。キヤルちゃんたちは必ず守り抜きます。」

守る。おべっかでも戯言でもなく本気の想いで応えた。

そう、お互いに目指すのは『本物のハッピーエンド』なのだから。

怪我人に子守とか過酷すぎない？（白眼）

……引き受けるんじゃないかった。

子供っていうのはパワーの強い上にやんちゃな大型犬みたいなもので、無遠慮に大人を引きずりまわす。僕も（原作知識だと）おとなしめだったキョウカちゃんとタカをくくっていたが、舐めてたよ本当に。無尽蔵の体力、底なし遠慮なしの好奇心、単純なランドソルの商店街の散策であろうともほれ大冒険に早変わり。

「カリバー……大丈夫？」

……大丈夫に見えるかいトモちゃん？

お年寄りの道案内や御婦人の荷物持ちならまだ良いとして、マジでゴロツキの群れとか闇のDMが働いてそうなお店に突撃したりとかはやめてもらえないかなあキョウカちゃん!! いやあ、子供の世話つて大変。全国のトーチャンカーチャンお疲れさまです。僕は干からびてもう駄目だ。

「もうちょいしたら、休ませてほしい。」

「わかった。キョウカちゃんたち、ちよつと良い？」

トモちゃんがいつてくれた……ありがたい。この隙にベンチに座り一息。あゝ、首の痛み。……ん？

「……」

何か物影からアイマスクみてえな眼帯でこっちの様子を窺ってる妙な軽装の女騎士がいますね……どうみても団長じゃないか。え、あんな門番の仕事はどうしたんだ？それに尾行するにしたってあまり

に雑：あ、そうか、僕に素顔はバレてないと思ってるのか。残念ながら、原作知識があるから無意味なんだなこれが。

概ね、僕の観察というところだろう。王宮騎士団に入って月日は少し経ちはしたが、ある意味の特別待遇かつ怪しいこの上ない僕は組織の一員として良好な関係にあるとは言いつらい。恐らくは今回の動きで信頼に足るから判断するつもりか…。

「カリバーさん、大丈夫ですか？」

「…ミミちゃん？」

おや、心配させてしまったか。ミミがこちらを覗きこんできてる…

「ごめんなさい、怪我をしてるのに。」

「平気さ。これくらいどうということはない。(首骨折)」

「やっぱり、止めたほうがよかったかな。元々は他のギルドをリトルリリカルの活動の参考にしようって話だったのに、キョウカちゃんが『カリバーさんのいる王宮騎士団を参考にしよう！』って聞かなくて…」

んん？ 王宮騎士団に云々かんぬんはリトルリリカル3人の総意じゃなくてキョウカちゃんが無理くり推してきたのか？いくら僕が助けたことがあるとはいえ、そんなに影響される？…まあ、幼子なんてそんなものか。

「やっぱり、止めよう。カリバーさんにも迷惑がかかるし…」

おやおや、落ち込んでるな。そんなに気に病むことじゃないぞ…：頭をナデナデしてあげよう。

「わ!? か、カリバーさん!？」

「お、嫌だったか？」

「い、いえ…。えへへ…」

顔を赤くして照れている：カワイイじゃないか。僕はロリコンじゃないけどこういうの転生者冥利に尽きるって…… うわっ、キョウカちゃんかすんごい剣幕でこっちを睨んでる!? 違うって、ロリコンとかへんたいふしんしゃとかそういうのじゃないぞ！ 断じて：！

「あつ ぐ、ごめんなさい！ カリバーさんは休んでてください！」
「…お、おう。」

ミミちゃんも察して、ビビって逃げてしまったな…。残念。

(…ま、何はともあれ何事も無さそうだ。子供の相手のほうが怪人や転生者より百倍マシだし。斬ったはったナシでこのまま終われば……)

「た、助けてくれええええ!!!」

…やべ、フラグ建てちゃった(白眼)

★
★
★
★
★

「ひ、ヒイイイイ!?!?」

(あれは、確か…アニメで出てきた…)

商店街の人混みを猪のように掻き分けて爆走する巨漢…悲鳴の主は彼だろう。カリバーは見覚えがあつた…確か、ブライと呼ばれるならず者で彼のココトリス亭で働いた横暴をペコリーヌが(鉄拳制裁で)諫めたことがキツカケになつて美食殿結成に至るといふ意外に大事な役回りのキャラクターだ。

ただ、かなり怯えた様子で何かから逃げている様子で…

「クスクス… 何処へ行くんですか？ まだ治療は終わってませんよ？」

理由はすぐにわかった。

彼を追っているのは死神のような鎌を持つ鬼の少女。

「…確か君は、トワイライトキャラバンのエリコ？」

「おや？ ああ…あなたは…カリバー…」

トワイライトキャラバンのパワー担当の用心棒だ。そして、絵に描いたようなヤンデレ。普段は怪しい笑みを浮かべている彼女だが、顔を見るなり険しい表情を浮かべた…カリバーとしては初対面になるはずなのだが。

「本当に動いてるんですね… 『不死』とは聞いていましたが…」

「不死…？」

「あ!! ああ!! なんでもないぞ!？」

しれっと、何を言い出すのか! 恐らくはクリステイーナが喋つたのか。

慌てるカリバーに不信な視線を向けるトモ… 見るからに怪しい相手に普段は耳にしない更に怪しい単語が出てくれば仕方ない。

「カリバー、知り合いなのか？」

「あー、えつと。あれだ、世話になった病院のナースさん……」
「ヤブ医者だ!!俺はコイツらに治療と称して人体実験されそうになつたんだよ!!」

なんとか取り繕うとするカリバーだったが虚しく、ブライのせいで余計に話は拗れていく……。さあ、これはどうしたものか……

「……ということとは『悪い人』なんですね?」

え?

急に屈託なく……それでいて冷たい聞き覚えのある声に思わず皆が振り向いた。キョウカだった……ミミとミソギの制止もそよ風のように流して爛々とした瞳が新しいおもちゃを見つけた仔犬のようにキラキラとしている。エリコを見据えている光は暗さなど一片も無いはずなのに、トモは何故か底知れない恐怖を覚えた……

「キョウカ……ちゃん……?」

「悪い人はやつつける、正義のヒーローの役割をずっと待ってたんです! カリバーさん、見ててください!」

「!」

異様な空気に、咄嗟にエリコは跳び下がりに身構えた。

同時にキョウカの掲げた愛杖から紫の火球が形成されていく……人魂とか生易しいものじゃない、一軒家くらいなら丸ごと呑み込めそうな獄炎の塊が揺らめいている。放てば最後、エリコは受け流すなり対処は出来るだろうが待つのは商店街が火事により大惨事になるのは間違いない。

「よせ、キョウカちゃん!」

カリバーも叫ぶが勢いづいた彼女は止まらない。

「いっけええええ!!」

(まずい!)

すぐさま、仮面ライダーカリバーへと変身。炎を止めるべく闇黒剣月闇に翳したのはタテガミ氷獣戦記、唯一の氷雪系ライドブックの力

で鎮火を試みる。しかし…

「ジャアク氷獣戦記!!」

——ズキン

「…ぐっ!?!」

首に走る激痛。彼のダメージはライダーシステムを扱えるだけに回復しておらず、阻むように疼くそれは集中力を容易く削りとつていく。そんな緩慢な剣先から放たれた冷気など獅子の息吹どころか仔猫の吐息のような有様で、あつという間に押し負けてジュツと音をたてて水蒸気が変わってしまった。

「駄目だ、間に合わな…」

「!」

その時、カリバーを風のように追い抜きエリコの前に立つ人影…：紛れもなくそれはジュンであり、大剣を地面に付きたて高らかに叫ぶ!

「インフェルノシールド!!」

形成されるは火球に劣らぬ光の大盾。王宮騎士団の矛をクリスティーナに喩えるならば彼女は正しく民と城、自らに続く団員を守る盾。その役割に恥じることなく大盾は火球を受け止めてはみせるが…：このままでは炸裂して結局は大火事になってしまうだろう。

ならばと、ジュンはカリバーに強く呼びかけた。

「カリバー!」

「!」

——もう一度立て!

名だけの一喝だったが、カリバーを理解させ振るい立たせるには充分だった。今一度、闇黒剣月闇を握りしめて痛みを歯を食いしばりながら氷獣の冷気を刀身に練り直す…。今度こそ技として放つ。絶対零度の獅子に恥じぬ強力な一撃で獄炎を鎮めるのだ。

「うおおおおお!!!」

振り抜かれる刃… 直後、巨大な氷の獅子が火球を呑み込んだとい

う。



…取り敢えず、目立った怪我人や被害が出なかったのは幸いというべきか。

「ぜえ… ぜえ…」

カリバーも変身解除し、剣を杖代わりに膝をついていた。怪我をおした肉体の酷使は想像以上にこたえるもので、激痛と血が薄められたような目眩といった酸素不足が著しい。

そんな彼の前にスタスタの歩いてくるジュン。

「平気…ではなそうだな、カリバー。」

「まあそうですね…。それより、何で…ここにいいのか訊きたいのです…が…?」

取り敢えず息切れしながらも真つ当な疑問でかえすカリバー。まあ、答は分かり切っているし、バツの悪そうな顔をする彼女を見れば別に突き回しても何一つ得は無いだらう。

それより優先すべきは子供たち…正確にはキョウカの処遇だ。既にエリコがニジリよつてきており、リトルリリカルがブライと抱き合ってぶるぶるしている凄まじい絵面が展開されている。フロローを入れなくては…

「待ってくれ…。彼女たちはこちらで任せてくれないか…。事が事、親御さんとも話をしなくてはならないしな…。」

「…」

カリバーが割って入られたことで勢いが削がれたのか、仏頂面でキョウカを一瞥するエリコ。溜息をついて『勘違いしないでください』と告げるや、鎌の柄でドズンとブライの頭を一撃。熟練の漁師が

魚をめたように彼は『ぐえ!?』呆気なくへナへナと地に伏した。

命に別状はないだろうが、脳震盪…暫くは動けないだろう。そして、伸びたセイウチのように重くデカい身体を引きずるようにエリコは片足を持つ。

「後始末は貴方がたに任せますよ。『子供』への説教なんて面倒なことしたくありませんから。」

「…ッ！」

——『子供』

その単語が出た瞬間、俯くキョウカの顔が歪んだような気がしたようなエリコ…まあ、幼子の癩癩など別に気にはしなかったが。

「ああ、謝罪とか別にいいです。仕事がつかえているので。それでは、ごきげんよう。」

ペコリと会釈するなり、ブライを引きずってその場を後にしていく彼女。華奢な躰にどうしてそんなパワーがあるのか…改めて、彼女とは揉め事を起こしたくないと思うカリバーだが、いずれ結成するであろう美食殿のことを考えれば悲しいが可能性は充分ありうる。その日が可能なら来ない、せめて遠いことを祈ろう…。

——さて、

「彼女は許してくれたが、僕達はそうはいかない。わかるね、キョウカちゃん？」

「…」

やるべきことはまだ残っている。

★★★★★

それから、暫くして……

すっかり日も暮れて、思わぬ外回りとなった王宮騎士団一行は城への帰路についていた…。子供たちはそれぞれ親元に送り届け、あわや大惨事の引金になりかけたキョウカちゃんはジュンからみっちり叱りを受けて親御さんにも全て事情を説明することに。今頃、彼女は2度目の説教を受けているところだろう。

年端のいかない少女を放火魔にすることを防げただけでも満足するべきだろうが、カリバーの足取りは何処となく重い。

——私は、カリバーさんのようになりたくて！ こ、こんなつもりじゃ…！

——守りたかったんです！カリバーさんのように悪いやつをやっつけてランドソルの平和を…！

(キョウカちゃん…原因は僕だったのか…。)

どうやら、自分は悪い影響を与えてしまったらしい。

キョウカはカリバーにとつて、最初に『仮面ライダー』として助けたヒロインであり思い入れもある。そんな彼女が自分を真似てあんなことをしてしまったのなら…やはり、凹まずにはいられない。前世でライダーキック問題（子供がライダーキックを真似して怪我をする）なんてものがあつたが、今回は間違えば大きい被害が出ていたかもしれない。彼女自身の心に大きな傷を負わせていたかもしれない。

(——ままならないな、仮面ライダーの役割は…)

転生者じゃなくて、ちゃんと原作の…本物の仮面ライダーならもつとうまく導けたのだろうか？正しい憧れであれたのだろうか？ —
—途方もない考えが頭の中をグルグルする…。

そして、城門前に差し掛かったところ…

「——ん？ あ、やっと帰ってきた！遅いじゃないの！」

「？ …キヤルちゃん？」

意外な出迎え。やれやれと『何処行つたのよ』と小突かれるが、沈みかけていたカリバーにとっては仄かに嬉しい歓迎だった。少しだけ胸が軽くなる…。

「アンタねえ、こっちは昼からずっと待ってたのに…ホント、待ちくたびれちゃったわよ！陛下から渡す物があるつてのに…。ああ、そうそうお客様がきてるわよ。」

——客？

ランドソルにも顔見知りが増えたが、こんな時間に誰だ？

「！…カリバー、あの子たち。」

キヤルの後ろの人影に真っ先に気がついたジユン。カリバーも確認するべく視線を向ければ、ついさっきまで一緒にいて別れたはずの…

「ミソギちゃんに… ミミちゃん…？」

「…」

…このふたりが事態を思わぬ方向へ運んでいく。

灯る暗闇

——それは、あまりにも衝撃だった。

突然、襲いかかってきた怪物を斬り裂いてやっつけた紫色の鎧。その素顔は優しい人：為す術もなく怯えていた自分に手を差し出してくれた。そのあとも、風の噂で活躍を聞いて……その人が王宮騎士団に居て王女様のお気に入りの騎士カリバーだと知った。
そんな凄い人だったなんて……

なら自分も恥じないように頑張ろうと努力した。図書館から難しい本借りたり、鍛えるために走ったり、家事の手伝いでもなんでも頑張った。でも……

——子供には危ないよ。ここから先は大人に任せな。

——君はまだ幼い。時が来るまで待つといい。

壁。 ……目には見えない、でも確かに存在する邪魔なもの。みんなが口を揃えて言う『子供だから』という理由……そんな簡単な呪文で現れていつもいつも通せんぼする。

それがとても気に食わなかった。君は賢いなんて褒める言葉もまるで口先だけにしか聞こえなくて……

「隙やりー……ちよ……ちよ!!」

「ひゃうっ!?!」

背後から不意を突かれる形でのくすぐり。

びつくりして振り向くキョウカはすぐにミソギの仕業だと気がつく。ニシシ、してやったりと笑う彼女の顔…全く人が悩んでいる時に！まあ、いたずら好きは今に始まった話じゃないし、今更カンカンに怒ろうがやめることは無いだろう。

「ねえねえ、眉間にしわ寄せてどうしたの？コカトリス亭のマスターみたいな顔みたいになってたよ？」

「…なんでもない。」

失敬な。まだ幼女といって差し支えない年齢であの厳しいオジサンと容姿で比較対象にされるのは嫌だ… 勿論、マスターが悪い人ではないし良い大人なのは理解しているけども。

「それじゃ、今日は何をして遊ぼうか？」

ミミの提案からいつものように一日が幕を開ける…。変わらない日常。つまらなくはないけど、心の何処かが満たされない。でも何をしたら良いのかわからない。

いつからだっけ。いつもこんなふうにぐるぐる考えてばかりになっただのは…

「うわあああああ?!?!」

「…」

その時、和やかな朝の街は引き裂かれるような男の悲鳴に叩き壊された。

何事と慌てるリトルリリカルに向かって外廊を被った男が走ってくる…顔はフードで見えないが酷く焦っている様子。その後ろからは波のように押し寄せてくる黒い影、シャドウの姿が。周囲の人間たちもこれには巻き込まれまいと慌てて逃げ出し、呆気をとられていた

リトルリリカルだけが気がつけば取り残されていた…。

「に、逃げないと…!」

「キョウカちゃんはやく!」

ミソギとミミも急いで逃げようとするが、キョウカだけは立ちすくんでいる…。その目にはシャドウに追い詰められる男を見据えており、少し悩むや友人たちの制止を振り切つて走りだすとそこへ割つて入る。

(きつと、カリバーさんならこうしたはず!)

「き、君! 危ないよ!! そうだ、これを使え!」

「?」

勇気か無謀か。その行為に対し、男はポケットから小さな小瓶のようなものを彼女へ投げ渡す。それが、『フルボトル』と呼ばれているなんて知る由もないが、カチャカチャと震えばドクンと胸が高鳴り力が漲ってきた。今なら何だつて出来る、感じたことがない全能感が脳髓を刺激して心地よい。

「す、凄い…これなら!」

振りかざした杖からは紫色の炎が溢れでた。こんなことははじめて…奇しくも、未知なる力は憧れたカリバーと同じ色。

今なら、あの人のように力を使えるかもしれない。

「いっけええええ!!」

そして、炎は一気にシャドウたちを焼きはらい全てを塵にした。呆気をとられるミソギとミミを尻目に男はニツコリ微笑みながらキョウカの頭を撫でる。

「ありがとう、助かったよ。その力は暫く貸してあげよう…これで君も立派なヒーローだ。」

「ヒー…ロー…?」

何故だろう。褒めらることはあったけど…今まで味わったことがない充実感が頭を満たされるキョウカ。もしかしたら、これが自分が求めていたかもしれない。

そう理解すると、自然に口角が釣り上がり眼が蕩けてくる…。もつと、もつと…この力を使いたい！皆に認めてもらいたい！カリバーに認めてもらいたい！

「わたし…ヒーローになる！」



「…ツツ」

なんてことだ。僕の予想より事態は深刻だ。

ミミちゃんとミソギちゃんの話から察するにフルボトルとおぼしきアイテムを渡せるとしたら、それはもう侵略転生者のウラガしかいない。例のシャドウに追われていた男とやらも奴だろう。先日、王宮騎士団の報告でルシファーと共に遺体などは確認出来なかったものの、セイバーからの手傷はかなり深いと見ていたがこうもすぐに行動を再開するとは…。

ビルドのフルボトルだとしたら、恐らくは怪人スマッシュの力…下手をしたら使用する行為が死に直結しかねない。

「…か、カリバーさん？」

「ミミちゃん、大丈夫だ。よく話してくれたね…。キョウカちゃんのことには僕達に任せて欲しい。今はミソギちゃんと一緒に帰るんだ。」

「で、でも…」

「大丈夫、僕達を信じて。」

取り敢えず、ふたりは家に帰そう。

問題はそれからだ。キョウカちゃんからフルボトルを取り上げるとしてどうする？このパターンは素直に渡してはくれないだろうな…。出来れば戦いにはなつてほしくない、相手はまだ幼い子供だ。

………待てよ、なんでウラガはフルボトルをわざわざキョウカちゃんに？

(スマツシュを作ったところでメリツトが無い…。)

「カリバー…」

あ、団長。しまった、一人で考えることに夢中になり過ぎていたか…。

「辛い、強引にでもその力を取り上げるべきだろう。次にキョウカちゃんが力を用いた時に大惨事になりかねない。」

「…しかし、相手は子供ですよ。」

「だからこそだ。叱って踏みとどませられるうちに止めなくては。このままいけば、あの娘もその周りも傷つくだけだ。取り返しのつかないことになる。」

…致し方ないのか？ もっと優しい解決手段はないのか？ 僕はこんな転生者でも曲りなりにも仮面ライダーなんだ、何か方法を…

「——カリバー、恐らく猶予はない。迷っているうちに全て取りこぼすぞ。」

「しかし…」

「役目を果たせ。——貴殿も王宮騎士団の一員だろう。」

「…」

悔しいが、何も思いつかない。団長の言葉をこみ上げる感情と一緒に呑み込み、闇黒剣月闇に手をかける…。仮面ライダーとして、何よりその活躍を見て育ったかつての少年として、子供に理由があっても大いなる力を向けたくはない。でも、これ以上の迷いは逃げ回ることと同義だ…

(…やるしかない。)

「ん？ そういえば、トモちゃんは？」

——え？

あれ、今まで一緒に話を聞いていたはずなんだがいつの間にか姿が無い。キヤルちゃん、何か知らない？

「え、ついさつき来た道に戻っていったわよ。血相を変えて…何か忘れ物でもしたのかしら？」

「！」

来た道の反対って、つまりキョウカちゃんの家の方向!?

「カリバー！」

「マズイ、悠長に話している暇は無さそうだ。」

★★★★★

——もし、自分の予想が正しければ…

夜が深くなる道を息を切らし、トモは走る。キョウカに渡された力が自分を怪物に変えたあの本と同質なものだとしたら…：そう思い至るや居ても立つても居られなかった。あの力はいとも容易く、鍛錬や人間である限界を凌駕した能力を簡単に授けてくれるが、一線を越えたそれは同時にもたらせられる全能感が使う人間の精神を侵す。

過去を振りかえれば悍ましい感覚が今でも蘇る…。大義名分をたてつつもその実は快樂を獲得するために力を振るい、超常者としての優越感から他者の許容が極端に出来なくなる。

そんなものが、自分より幼い少女の手にあるとしたら…

「はやく、なんかとかしないと…！ あれ？」

おや？ 道に人影…：キョウカちゃん？

何か足取りがふらふらとしているが…

「キョウカちゃん！」

「あ、あなたは…王宮騎士団の…？」

眼のピントが定まっていけないし呂律も若干怪しい。明らかにおかしい…もう彼女が身に余る力を持って余している証拠だろう。すぐにトモは飛びつくようにキョウカの肩を掴んだ。

「話は聞いた！君が貰った力をこっちに渡すんだ！ それは普通の人間には扱えない危険なものなんだよ！」

「…？ ああ、ミミちゃんとミソギちゃん…喋ったんだ。内緒にしてって言ったのに…」

「…キョウカ…ちゃん？」

一刻を争うが故の焦り…されど、その行動はかえって燻る火種をわざわざ燃え上がらせるようなものだった。仲間の背信を知った少女は逆に万力のようなパワーでトモの手を握りかえして突き飛ばすと…愛杖に引つ提げていたフルボトルを引きちぎる。

—— 刻印されているのは対魔の戦鬼『仮面ライダー響鬼（ヒビキ）』。

即ち、レジエンドライダーのフルボトル。

「どうして皆、邪魔をするんですか？ 子供のほうが都合が良いからですか？ そんなの身勝手じゃないですか！」

「違う！ そうじゃなくて…！」

「もう何も聞きたくありません！ 誰にもわたしの気持ちなんかわからない!!」

そして、激情のまたフルボトルの蓋を捻るとそこからドロドロと紫色のエネルギーが彼女を包み込むと、金剛力士像が如く隆々とした肉体を持ち人間の大人すら超えるであろうデカさの怪人へ変貌を遂げた。

「ヒビキ」

『ハアア…！ ハアア…!!』

「そ、そんな…」

アナザー響鬼。フルボトルで生まれながらスマッシュではなく、またしてもアナザーライダー。反り立つ双角と剥き出しの牙はまさに人々を護る役目の戦鬼とは真逆の怪異。

あまりの変化にトモは呆然としているしか出来ない。目まぐるしく変わる事態にもう心身共に追いつかなくて立ち尽くすばかり。こんなはずじゃなかった… こんなはずじゃなかったのに…

『このチカラは誰にも束縛されない！ わたしはわたしの正義を見せる!!』

「あ、ああ…」

雄叫びをあげるアナザー響鬼。もう止められない…カリバーも团长もいない。自分だけ… 終わりだ……

「——子供が安く正義を騙るんじゃない。」

「！」

否。力に溺れた少女を止められる男がひとり

トモの背後から歩いてきた人影。無銘剣虚無を携え現れたのはユウキ…その一歩後ろにはコツコロが控えている。

『な、誰…？』

「黙って聞いていたが、やれやれ。教えてやる、子供は力の責任と重さを理解しないから、大人つてのは時には嫌われても前に立つんだよ。子供が取り返しがつかないことにならないよう『守る』ためにな。」

『き、急に現れて何を偉そうに…！あなたは一体、何なんですか!?!』

突然現れて、唐突な説教。最早、挑発に等しい行為にアナザー響鬼は憤慨しトモすら声にならない困惑に口をパクパクするばかり。

そして、ユウキは堂々と見栄をきる。

「——通りすがりの仮面ライダー…というやつらしい。」

『…』

この見栄に、パチパチと拍手をしたのはコツコロだけだった。

罪と罰と…？

「抜刀！ エターナルフェニックス!!」

ドオオン！とランドソルの一角にある空地に巻き上がる炎と土煙。そこから飛び出してきたのはファルシオンとアナザー響鬼…綺麗に着地をするファルシオンに対しアナザー響鬼は受け身すらとれず地面に転がった。

『いたい！ いたい!!』

「——待って！ 相手は子供だよ！ …だとしても、加減は無理だ。」

内なる声が制止しようとするが、ファルシオンは容赦しない。情けは無用、手をこまねいてどうにかなる相手ではないし実際に着地した際に受けたであろう傷をもみるみる回復していく様はおぞましいの一言。ファルシオンは容赦なく刃を振るい続けた。

そこへ、カリバーとジュンが駆けつける。

「アナザーライダー!? スマッシュじゃないだと?!?!」

「トモちゃん、大丈夫?」

「だ、団長…。と、止められなかった…。キョウカちゃんが…」

トモの無事を確認しつつ、状況を確認…。ファルシオンがアナザー響鬼を圧倒している様子で闇雲に振り回す双剣をいなしながら、無銘剣虚無が切り裂き続けている。その一方、傷口が片つ端から再生しているため罅が明かないよう暴走を止められそうにない。

「やるしかないか。」

道すがらにキヤルから託されたライドブック2冊を見るカリバー…『甲虫遊戯ブレイド』『パンドララビットのビルド』…恐らく、これならばキョウカを分離させて助けられるはず。

「団長、ここは任せた。」

意を決し、ファルシオンの前に乱入しアナザー響鬼の双剣を薙ぎ払

う。

「キョウカちゃん！」

『カリバー…さん?』

突然、眼の前に現れたカリバーに動揺を見せるアナザー響鬼。そこをすかさず追撃しようとするファルシオンをカリバーは制し、彼女へ話しかけた。

「キョウカちゃん、お願いだ。君に剣を振るいたくはない。その力は危険な代物なんだ。」

『…そうやって、あなたまでわたしを否定するんですか!? わたしはあなたみたいに…』

「じゃあ、聞くぞ。今の君は、僕と同じか? かつての君がなりたかった自分なのか?」

『そ、それは…』

カリバーの問いにアナザー響鬼は言葉を詰まらせる。きっと、何処で自分の憧れと今の矛盾に何処かで気がついていたらだろう。動きが止まり、自分の数々の行いが脳内を巡り…目を反らしていた良心と照らしあわされていく。

正義のヒーローになりたかった…

でも、自分のしてきたことは…?

『わたしは…… なにを… いや、違う! そんなこと言って、この力があなたも欲しいだけ! 渡さない、わたしだけのこの力!! 絶対に!!』

それでも、蝕まれた精神は力を手放すことを拒む。致し方ない、再び紫炎をまき散らすアナザー響鬼にカリバーも力づくという選択肢を選ぶ。

「なら、痛みを覚悟するんだ。」

【土豪剣激土!!】

迫る紫炎に対抗すべく召喚したのは土豪剣激土。バスターソードに分類される唯一の大型聖剣でそれを盾にして受け流すとブレイド甲虫遊戯を刀身に接続して読み込ませカウンターを狙う。

「ブレイド甲虫遊戯！ 仮面ライダーカリス!!」

「—BIO—」

『!?』

発現した能力はアンデット由来の植物の蔦。刀身から伸びた緑の鎖は即座にアナザー響鬼を拘束し動きを封じてみせた。無論、アナザー響鬼も紫炎と筋力にモノをいわせて振りほどこうとするがそうはさせまいとカリバーは闇黒剣月闇にライドブックを読み込ませる。

「ジャアクな豆の木！」

「ふん！」

追加の『ジャツ君と豆の木』の蔦による拘束：流石に簡単には逃げられない。動きを完璧に封じた次に選ぶのは水勢剣流水とパンドラ Rabbit のビルドライドブック。

「パンドラ Rabbit のビルド！ タンクタンク!!」

「流水（ナガレ）ビルドアッププラスター！」

召喚される幻影は仮面ライダービルド・タンクタンクフォーム。青い重戦士はフルボトルバスター・砲撃形態を構えると水勢剣流水からエネルギーが充填され巨大な水流の砲弾が放たれる。弾速は速いとは言えないものの、蔦に雁字搦めのアナザー響鬼は為す術もなく直撃をもらい悲鳴をあげた。

『きやああああああ!!』

その際に、アナザー響鬼からキョウウカの姿が浮かび上がる…。聖剣とビルドと2つの怪人の力から変身者を分離させることへの特性を組み合わせたことで強い相乗効果が出ているらしい。あと一息…

「うおおおおお!!」

土豪剣激土を再び掴み、蔦にキョウウカを絡めて力まかせに引っ張りまわすカリバー。あとは彼女を分離させればアナザー響鬼は自壊するはずだ。

「やだー… やだやだやだ!! いやだ!!」

キョウウカはかなり抵抗するが、ライダーの力に敵うわけもなく一本釣りされる魚のように引きずりだされ、アナザー響鬼は変身者を失

う。そうならば、最早ただエネルギーの塊となった異形の肉体は『G a a a a!!』と言語にすらならない叫びをあげながらは沸騰し激しく暴れだす。

「あとは任せろー!」

好機。トドメを刺すべく飛び出したファルシオンは無銘剣虚無を肉塊に突き立てる。すると、彼の身体がマグマのように光と熱を発しはじめ…アナザー響鬼にも切っ先から業火を注入され内部から破壊していく。これで最後…

「駄目えええ!!」

「キョウカちゃん!」

しかし、鳶をふり解いたキョウカが悲鳴をあげながらアナザー響鬼へと走りだす。カリバーも制止しようとするが間に合わないし、ファルシオンももう必殺技を止めるには遅すぎた…。

数秒後、アナザー響鬼へキョウカが抱きつくのと同時に巨大な爆発がカリバーの視界を覆ったのだ…。

★
★
★
★
★

——守れなかった…

最後の最後で大事なものを取りこぼしてしまった…。カリバーは剣を落とし、ただ呆然と立ち尽くすばかり。力への執着を甘くみていた…まだ子供だ、取り上げて叱れば解ってくれる賢い子だと楽観していたのだ。

そして、結果はどうだ? 力に溺れたキョウカは炎に消えて灰だけが

残る。

解っていただろう、力に溺れた者は総じてどうだったのかを。サレンは自我を失い暴走、王宮騎士団の若き騎士は憧れが歪んだ冒険にはしり、トモは暴力を是とした。だからこそ、より幼く純真で染まりやすい彼女は慎重を期さねばならなかったのに……

『まだ…終わってませんよ。』

——？

ふと、かけられた声に顔をあげる。

聞き覚えがる声、もう聞こえるはずがない声……しかし、彼女はそこにいた。

「キョウカちゃん？」

確かに爆発に消えたはずの……いや、それにしては違和感がある。背丈がペコリーヌくらいまで伸びている上に、何処か憂いを帯びた表情というか何と云うべきか……

それに、誰もキョウカ(?)に目を向けようとしな。まるで、存在しないように……カリバーしか見えていないように……

『…あなたにはそのように私が見えるのですね。』

「え?…え?…」

混乱するカリバー……。死人が生き返るなんてありうるのか?まあ、自分がその代表なのはさておいてキョウカは別に特別な能力は無かったはず。それに、成長したビジュアルなんて原作や公式にも無かった……じゃあ、彼女は一体?

『今ならまだ間に合います。正しさを知るとは過ちの意味を知ること。アナタならきつと教えることが……』

「——何をしているカリバー！」

「！」

ジユンの叫びで我にかえったカリバー。眼の前には倒したはずのアナザー響鬼が鳶の拘束を振り解き暴れだそうとしているではないか。

(……これは……)

同じだ。メタルビルドに初遭遇した時と……

あの時も凄惨な現実からその一歩前に巻き戻るような事象が起きた。今回も同じだというのなら……

(月闇の力か……?)

闇黒剣月闇の能力は闇に由来する力だけではないもうひとつの力……『未来の予知』。厳密にはある種のシュミレーションみたいなものだが、その正確性は人により疎らで、おまけに見えた未来が必ずしも確約されるというわけではない。

仮面ライダーセイバー原作の登場人物たちを悉く絶望と裏切りへの道へと誘った危険なスキル……でも、見えたビジョンがこのまま行き着く未来なら……?

「正しさと過ち……か……」

あのビジョンのキョウカが言っていたことが頭の無かったで反響する……。取り上げるだけでは肝心のところが解決しない。なら、自分は何をすべきか……何を選ぶべきなのか……?

出来ることはあるはず。自分は仮にも仮面ライダーで……そして、『不死』。

「……」

ゆっくりと、カリバーはアナザー響鬼へ歩き出す……。剣を構え、ライドブックをドライバーから引き抜き刀身へあてがおうと……

『この力は誰にも渡さない!!!』

「！ カリバー!!」

無論、させまいとアナザー響鬼は双剣を振り下ろす。トモが悲鳴をあげるがカリバーは防御をすることなく…

——パタリとライドブックを閉じる。

次の瞬間、肉が切り裂かれる音と共に鮮血が闇夜を踊った…。

明日を夢みて

『…え？』

どうして…？ 自分の顔にかかる赤い液体に呆然とするアナザー響鬼。振り下ろした刃は変身を解いたカリバーの左肩を大きく深く抉る。傷口からは止め処なくドス黒い血が流れ地面でボタボタと滴っていた。

超常たる力の誘惑がもたらす意味不明な高揚が冷めて、憧れの人間を傷つけてしまった混沌と恐怖が胸の中を満たしていく…。どうしよう、どうしてこんなことに？

『あ、ああ……』

狼狽えているうちに変身は解けて、彼女の手にフルボトルが握られていた…。

それに気がつくときョウカは『ひいつ!?!』と投げ捨てる。やっと気がついた…そして、遅すぎた。これは理想の自分に近づくための魔法のアイテムなんかじゃない、強大な力を持つ凶器だ。自分はこれではない彼を感情が昂るまま切り裂いたのだ。

…つまり、人殺し。

「違う…ちがう、そんなつもりじゃ…!」

パニックのあまり逃げだそうとするキョウカ…しかし、彼女を強引に掴んだのは他ならない血塗れのカリバー。もう大人を振り払う力になどない少女の瞳にあまりにも大きくドス黒くて赤い過ちの痕が焼きついてしまうだろう…いや、ちゃんと向き合わせなくてはならない。

「目を逸らすんじゃない。これが君が酔っていた力がもたらした結末だ。人の命を守る力は簡単に人の命を奪えるんだぞ。君はそれをほんの少しでも理解していたか？」

「…ご、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

「謝るな！僕の質問にちゃんと答えろ!!」

「おい、よせカリバー!!」

トモが無理矢理に引き離すまでカリバーは容赦が無かった。彼の血で濡れたキョウカは泣きじやくり完全に喪失状態だが、まだ止まろうとしない。…されど、刀傷をまともに生身で受けて立っていられるわけもなくすぐに『う…』と気の抜けた呻きで身体は崩れ落ちていく。「カリバー…!? しっかりしろ!」

「いけない、すぐに治療を…!」

ギリギリで何とかトモに支えられ、すぐにコツコロが手当をすべく駆け寄る。傷はかなり深く流れる血は滝のようで処置をしなくては間もなくショック死してしまうだろう。無論、彼女たちは不死などという事情は知る由もないので仕方ないのだが、かなり焦っていた。

そんな2人を『退け。』押しつけたのはファルシオン：変身を解いたユウキ。彼は自身の付けていたドライバーをカリバーに巻きつけるとエターナルフェニックスのライドブックを開いて起動してみせる。

「—その身体、もう少し大事に使え青二才。」
すると、不思議なことが起こった…。

カリバーの傷が時を巻き戻すようにみるみる塞がり、血色も僅かながら回復していったのだ。意識は失ったものの、荒くなっていた息も穏やかになって一先ず安心だろう。残る問題は…

「…違う ……違う そんなつもりじゃ…」

「さて、こちらはどうしたものかな。」

謔言を虚ろに呟き続けるキョウカにジyunは頭を抱えた。



「お前マジでふざけとんのかー?!?!」

「……うっ!?!」

致命的なダメージを受けたことにより、セーフポイントの拠点に意識が強制転送された僕を待ち受けていたのはヒルマからのお説教だった。その金切り声は傷に響く、やめてくれ。

「オメーは子供にナイフが危ないことを教えるときにテメエの指を切り落として傷口見せんのかああん？ もっと他にもやり方あったでしょよ！ アンタを『直す』こっちの身にもなりなさいよー!」

「…僕にはあれしか思いつかなかったんだ。でなければ、彼女は確実に命を落としていた。」

本物のヒーローならうまくやれてたかもしれない。だが、僕はたまたま運良く力を拾った一介の転生者…本物じゃないんだ。でも、キョウカちゃんを深く傷つけたのは事実だし、言い訳は出来ない。

「…まあ、美食殿のメンバーじゃないからまだマシだけど。気をつけないとアンタの楽しい楽しい転生者ライフは簡単にオジヤンになるから肝に命じておきなさい。」

「…ああ。」

今回のような強行手段は自分でやっておいてだが、褒められたものじゃないのは理解している。もっと良い解決策があつたんじやないかとも思う…でも、僕はこれが限界だった。力を求める衝動を暴力で傷つける恐怖で枷をつける。僕は不死の転生者だから彼女が命を奪えはしないことは見越してその結果、暴走を止められはしたが…
「……まだやるべきことがある。」

★ ★ ★ ★

アナザー響鬼の騒動から一夜明けた。

幸い、被害は道端に焦げ目が出来たくらいで大したことない様子でランドソルも一見すると平和な日常を送れているように見えた。…

それは、あくまでもランドソルを全体的に見ればの話。当事者からすればそうはいかない。

特に、危うく人を殺しかけてしまったまだ幼い少女ともなれば……

「キョウカちゃん、大丈夫？」

「喋ったことは謝るから出てきなよー！」

ミミとミソギが外から呼ぶ声がする。されど、呼びかけられたキョウカは自室で布団にひっくるまり震えて出てこようとはしない。

まだ幼い彼女に人を殺めかけた罪はあまりに重すぎた。アナザーライダー化による思考汚染も無くなったためその十字架は恐怖と罪悪感で未熟な精神を押し潰そうとしてくる……ああ、自分はなんであんなことをしてしまったのか。

(もうやだ…… 消えちゃいたい……)

「あつ、カリバーさん……！」

「聞いてください、キョウカちゃんが出てこなくて……」

——！！

その時、一番に来て欲しくない人間の来訪を知らせる声が耳に届く。どうして……ビクツと震え、恐る恐る顔を窓から覗かせると仮面ライダーに変身した姿の彼が居る。こちらに気がつくくと手を振ると呼びかけてきた。

「キョウカちゃん、話がある！出てきてくれないか！」

「……」

怖い……また怒られるかもしれない。いや、今度こそ罪人として連行されるのか……仕方ないか、それだけのことをしたんだから。

布団から這い出して、虚ろな目で出入り口に向かう。もう子供だから許されるなんて通用しない……

「今、いきます…」

そして、ドアを開けると…まだ幼い少女のボロボロな姿に一瞬だけカリバーが言葉を詰まらせるも…すぐに気を取り直して膝を折って瞳から光を失った彼女に視線をあわせた。

「大丈夫、話をしにきただけだ。少し一緒に歩こう。」

★ ★ ★ ★ ★

ランドソルの街内を歩くカリバーとキョウカ…その歩みは別に宛所などなく気の向くまま。

「キョウカちゃんは何処か痛んだりしないかい？」

「…」

優しく気軽な雰囲気の話しかけようとするカリバーだが、キョウカの顔は暗い。無理もないのだが、彼は尚も話かけ続ける…

「…両親にも酷く怒られたろう？なあに、気晴らしだと思ってくれ。君が元気そうでよかった。」

「……………何が…よかったんですか？」

——？

ここで、はじめて反応を示した彼女。手が震えている…俯く顔は隠れているが、恐怖しているようだった。

「わたしは…傷つけたんですよ。あなたを、殺すところだった！そんなの何一ついいことのわけ…！」

「——卑怯者、嘘つき、無責任。」

え？ 唐突な胸に刺さる言葉の羅列。戸惑うキョウカ…一体なにを？

「……そんな悪い子供は悪い大人の格好の餌食になる。そして、手遅れになった子供の末路は悲惨だ。」

悪い子供…ああ、そうか。それが自分なのか。危ない力と何処かで理解しつつも力を使った卑怯者で、憧れた人のようになりたいのを

嘘つき、その実は無責任に力の快樂に酔っていた……。だから、この人は私を責めて……

「——でも、君は間に合った。越えたらいけない一線を越える前に。」
否。手が届いた。それだけでカリバーにとつて喜ぶべきことだった……責めてなどいない。例え、傷ついたとしてもヒーローの本懐は果たせたのだから。

「今の君はならわかるだろう? 『誰かを守るチカラは誰かを傷つけるチカラ』だ。……だから、僕たちは力に責任を持たなきゃいけない。何を守り、何処へ向かうのか。」

僕は君を許す……だから、君は少し自分を許してあげるんだ。そして、過ちを糧に前へ進もう。焦らなくて良い……その時は僕達、大人も君を助ける。」

「カリバーさん……」

「さ、話はここまです。ご両親が待ってる。」

もう諭すことは十分だろう。道の先で待っている彼女の両親の元へ向かうよう促すカリバー。キョウカは一礼し、走って……その途中で振り返ると……

「カリバーさん! わたし、あなたに誇れるような大人になってみせます!!」

——だから、その時まで待っていてくれますか?」

投げかけられた質問。それに対し、カリバー『ああ、勿論だ。』だと返すと満面の笑顔を見せてまた走り去っていく。両親と手を繋ぎ、帰路につく背中からもう心配はないだろうと……あれ、ご両親からちよつと鋭い視線を向けられ……え? なんで?

「病室を抜け出したと思つたら……全く、君も隅におけないなカリバー?」

「だ、団長!?!」

い、いつの間に……!?! しかもやりとりをすっかり見られていたらしい。マズイ、何やら誤解が生じているようだ。

「これはアレですよ、変な意味合いではなく……!」

「ふむ、彼女はまだ幼い。万一、君が過ちを犯した場合は……その時の心

配はする必要はないぞ?」

腰におさまる彼女の太刀がキラリと光る…冗談ではない!

「ま、待つ……あつ 駄目だ…血が足りな……」
「おっと。」

慌てて否定しようとしたが、興奮したことが弱りきった身体へ仇となりフラフラと倒れ、寸前でジューンが受け止める。やはり、無理をしていたのだろう…そのまま気絶してしまう。

そんな彼をジューンは腕をまわして担ぎあげるとそつと呟いた。

「…改めて君を歓迎するよカリバー。ようこそ、王宮騎士団へ。」
「う、うう……」

その言葉は届かない……でも、新たな仲間ともう一度歩みだした少女に祝福がありますように。心の中で祈りながら、ジューンはランドソル城への帰路についたのだった。

1章 波乱万丈！美食殿編！！

結成、美食殿！…でも前途多難！？（困惑） I

燃え盛る炎… 街は粉碎され、瓦礫があちこちに積み上がる地獄もかくやという真つ赤な景色。舞い上がる灰はかつてここで息づいていた者たちの成れの果て…それは、守護者がその役割を果たせなかつたことの証左他ならない。

「かはっ…」

地面に刺さる火炎剣烈火。主の青年は地に伏し、満身創痕の瀕死な有様…… なんとか顔を上げれば『侵略者』のシルエットが浮かぶ。炎を背にしても揺らがぬ輪郭にスルドイ紅い眼…王冠のような角。諭えるなら魔王。暴虐非道な奴は突然に現れた途端に全てを破壊していった…

仲間を殺し

土地を焼き払い

愛した人たちすら奪い取り

そして、自分は何も出来なかつた。歯が立たず、振じ伏せられボロ雑巾のように鍛えた技もチカラも破かれた。もう為す術がない。

——恨むなよ、ボーイ。転生者は弱肉強食…全ては君の弱さの結果だ。

「クソっ!! くそがあああ!!!」

「――！」

ランドソルの裏路地…ボロにくるまっといいたルイスは悪夢にうなされ目を覚ます。やれやれ、最悪の夢見だ…多分ストレスが溜まり過ぎていたのだろう。ここ最近はずぶろく続きだし…

（またあんな夢を…ちっ、この世界からは脱出出来ねえし、トライブの連中とは連絡はつかねえし、ナイナイ尽くしだぜこんちくしょう！
なんとか換金した路銀はもう底をつきそうだし、これ以上は生きるだけでもキツイ。この世界の案内人にどうにか連絡をつけたいところだが…）

本来、この世界に関わるべきではない自分は早々に撤収するつもりだった。しかし、タイムマジンには転移したショックのせいかわりに動かなくなり並行世界を移動する手段は失われてしまった。なら、この世界で転生者をサポートする管理者か案内人が来ると思いきや姿を見せず彷徨い流離い今日に至る。所持品を手放したり、野宿で凌いだりしたがそろそろ限界だ。

「無駄に他人の物語に干渉しないがポリシーだが…背に腹は代えられないな。」

★
★
★
★
★

——待っていたんだよこの瞬間をよオ!!（歓喜）

キョウカちゃんの暴走事件から数日、ペコリーヌからコカトリス亭に呼びだされた僕。もうこれ美食殿加入のお誘いだよなあ？ やつと来た原作イベントだよなあ!?! フフフ…これで毎度毎度死にかけると公務員ライフとはおさらばだ！楽しい楽しい美少女たち（十騎士ク

ン?) たちとのスローライフが待ってるぜ!

……おい誰だ美食殿でもわりと死にかけるとか言ったやつ?

「おまたせしてすみません、バイトが長引いちやって。」

「…気にすることはない。」

テーブルで待っているとペコリーヌがやってくる…アニメの設定のようにここでウェイターのアルバイトをやっているらしい。侵略転生者とか色々あったから心配していたが、元氣そうでなにより。

「——それで、用事は何かな?」

「あ、ハイ。実はカリバーさんに折り入ってお願いが…」

ギルド作りたいてって言え (興奮)

ギルド作りたいてって言え (懇願)

ギルド作りたいてって言え (発熱)

「実はギルドを立ち上げようと思ってるんです! 名前は『美食殿』: 世界中の美食を食べ、まだ見ぬ食文化の開拓と探求を目的としたギルドを!!」

よっしやあああきちやああああああ (狂喜)

「か、カリバーさん…?」

あ、ごめんなんでもない。つづけて?

「は、はい! で、ですね…メンバーを集めようと思ってるのですが、カリバーさんにも参加していただけたらなと!」

ああ、駄目だ喜びの爆発しそう。

でも、ここで分かったと二つ返事は出来ないんだなこれが。

「話はわかった…だが、僕は王宮騎士団で建前としては君を追わなくてはならない立場なことを理解しているのか?」

「だからです。王宮騎士団のアナタならお父様やお母様のこと…それに城の中のことを教えて頂けると思っ…駄目でしたか?」

あ、ふーん…なんか思いの外打算的な理由で残念だけど、僕とペコリーヌの接点があった時は尽くろくな目にあつてないから仕方ないなこれ（白目）

取り敢えず、誘ってもらえただけ良しとしよう。最悪、僕抜きで結成も充分ありえたわけだし…：…：…：そういえば、王宮騎士団って公務員だけどギルドの掛け持ち持って大丈夫？確認してから正式に返事をしな

くは…
「…検討はしておこう。他に誰を誘うつもりなんだ？ギルドは最低3人いなくては成立しないぞ。」

取り敢えず、僕は置いておいて…：…：…：美食殿の他のメンバー…：ユウキとコツコロにキヤルちゃんあたりはどうなるのか。彼女らも合流するならこのタイミングなんだが、今回のルールだと関係が深く無さそうなんだよなあ。特にキヤルちゃんの合流が難しそうだ…

「はい、そうなんですよね…：あとひとりが必要なんですが…：アテが無くて…：…」

「…ほう？」

ペコリーヌもどうやらユウキたちへと意識が向いていないらしい。今更だが、原作へのある程度の軌道修正をしたほうが今後の僕自身の立ち回りやすさも変わってくるだろうし…：…：ここは少し誘導するか。「ペコリーヌ、空き枠のメンバーについてだが僕に任せてくれないか。アテがある。」

…：待ってるよ、僕の美食殿ライフ。



「——残念ですが、お二人には正式にサレンディナ救護院の退団処理

が為されました。心苦しいですが、クエストを受けることはもう出来ません。」

「…」

ギルド管理協会のカウンター…その前には眉間に皺を寄せるユウキとオロオロとするコツコロ。机越しに相對する受付嬢も冷や汗をかいているが、彼は気にすることなく差し出された通知の文書をつまらなさそうに眺めていた。

クエストを受けられないということは収入が無くなるということ…かなり重大な問題なのだが、特にリアクションをとらない主に業を煮やし、コツコロが受付嬢に問う。

「まだ移籍先を探すまでの猶予期間だったはず。それなのに何故？」

「そ、それはそうなのですが…アナタには魔物討伐といった行動がサレンディナ救護院の本来の活動指針とあまりに掛け離れているとか、かなりの数の方からクレームが寄せられていまして。不本意ながらこちらの処分をさせて頂きました。」

差し出がましいですが、魔物討伐を活動の軸にしているギルドはありますから、そちらに参加をされたほうが…」

「必要ない。帰るぞ、コツコロ。」

「主様!」

しかし、そんな心配をよそにくるりと背を向けたユウキ。まるで些事といった振る舞いにコツコロは慌てて引き留めようとするが、そんな彼女に静かに耳打ちする。

「(周りを見ろ。ここでゴネたところで奴等の見世物にしかならん。)」
「…?」

周り…? 促されて見た先はテーブル席…そこには屈強な男たちが屯しこちらを睨んでいた。重厚な鎧に大剣やボウガンにランスといった大きい武器を傍らに持つ彼等は察するに魔物討伐を習わいとするギルドだろう。まさか、彼等が苦情を…?

「いぐぢ。」

ユウキがコツコロを促す…それと同時だった。

「お、いたいた！」

フラリと現れる赤髪の風来坊。ルイスだ…彼の登場にユウキは眉間に深く皺を寄せ、剣に手を伸ばす…

「オイオイ、命の恩人になんて態度だい？」

「主様、こちらの方は…？」

コツコロは先日の転生者ルシファー戦にて途中で気絶していたためにルイスを知らない。しかし、ユウキもユウキで彼がセイバーに変身したことしか把握していない…情報が少ない故、警戒には充分に値する。

「貴様、何者だ？」

「自己紹介してなかったか？俺は剣豪で風来坊のルイス…お前と同じ転生者さ。そんな怖い顔すんなって、話をしにきただけだ。」

『て、転生…？』とコツコロが首を傾げている中、同時にペコリーヌとカリバー…あと彼に担がれたキヤルちゃんもやってくる。

「あ、ユウキちゃんとコツコロちゃん…にあと…ルイスさんですね！」

「離せー！ 離せ、この変態!!」

キヤルちゃんは半ば強引に連れられてきたため暴れているが意に介さないカリバー…ただルイスの存在…正確には彼が持つ火炎剣烈火に気がつくくと目を丸くした。

「君は……」

「お、全員揃ったな？」

三騎と三姫の邂逅…物語が走り出す。

結成、美食殿！ …でも、前途多難!？ (困惑) II

「…えっと、つまり僕達の結成するギルドに入りたいうてことか？」
「そゆこと！」

なんだ テメエ？ (イラア)

いや、いきなり過ぎないかコイツ。僕らを助けた例のセイバーなのは分かった…で、今は根無し草で立ち行かなくなって美食殿に入れてもらいたいと？

いやまあ、助けてもらったことは恩はあるにしても…それはそれ、これはこれ。プリコネって美少女とキャキャイチャイチャするのも重要な要素だよな？なのに、男が来るの…？よりにもよって、活動の中心になる美食殿に？

オイオイオイ、美食殿に騎士クン以外の男が居ていいと思ってるのか？ ああん？

「おまいう。(正論)」

いやあ、仰るとおり…ハイ、すみません。

「私は構いませんよ！ルイスくんが仲間になるなら百人力です☆」

「流石、我が主！ペットとして誠心誠意尽くさせて頂きますワン！」

「あ、そういうのはもういいんで (真顔)」

ペコリーヌも仲間にするには乗り気か…うん、確かに僕らより強いのはメタルビルドとルシファアの時で分かってるからなあ。霸王剣聖十刃も持っているところから、相当の実力者だろう…今後の仲間になってくれるなら戦力としては申し分ない。いずれ敵対するであろう覇瞳皇帝やエリスとか考えたらカリバーの伸び代では些か心許ないし。カリバーがジャオウドラゴンになったとしてもキツいよね流石に…

「じゃあ、私はパス。3人いるならギルドの最低人員確保出来るわけだし、別に要らないでしょ…」

おっと、キヤルちゃんが逃げようとしている。
駄目だよ？

——シコシコシコシコシコシコ（キヤルちゃんの尻尾を擦る音）

「にいゝいゝいゝ?!?!? 乙女のデリケートなどに何すんじや?!? ブツ殺すぞ!!」

引き留め、ヨシッ!

何かヒロインの尻尾からしてはいけない音がした気がするんですが、それは気にしないでおこーう。

取り敢えずだ。ギルドリーダーになるペコリーヌが拒否しないなら、僕が改めて何か言うことはない。パーティーの趣味嗜好なんて些細な問題とこれから迫りくる脅威や問題の対処とで天秤にかけたら後者を優先すべきだろう。ユウキもそれで問題な……

ん?なんで、コッコロちゃん気まずそうな顔をしてるの？

「申し訳ありません、ペコリーヌ様。お話は嬉しいのですが主様は現状はギルド活動にあまり積極的では……」

えゝゝ?!?!? (白眼)

お前いないなら、もうそれ美食殿の存在意義揺らぐじゃん!? つまり、コッコロちゃんも居ないってなると……これ諸々駄目では? 原作どころじゃないぞそれ?!? 説得しなくては!

「…しかし、君等だつて根無し草だろう? またサレンに世話になるわけにもいかないだろう?」

「はい。ですが、主さまも何かしらのお考えがある様子…… 恐縮ですが、今回は……」

「わかった。参加する……その美食殿に。」

「!? (O×O;)」

あれ、フツーに乗り気だな。コツコロちゃんビツクリしてんぞ？
うくん、この転生騎士クンなに考えているのかよくわからないんだが
：目的は『魔女を殺すこと』とか言ってたけど、原作キャラの誰かを
狙っているということか？ いや、それはないか：なんか掴みどころが
無いんだよな…

「主様、よろしいのですか？」

「ああ。信用できるからな。コツコロも構わんだろう。」

そして、サラサラとギルド登録表にサイン。改めて、赤ちゃんと
ファンから呼ばれたあの騎士クンとは別モノなんだと実感できる…。
顔も服装も同じだが、物腰が外見とは不釣り合いに落ち着いていて
コツコロに頼りきりだった原作とは大きな違いだ。

…：ユウキ自身の意識もあるそうだが、彼はこの物語に何を望む？

★ ★ ★ ★ ★

「わあ、6人なんていきなり大所帯！ヤバいですね☆」

大はしやぎのペコリーヌ。確かにギルドとしてはそこそこの人数は
多いほうだろう…：そもそも、原作だと美食殿ははじまりが4人だった
ことを考えればだいぶ多い。しかも男。

やれやれと溜め息をつくカリバー…：まあ、自分に文句を言える立場
もチカラもない。あー、ルシファアのことを思い出すとどうも首が疼
く気がする…

「それじゃ、届け出を出してきますね！」

そして、ペコリーヌを見送る男たち。コツコロとキヤルもお手洗いで
離席している…：カリバーはルイスに改めて向き直る。

「さて、ではルイス…：色々と話してもらいたい。僕達が知らないこと
について。」

「…ま、そうなるよね。改めて、色々と話さないとチンプンカンプンだ
ろうしな。何が聞きたい？」

さて、何から聞いたものか。カリバーにとっても気になることは多くある……。ペコリーヌたちがいない内に転生者同士でしか話し辛いこともあるし、今は良い機会だ。

「転生者なのはわかった。だが、君はこの世界で何をするつもりなんだ？」

「なにも？ ……ああ、正確にはアンタたちのやることに特別口出しはしない。他人の物語への介入は本来なら俺も望まねえし、あくまでその場しのぎだ。帰る算段がつき次第この世界からは離れるさ。最も、あのメタルビルドとルシファーを放っておくわけにはいかないが……」

「？ 帰る算段はともかく、なぜ奴等を追う必要が？」

実は尚もあの侵略転生者たちは逃げたままだ。王宮騎士団の必死な搜索も虚しく、恐らくはランドソルの何処かに息を潜めているらしい。彼等をなんとかしてくるなら有り難いが、別に彼にとって利益は特に無いはず……

そんな疑問に『あー……』と面倒そうに答えるルイス。

「ほら、俺は『V E トライブ』だからさ、方針としてPK行為は見逃せないわけ。だから、しっかり縄にかけるか、最悪でも討伐しなきゃならないの。」

「……と、トライブ？」

「え？ ……『トライブ』の概念すら知らない？ もしかしなくても、アンタたちってマジで初心者転生者ってわけか？」

トライブ……意味は『部族』を表す言葉なのはカリバーも知っている。それが、転生者とう関係があるというのだ？

よくわからないが、転生者界限というのは思った以上に複雑なのだらしい。

「すまない、僕はまだ転生して一月なるかならないかくらいなんだ。」
「あらら、つまり早々に初心者狩りの被害にあつたわけね……ご愁傷さま。わかった取り敢えず色々と教える。ちいと面倒くせえがちゃんと聞けよ？」

★ ★ ★ ★ ★

『トライブ』とは…

言ってしまうえば、転生者同士のギルド。ただ規模はひとつの異世界の範囲に留まるそれとは違い、構成員は転生者が大半を占める。並行世界を超越し構成員たちが手を取りあい、場合によっては物々交換や旅行、単独で解決出来ない問題の対処にあたりなどもある。規模な統治形態も会社、騎士団、傭兵団、多々諸々…と多様性があり個性的だ。

いつからこんな超次元組織が形成されたかは誰も知らない…ただ、ある時から並行世界を行き来する転生者が爆発的に増え始めたことが理由のひとつだとも囁かれている。真相は不明だが…

ルイスもまたトライブ『時の円卓・ナイトオブゼイン』の構成員。彼の所属する時の円卓は非力な転生者に手を貸し、PK行為(※)プレイヤークイラーの意。要は転生者狩りなどを行う侵略転生者の討伐を活動の主軸とする時空の秩序を担う騎士団なのだ。

…：…そして、こういつた他者に危害を加えることを目的としないトライブを『VE (vs エネミー) トライブ』と判別される。

★ ★ ★ ★ ★

「…ま、ぎつとこんなところだな。安心安全を求めるなら俺らのようなトライブに入るのも一考の余地ありだぜ？　今時、フリーはキツイぞ？」

成る程。転生者同士の巨大な組織か…トライブについて理解を深め領いたカリバー。大きい組織がバックなら侵略転生者といった無法者も簡単に手出し出来なくなるわけか…それはかなり大きい恩恵だ。自分の世界に加えて並行世界からの招かねざる客にまで気を巡らせなくて良いとなれば…

(……なら僕もトライブに入ったほうが都合が良くないか色々？
だが、うまい話は裏があると云うしな……)

「おい、俺も聞きたいことがある。」

わ、なんだ!?! ヌツとルイスとの話に割って入るユウキ……その顔は妙に険しい。

「貴様の聖剣、火炎剣烈火は何処で手に入れた？」

「え？ …いや、これフツーに俺が転生した時に貰ったギフトだけど？」

ギフト……つまり、転生特典。カリバーで言えば、闇黒剣月闇や各種ライドブックがそれにあたるだろう。

しかし、それをわざわざ訊くとはどういうことだろうか？ 確かに前世の知識がプリコネどころかラノベすら知らない有様の彼だった
が聖剣に拘る意味は何なのだ？ 元よりわからない奴だが、ますます解らない。

「……『前の持ち主』はどうした？」

「なんでそんなこと…… いやまあ、生きてはいないだろうけどよ……」

「……!」
前の持ち主？ 転生特典に？

カリバーは首を傾げる傍ら、ユウキは一変して静かに『そうか……』と顔を伏せる。一体、どういうことなのだろう……取り敢えず、今度ヒルマに聞いてみるか。そろそろ、ペコリーヌたちも帰ってくるはずだし……

「ちよっと、何なのよアンタたち!？」

突如、響くキヤルの声。明らかに穏やかではない様子に男たちは慌

てて立ち上がり、騒ぎの場所へ向かう。場所はクエスト掲示板前…

そこで、キヤルとコツコロが数名のガラが悪い男たちに絡まれている真っ只中だった…。

結成、美食殿！ でも、前途多難…!? (困惑) III

「何よ、アンタたちは!?!」

コッコロを庇う形で前に立つキヤル…その前に数人の男たちが詰め寄るように立っている。しっかりとした甲冑をはじめとした装備品からして中堅ギルドの人間だろうか。

無論、ガラの悪い厳つい男たちが少女たちを取り囲むなど尋常ならざる事態でカリバーはすぐさま割って入る。

「お前たち、何をやっている!?! 王宮騎士団だ、下がれ!」

「…ちっ!」

王宮騎士団の名前が出てきてはかなわないのか、後退りする男たち。その目には明確過ぎるまで怒りと苛立ちで淀み充血している…何やら並々ならぬ様子。

「邪魔しないでくださいよ騎士サマ? 俺達が入るギルドは選べって忠告しにきただけですよお?」

「余計なお世話だってば! ちよっとコイツらどうにかしなさいよカリバー!!」

忠告? 何やら男たちの矛先は視線から察するに彼女たちではなく、ユウキに向けられているようで…え、何かしたの君? というか、知り合い?

某…が如くシリーズで道端歩いてるだけで喧嘩売ってくる一般チンピラみたいなこんな奴等と?

「コイツらは他人のクエストについてくるだけで何もせず報酬だけを搔っ攫う『寄生虫』だ。前に締め上げたことがある。」

「…寄生虫?」

寄生… クエスト…

……………ああ、そういうことか。

カリバーは前世の似たような記憶を思い出す。オンラインゲームで協力プレイした時に、極稀に何もせず安全地帯から動かず報酬の分前を持っていくプレイヤーがいたりした。俗に言う寄生プレイ

ヤーというやつだが、この男たちもそんな部類なのだろうか？ そんなことを現実(?)でやろうものならそれこそ管理協会が黙ってないはず……カリンは何処だ？

「へッ、そんな証拠何処にあるってんだい？ 大体、コイツが金払いの良いクエストを独占してたのが悪いんだよ！ 幼稚園だが保育所だが知らねえけどよお！」

「…」

その時、ユウキがヌツと前が出る…

そこを『主様、いけません！』とコツコロが制止し、カリバーもこのまま続けるのは一悶着どころでは済まなくなると男たちを追い払うことにした。

「何にせよ、ギルド結成を妨げる権利は君達にはない。そんなに彼個人に文句があるなら、管理協会に問い合わせようか？ 王宮騎士団である僕が口利きすれば結果はすぐ出るだろう。」

「…っ チッ、もう良いさ。警告はしたからな！」

負け犬の遠吠え。フン、一昨日来やがれと思うカリバー…こんな時ほど公務員の立場が強いのは有り難い。まあ、あんな蛆虫どもはどうでも良いが。

「すまない、迷惑をかけた。」

「気にするな、ユウキ。あんな程度の連中…」

『お前』ではない。キヤルとコツコロに言っている。厄介事を収めるのは貴様の仕事だろう。」

——!?

なんだテメエ？ (2回目)

謝罪するユウキ…だったが、また別の一悶着に至りそうになり、キヤルが慌てて『もうそういうのいいから！』と止めにはいり事なきを得た。

そんなタイミングで、ペコリーヌが手続きを終えたのか帰ってくる。

「手続きは終わりましたよ! 『美食殿』、これにて正式に結成です!!」
「! (ついに!) ついに待ちに待ったこの瞬間が……!」
頭に血が昇りかけていたカリバーだったが、悲願の達成に怒りなど
どうでもよくなり涙さえ溢れてきた。なんせ、今まであまりにも散々
な目にあつてきたのだから無理もない。

「まだギルドハウスは用意は出来ないみたいですが、その間の時間に
丁度いいクエストを紹介してもらいました!」

「ハア!? なに勝手に受注してるのよアホリーヌ!? こっちにだって
予定が……」

まあまあ、良いじゃないかキャルちゃん。上機嫌なカリバーはクエ
ストの応募用紙をペコリーヌから受け取り内容を見る。TVアニメ
シリーズなら幻の香辛料を求めてという流れになるはずで、そこで新
たなヒロインやシャドウ…あと副団長が来て戦いになる波乱の初ク
エストが……

「……ん?」

……む、香辛料の『こ』の字もない?

このクエストの内容……

「——『ロックドレイクの駆除』?」

………ナンデ?

☆☆☆☆

皆様、ドラゴンについてどれくらいご存知だろうか？

神秘の龍：幻想種エルダードラゴン

空飛ぶ蜥蜴：飛竜種ワイバーン

巨大な毒蛇：蛇帝バジリスク

多頭の怪蛇：蛇王ヒュドラ

等等、色々が多い。その中に前述の彼等とは知名度として一步劣るが『ロツクドレイク』もドラゴン属に分類される魔物だ。

特徴は前脚を兼ねる翼で、地上の活動に特化し飛行が出来ない代わりに滑空を行う一風変わった始祖鳥のようなドラゴン種である。その鱗や翼：果ては卵まで宝石としての価値までつくほど美しいとの話で、それをあしらった装備品はオシヤレ好きな冒険者の憧れの的……

—— お金にがめついキヤルちゃんは一瞬で掌返した。(白眼)

「さあ、はやく！はやく！　こんなヤバいクエスト、他人に盗られる前に私たちがやっちゃわないと！」

「ぎゃ、キヤルちゃん……」

管理協会前の荷車でノリノリに準備をはじめる彼女は頭の中はお金や報酬素材のことでもいい……あのペコリーヌすら若干引いている始末。それだけロツクドレイクの素材の価値は高いらしい……らしいのだが、カリバーには引つかかることがあった。

「まだ結成したてのギルドに仮にもドラゴン属の討伐とは……良いのかコレ？」

「なんでも、主様の信頼度が高いことが今回の依頼の理由だとか……あちらの受付の方が申ししておりました。」

コツコロの説明に『そうなのか？』と首を傾げるカリバー。確か、ユ

ウキはサレンディナ救護院に仮所属していた間は難易度高めの討伐クエストを受注したり、または他ギルドのヘルプに入ったりで報酬を家賃として救護院維持にまわしていたとか。寝床を提供してもらっていた分、しっかりと恩を返す…中々、義理堅いな彼。

まあ、ファルシオンに変身すれば下手な魔物には負けないだろう彼ならギルド管理協会が信頼するのは領ける…ただ、それらの活動を救護院の活動趣旨と違うと指摘されたのはサレンにとってはかなりの手痛手だろう。

「コッコロ、ロックドレイクについて何か知っているか？」

「あ、はい！わたくしのしがない知識程度でよろしければ！」

そういえば、ユウキも割りと乗り気だ。ロックドレイクの生態について書かれている本を手にしながら、コッコロからも情報を集めている。エルフである彼女だからこそ得られる知識があると思ったのだろうか…

一方のルイスは…というところ…

「へえ、支給品がこんなに…随分と景気が良いじゃないか。初心者にはいつもこんなに手厚いのか？」

「ええ、我々は新しい冒険者をいつでも歓迎していますから。」

若い受付ボーイと話をしている。なんでも、今は手を離せないカリンの代理らしい。…まあ、全てのギルドの管理を彼女が担っているわけではないので他職員が出てくる時もあるのは当然だろう。ガチャ演出が無いこの世界だろうと忙しいだろうからあのメガネ。

…うーん、何か色々と原作と流れが違う。今更だが、やはり様々な異常の煽りを受けているからなのか？

「…考えても仕方ないか。」

考えても答えなんてわかりっこないので、余計なことに脳は使ったところで仕方ない。魔物なら倒す、敵対する転生者ならブチのめす、今はルイスもいるし並大抵のことは恐れることはないだろう。



「それじゃあ、出発く!!」

「行つてらっしゃいませ。」

ペコリーヌの号令で美食殿の乗り込む荷馬車が走り出す。

ランドソルの門を潜り、クエストがここからはじまる…カリバーとしても待望の瞬間だ。見送りに来てくれた若い受付ボーイに手を振りつつ、彼・彼女らはランドソルを後にする一行。

やがて、声が届かないまで距離が離れた頃…

「全く、呑気な連中だぜ。」

ペツと受付ボーイは唾を吐き、城壁の影に隠れていた人影に手をあげて合図を送る。ふたりの甲冑姿…それはランドソルで見慣れた王宮騎士団の団員だ。

「手筈通りだ。さつさとギャラを寄越せ。」

「まあ、そう急くな。ほら、報酬だ。」

団員から皮袋を受け取ると、ニイと笑う受付ボーイ。中身は金貨・

銀貨…思わぬボーナスに口が緩むのも無理はない。

「人気者は辛いねえ…？例のカリバーって奴からしたら逆怨みも良いところだろうが……」

「悪いが、奴がいては都合の悪い輩は多くてな。ついであの鬱陶しい副団長の鼻っ柱をへし折れる。良いことづくめだ。」

へえ？面倒な事情…多分、派閥・権力争いとかそこらへんだろうが必要以上に絡む必要はないと受付ボーイは追及はしない。可哀想な新人ギルドのご冥福をちよっぴり祈り、あとはこの黒い報酬で酒場へ繰り出してキレイさっぱり忘れてしまおう。

「……さあ、これで終わりだ。映えある由緒正しき王宮騎士団に下賤なムシケラの席など無いと思いき知らせてくれる！」

……はじめての美食殿の冒険……その背後から不穏な影が静かに忍び寄りつつあった。

転生カリバーさんと忍び寄る影 I

「そういえば、カリバーさんって、『カリバー』って名前じゃなかったんですね。」

——え、っ!?

旅の道中、ふとしたペコリーヌの発言に荷車が揺れる：主にコッコロとキヤルちゃんが妙に驚いたせいだが。

あー、そう言えば言ってなかったな：

「そうだ。カリバーというのはあくまでこの闇黒剣月闇を持つ者の称号のようなモノだからな：まあ、それを通り名としているうちに本名よりこちらが主になってしまったんだが。」

「ビックリしましたよ。ギルド申請の時、思わずあたふたしちゃって…」

…それは申し訳ない。

なまじ最初にカリバーと名乗ってしまったがあまり、そのまま定着して本名なんて名乗る機会はあるみる減り、恐らくは把握している人間は王宮騎士団の幹部やカリンくらいだろう。学校であだ名が通りすぎて、本名を誰にも覚えられない感覚に似てるな。そして、本名教えたら普通でつまんなと言われるまでがセット。

「…すまなかった。ただこれからも『カリバー』と呼んでくれ。今更、呼び方を変えても混乱の元だしな。」

「了解です☆ あ、そうだ！ そろそろここら辺で野宿にしましょう！」

☆☆☆☆

…いつの間にか日も傾いてきた。

支給品のおかげで簡易テントや食料品の心配もない。適当な見晴

らしのいい野原に一度、停車して野宿の準備をはじめ…ようとしたが…

「な、なによこれ?!?」

突然、響くキャルちゃんの悲鳴。荷台の梱包を解いた彼女の目についたのはキャンプ用品…だったガラクタの束。テントとは名ばかりのボロ切れ、鍋は底が腐食して穴だらけ、積まれていた全てが壊れて使い物にならない。おまけに、支給品の食料も梱包が破け、微妙な臭いを放ちはじめている。多分、道中の陽射しと暖かさで早い段階で腐敗しはじめたんだろう…これはもう食べられない。

「おかしいでしょ、こんなの!? なんで支給品がゴミばかりなわけ!」

「…ああ、手違いか? もしくは、からかわれたか?」

ルイスもこりや駄目だと首を振る……が、ユウキはすぐにゴミとなった支給品を荷台から押しよけると、ガサゴソと奥からまだ新しい弓矢と釣竿…こじんまりとしているが使える鍋を取り出し『おおっ!』と歓声があがる。

「念の為と思って持ってきた私物だが、正解だったな。幸い、水場も近い…俺とペコリーヌが狩りに出る。他の面々は野草や魚釣りで食料を確保するぞ…」

それで良いな、ペコリーヌ?」

「は、はいー!」

ユウキに仕切られ、急遽食材さがしになる美食殿。

ユウキとペコリーヌはこの場を離れ…

ルイスとキャルは魚釣りに…

…そして



……僕はコツコロと食べられる野草集めだ。

キヤルちゃんからは『虫とかとつたら殺す』と釘を刺され、転生騎士クンからは『コツコロに何かあつたら殺す』と圧をかけられ……最後は普通に怖っ。あれか、言われることで逆に立つ生存フラグか？残念ながら、もう2回くらい死んでるだなコレが。……まあ、もう死にたくはないがな。

「カリバー様、野草についてはわたくしも多少なりとも知識はあります。至らない身ですが主様に代わり……」

「そんなに仰々しくならなくて良い。今は同じギルドメンバーだからな。」

歳下の礼儀にしても、随分と堅いなやっぱり。

原作の基本的なコツコロの知識はある。種族はエルフで歳は10をちよつと超えたくらいで、故郷の里の意向で騎士クンをサポートすべく遙々ランドソルまでやってきた。メタ的に見れば、プレイヤーをゲーム世界に導く案内人。

まだ幼くても慈愛深く不相応までしつかりしている故に原作ファンの一部は彼女を『コツコロママ』なんて呼ぶ層もいるとか。

ただ、今回の騎士クンはイレギュラー過ぎるから……なんかこう色々大丈夫？

「お氣遣い、痛み入ります。……優しいのですね、カリバー様。（……主様は気をつけろと仰られておりましたが、悪い方にはますます見えな……い。）」

「あ、いや……堅苦しいのは苦手だ。なんせ職場が職場だからな……」

王宮騎士団は仮にもお役所だし、右から左、上から下、どこもかしこも良いとこ育ちが多いだけに肩身が狭い……庶民には居心地が悪いんだあそこ。

決して、クリステイナー師匠に振り回されるのが嫌とかではなく

……（目そらし）

「そう言えば、こうやって落ち着いて話すのは初めてですね。」
「ん？ …まあ、言われてみればそうだな。」

……………確かに。

この際、色々と聞いてみるのも良いかもしれない。彼女しか知らないこともあるだろうし、特に転生騎士クンの素性は分からないところが多いので把握しておきたいところだな。

といっても、幼子相手にがつつくのはナンセンス。あえて、向こうから質問させてみるか。

「改めて何か話すといっても意外と思いつかないものだが…… 君が僕に聞きたいことはあるか？」

「カリバー様ですか？ そうですね……」

そう言えば、カリバー様は主様とご出身が近かったりするので
「しょうか？」

……………なんだって？ (困惑)

「……そ、…そんなことはないと思うんだが。…どうして？」

「いえ、主様の剣とカリバー様の剣がよく似ておりますし……剣の構えが同じだったのでもしやと思……」

まあ、同じ転生者ではあるのだが……

言われるまで剣の構えなんて気が回らなかったなあ。そこら辺、よく見てる辺りは流石、プリンセスナイトの従者ということか。取り敢えず、彼女の着眼点は特に意味など無い偶然だろうが、その齢に合わない観察眼は凄と思う。

「……悪いが、それは偶々だ。僕と彼はランドソルに来てからが初対面だ。」

「左様でございましたか。これはとんだ失礼を……」

「いや、構わないさ。よく人を観察し言葉にしてしっかり伝えることが出来ることは誉められてしかるべきだとも。」

「そうでしょうか？ これくらい普通かと……」

ランドソルの普通、リアル(前世)だと普通じゃないんだよコレが。

リトルリリカル然り、どんな教育受けたらこんな賢い子が育つのか本
当に謎だな。学校行かないでこれだから……

僕なんか…… 僕は……

どんな子供だったか…… あれ……

(……思い出せない。)

「カリバー様？」

「！ な、なんでもない。さて、野草集めの続きといこう。」

いけない、いけない。……僕の過去なんて『どうでも良い』んだか
ら。

★ ★ ★ ★ ★

『……』

……そんなふたりのやり取りを頭上から眺める機械仕掛けの赤い
鳥。

タカウオツチロイドは集めた音声を主の元へと送る。その主とは
……キヤルと別行動で釣りに勤しむルイスだった。

イヤホンでタカウオツチロイドからの音声を聞き取り、釣竿を適当
に揺らす……当たりは未だにこない。

「何か特別変わった話は無いな。……さてね、情報収集もこつちも実り
は無しか。」

つまらなさそうに引き揚げた竿の釣り針は突っつかれた痕跡すら
ない。元々、形だけで済ますつもりだったのでこれは問題ないが……
さて、カリバーの会話を盗聴していた彼だがこれにはちゃんとした
理由がある。

(……この世界は色々とおかしい。)

……第1、イレギュラーである自分に管理者が存在しながら接触して
こない。

神様にしろ、何にしろ、転生者を利用するということは何かしらの

狙いがあるはず。物語のバッドエンドの回避による世界の存続、神性に近い存在なら信仰の向上、後は極々稀だがただの遊戯としての暇つぶしなど…

カリバーの話を聞く限り、案内人ヒルマとかいう管理者は何か目的があるらしいと言っていた。なら、他所者などお呼びではないはずなのに放置するのは奇妙である。

：第2、仮面ライダーセイバーに属するライダーの物語でありながら異常な環境

カリバーに聞く限り、メギドは一度も現れていない。代わりに出現するのはジオウの物語に出てくるアナザーライダーばかり…おまけに、立て続けに侵略転生者の侵入を2回も許している。

前者はまだなんとも言えないが、後者は新人転生者育成において言語道断。非道な手段で力を蓄える侵略転生者にとって右も左もわからない新人なんて格好の餌食で、奴等にとっては仮面ライダーの能力を手っ取り早く奪い取るには丁度いい存在だ。

だからこそ、新人育成は誰もが気を遣う…：はずなのだが…

(ううむ、アイツも何も知らないってことか。ズボラなのか、それとも元々がそういう方針だったのか…：わかんねえな。)

カリバーから有用な情報も獲られそうにない。

やれやれ、と溜め息をつきながら傍らに置く火炎剣烈火へと目をやる。紅い聖剣は夕陽に傾きかけた光を受けながら鈍く輝く…まるで、主に微笑みかけるかのように。

(…：にしても、偶然なのかね。同じ聖剣がある世界に流れついたのは。)

この世界に来る直前、タイムマシンはまるで何かに引き寄せられていくようにコントロールを失い自分をこの世界に投げ出した。そう…

…ゲームであるはずの世界に『生身』のルイスを

転生カリバーさんと忍び寄る影 Ⅱ

…すっかり日は暮れて

集まった各々は手に入れた食材を出し合うことに

「ふふん♪ アンタたちの食材、見せてもらおうじゃない?」

何故かキヤルだけは得意げで早くしろと催促せんばかりに張り切っているが…余程、釣果が良かったのだろうか。取り敢えず、カリバーとコツコロの野草採取組が披露…

「まあ、こんなところだな。」

「ほちほち、といったところでしょうか。」

ビーツらしき小さい根菜、あとは野草類が一握り…キヤルからの評価は『ふくん? まあ健闘したほうじゃないの?』とマウントをとられるくらい。土地勘無しの場所によくやったのではなからうか。流石に農家に管理された畑のようにはいかないし…

「キヤルちゃんはどうなんだ?」

「きやるん♪ よく聞いたわね、目えひん剥いて見なさいよ!」

そして、キヤルが出したのは30センチは優に超えるくらいの魚…マス類の魚類に近くてかなり太い。6人分は賄えるだけ釣ってきているし、ドヤ顔するだけはある釣果だろう。

「あたしの勝ち♪」

なんで負けたか明日まで考えておいてください…別に競ってはいないが。

ドンツ!!!

「きやるっ!?!」

「それじゃ、わたしはこのイノシシさんで勝負です☆」

しかし、その成果もペコリーヌがとってきた巨大な猪の前には些細なものだった。雄大な大自然をそれなりに生き抜いてきたであろう魔猪と言っても他言ではないビッグサイズにあつという間にシナシナとなっていくキヤル。

そんな彼女の耳許で囁くカリバー…

「なんで負けたか、明日まで考えておいてください。」
「…」

——このあと、カリバーは泣くまで殴られた。

★ ★ ★ ★ ★

「…(つくん)」

「きや、キヤルちゃん！ 機嫌直してくださいよ！ そうだ、私のお肉
わけてあげますから！」

時は進み、夜。

キヤルの機嫌を損ね、カリバーは前が見えなくなりまるでボコボコにされコツコロに治療されているという初クエストの夕食にしては混沌とした風景が拡がる。良いのかこれは…

そんな様相を苦笑しながらもルイスは少し距離を置いて見守りながら串焼きの魚をかじっていると…ユウキが近づいてた。

「楽しそうだな。」

「ん？ ああ、こうやって旅をするのも久しぶりだなと思ってな。やっぱり、仲間と歩いて下らねえ話をしたり喧嘩したり…そうやってひとつひとつが思い出に成る。その経験は何物にも代え難い。」

目を細めるルイス…視線は美食殿に向けているが、視ているのはおそらく『今』ではないだろう。

言葉から察するに彼にも仲間や友がいて旅をしていたのか。そして、その旅は素晴らしかったのかもしれない。最もユウキ…正確にはデザストの人格には理解しえないものだが。

「そうか。前世の頃は友にも…旅の良縁にも恵まれなかった俺には羨ましい限りだ。そのように想える旅の仲間…さぞ、お前の失踪を心配しているだろう。」

「え…あ、うん。そ、そうだな。」

ん？ 何だその歯切れの悪い受け答えは。

目が泳ぎだしたルイス。ユウキとしては別に変なことを言っただけでもない…いや、もしかしたら何気ない言葉が彼の琴線に触れたのか？

「気にすんなよ俺のことは！ 冷める前に食っちゃまおうぜ！」

「…（喧嘩別れでもしたのか？）」

決して背かないと誓った愛も、永劫揺らがぬ信念すらも、時にあるふとしたキツカケで瓦解することもある。そのまま、不和・決裂と？ がり人との縁は簡単に絶たれ…もう二度と戻らない。それだけは身に染みていた

想像することは心痛むがルイスも大切な仲間と良くない別れ方をしたのかもしれない。

まあ、自分も他人との付き合い方や付き合い方に関しては自分言えなもののじゃないのも事実。特に突いたところで収穫はなさそうなのでプライベートルーム部分には踏み込まないほうが賢明だろう。

…そして、夜はふけていく。

晩飯の大半はペコリーヌが平らげ、後片付けを済ませると獣・魔物避けのお香を焚いて眠りにつく美食殿。明日は目的地の村に着き、本格的なクエスト開始となるだろう。野宿という形だが、しっかりと英気を養っておかなくては。

『さて…よく眠っているな。』

ただ、ユウキのみはむっくりと起き上がるとデザストへ変身。皆を起こさないように立つと静かにその場を後にする…

『…下見をしておくか。』

何かと胡散臭くてトラブルが多い今回のクエストだ…念には念を。用心に越したことはない。



「……………ここが、例の村のようだ。」

明朝。美食殿一行は山道を登り目的地へ到達。

カリバーは手持ちのクエスト用紙を確認し、看板と照らしあわせる…うん、間違っていないようだ。山を切り拓いて作られた小さな村…主に女子供しかいないそうで、若い男衆はランドソルに出稼ぎだとか。

そんな男手が少ない時にロックドレイクの襲撃を受けてしまい、僅かな人員と質素な生活をしている村では死活問題と化している。

(……………やはり、こんなところまで王宮騎士団は手が回らないのか。)

荒れ果てた門前に立ちカリバーは思う。今更だが仮にも飛竜の獣害なら王宮騎士団が対処して良いものだが、ランドソルからそれなりに距離があつて特に重要ではない片田舎は後回しにされがちなのだろう。慢性的な人手不足に加えて、今はランドソルの中ですらアナーライダーや侵略転生者の無法に手が足りない状態なのだし仕方ないといえば仕方ないだろうか…

一応、美食殿名義の活動とはいえ、王宮騎士団の一員として責任もって対処しなくては。

「なくんか、村…って言うより廃村一步手前ってかんじよねえ?」

「シーッ! キヤルちゃん失礼ですよ!」

悪気はないにせよ、キヤルが思わず口から洩らしてしまうのも解るくらい村はボロボロだ。雨風に晒され続けて傷みが目立つ木造住宅

がチラホラ。ランドソルの街並みに慣れてるを抜きにしてもあばら家は言い過ぎにしてもそんな建物やあまり活気の無い住民たちを見てるとまあそんな印象を持つても仕方ないだろう。

まあ、悪口には変わりないので依頼人の耳に今の発言が耳に入らないことに越したことはない。

「それでは、依頼人の元へ向かいますよう。村として出された依頼となれば、役場に行くことが賢明ですね。」

コッコロの提案に乗り、村の中心に向かうことに。

通りすがりの村人に道を訊ね、寂しげな村の景色の中を進んでいくと…確かに役場とおぼしき建物が。ただ、やはりと言うべきかこちらも相応に古ぼけて傷んだ建物で仮にも公共施設すらこの有様ということが村の全てを物語っている。

「……ねえ、ちゃんとクエスト報酬出るのかしら？」
「……」

キヤルの疑問に誰も答えられない。

流石に見合う報酬が用意出来なければクエストが発行されないとは思うのだが……大丈夫なのだろうか。万一、不払となれば早々に美食殿は赤字スタートを切る羽目になりかねない……

……なんて思っていた矢先だった。

「おんやまあ、お客様かね。随分と久しいねえ。」

建物の中からローブを纏った老婆が出てきた。腰が曲がり、杖つき……あと眼が弱いのかサングラスをかけている。まだマシな服装をしている分、恐らくだが彼女がこの村の村長だろう。

『おばあさん、実は……』とペコリーヌが自分たちがクエストを受けてきたことを話すと老婆は『ほうほう』と頷いた。

「そうなのかい。なら、話が早いアタシがこの村の村長さ。代表して依頼したのもアタシじゃ。いやあ、駄目で元々だったが……これで村も助かるよ。ロックドレイクの群れなんてどうにも……」

「え？ 待ってください、『群れ』？」

ペコリーヌは素っ頓狂な声をあげてクエスト用紙を確認するが、『群れ』とは書いていない。多少の魔物ならどうにかなれど、ロックド

レイクは飛竜：それが群れとなれば危険度は桁違いだ。間違っても新人ギルドが受けて良い仕事ではない。

ギルド管理協会側の手違いか？ 困惑する一行に対し、老婆は革袋を強引にキヤルに手渡す。

「若者が四の五の言うんじゃない。さ、これは報酬の前金じゃよ。金はこれで渡したから契約成立：ほれ、さっさと行かんかい!!」

そして、あれよあれよ言う間に村を叩き出されてしまった。強引この上なさに、最初こそノリノリだったキヤルですらも憤慨する。

「何なのよあの態度は!？ 前金まで渡されちゃったら断るに断れないじゃない!」

「…」

一方、その傍らのユウキは顎を撫でて考えていた。

どうにもおかしい、ギルド管理協会からクエストを受けたことはサレンディナ救護院にいた時から幾度かあったがトラブルらしいトラブルが起きたことは無かった。しかし、美食殿として受けた任務でここまでに至る不手際といい依頼主の強引さといい違和感を覚えるなというのが無理だろう。

疑念を持った彼はキヤルが持つ革袋の中身を覗き込む……中にはキラキラと輝く報酬の金貨。まだ新しいのか摩耗も見受けられない。あのボロボロな村の何処にこんな財が…

(……気にかけておくか。)

用心に越したことはない。

転生カリバーさんと忍び寄る影 Ⅲ

「ぐえっ」

同じ頃、ランドソル：コカトリス亭は騒ぎの真っ只中だった。厳つい男たちが宙を舞い、ドン！と音をたてて壁やテーブルに叩きつけられると辺りから悲鳴があがる。次々と客は店から逃げ出し、マスターはカウンターにてやれやれと溜め息をつく。

「やれやれ、もう少し穏便に解決出来ないのか副団長殿？」

「フン。通報を感謝するぞ。」

流れてくる愚痴程度なんて気にしない、それが我らの副団長・クリステイナーである。

なあに、心配はいらない。犯罪者の確保で食堂が滅茶苦茶になるくらいなら王宮騎士団で保証が出るし、あとは団長であるジュンの頭痛の種がひとつ増えるだけ。うむ、実に無問題だ。

「あーくそ、なんでだよ！ここのオーナーは『そのスジ』の人間じゃなかったのかよ!？」

「話が違うじゃねえか！」

「…」

喚くゴロツキたちにマスターはまた溜め息。人相はお世辞にも良いとは言えないがが自分はれっきとした『一般人(カタギ)』である。店を散らかした上に、本当に失礼極まりない連中だが、取り調べと制裁は副団長に任せるべきだろう。

隅っこで逃げようとしていた酒臭い若い男に掴みかかったクリステイナーは壁に叩きつけ尋問を開始する。

「お前が『密猟者ギルド』に不認可クエストを斡旋していたギルド管理協会の人間だな。全く、白昼堂々と酒を飲んでなんぞいるから口を滑

らせるのだ。」

「は、離せ……！」

この間抜けな男は欲に目が眩み犯罪の片棒を担いだ哀れな輩。ギルド管理協会で法を平然と踏みこむ犯罪者たちに認可されなかった：或いは正式な手順を則らなかつたクエストを紹介し、報酬を獲っていた。

上司であるカリンの目を盗んだ背信は順調に軌道に乗りつつあった。だが、思わず入った『ボーナス』に舞い上がってコカトリス亭でゴズンさんと昼間から飲んで仕事をバツクれたのが運の尽き。おまけによりにもよって、クリステイーナの耳に入ってしまったのは不幸と言うしかあるまい。自業自得だが。

「あの緑のクソメガネが悪いんだ！アイツ、いつもいつも俺の足許見やがって……！」

「……こんなヤツが紛れこむとは協会も人手不足は深刻と見る。己の罪を他人に責任転嫁とは……！」

別にギルド管理協会と仲が良いわけではないが、同じ公職である立場で不始末を起こす身内に手を焼くのはカリンに同情してしまう。真面目が行き過ぎてワーカーホリック気味に働く彼女がなんともいたたまれない。

取り敢えず、引っ張って取り調べはこれから……

「へ、へへへ……！」

「？ なにがおかしい？」

突然、ニヤニヤしだす男。

なにがおかしい？

「副団長サンよお、俺に構ってる暇あるのかよオ？」

「どういう意味だ？」

「師匠ならちゃんと弟子が粗相しないよう診ておかないと……うっかり、悪い奴に騙されちまうかもな？」



「情報によると、ここらへんらしいのですが…」

ペコリーヌ、ちゃんと情報あつてる？

カリバーはクエスト用紙に記載された地図とにらめっこしながら歩く彼女の案内に不安を覚えつつあつた。おっかなびつくりで進んできた道だが、景色は広葉樹が生い茂る雑木林といった具合で飛竜が生息するにしては些かスケールが小さい。出てきたとしても、せいぜい猪か其処ら…多少なりとも魔物はいるかもしれないが。

本当にロックドレイクが『群れ』でこんな場所に？

「コツコロ、どう思う？」

「はい、ロックドレイクの生息域にしては環境が不適過ぎます。偶然にしては……」

ユウキも違和感を感じ、かなり警戒をしている様子。キヤルも周囲を見回し、何かないかと観察するがロックドレイクどころか動物の痕跡すらあまり見られない。

…そして、ルイスはある考えに至る。

『『からかわれた』…のかもな。支給品から色々とおかしなこと続きだ。クエストを紹介したあの管理協会のアンチャンに一杯くわされたとしたら？』

からかい？ いやまさか…と思う一行だが振り返ればおかしなトブルばかりのクエスト道中。クエストを紹介してくれたあの優しく生真面目そうな受付ボーイが自分たちをハメたとでも？ …なら、どうしてそんなことを？

嫌な空気になっていく中、それを止めようとしたのはペコリーヌ。
「やめましょう、ルイスくん！ 人を疑うのは良くないですよ！ 確
かな証拠は無いんですから！」

「いや、だけどなあ…」

確かに。…しかし、偶然では片付けにくい状況。

そんな中、ユウキはカリバーを見ながらボソリと一言。

「からかわれた……程度で済めば良いがな。」

「？」

どういことだ？

聞き返そうとした矢先、キャルが何かを見つけたようだった。

「ねえ、こっちは開けてるわよ！」

彼女が指差す先、確かに木々が折られて枝や草木が切りはらわれて
道のようなって直線に続いている。自然なものじゃない、明らかに人
為的に通りやすいように手入れされて…まだ新しい小枝の切り口の
様子から見るにそんなに時間は経っていない。

それに地面には…

「足跡に…轍（わだち）？」

カリバーは膝を折って確認する…枯れ葉と土の潰れ方と凹み方か
らして複数人分かとおぼしきの足跡。あと2本の綺麗な線が伸びて
いる轍は…荷車か？

何かを運んでいたらしい。指先を余裕で突っ込める轍の深さから
してそれなりに重い物であったことは察せられる。こんな道から外
れた場所に何を運んできたかは皆目検討がつかないが…

「……調べてみるか。」

取り敢えず、轍と足跡を追ってみよう。そうすれば、きっと何かわ
かるはず……

「…」

…わかりたくなかった。

少し進んだ先：美食殿一行が見たのはあまりにも凄惨な光景だった。荷車は確かにあった。あったのだが……

「む、酷い……」

思わず口から洩れたコツコロ。荷車の荷台に乗せられた強烈な腐敗臭を放つそれは間違いなく『ロツクドレイクだったもの』だった。息絶えたその骸は見るも無惨で、鱗や羽毛に爪などは乱雑に剥ぎ取られ、目があるべき場所にはぼつかりと黒い穴。つけられた傷口には蟲が集っている。

野生の生物の仕業じゃない……ペコリーヌはすぐに気がつく。

「密猟……」

金銭的価値がある部位が失われ、こんな乱雑な死骸の放置……密猟者の仕業だろう。そして、この現場に自分たちがやってきてしまった……いや、むしろ誘導されたような……

「こんなクエストさっさと放棄してさっさとランドソルに……!」

即座に踵をかえそうとするキャル……はしゃいでいたのは何処の誰だったか。しかし、何かを察したのか隣りにいたユウキの表情は険しい。

「………どうやら遅かったらしい。」

え？ 一行が戸惑うより先に地面にドスツと矢が突き刺さり、そこからモクモクと煙がたちはじめる。慌て離れようとするも、次々と新しい矢が逃げ道を遮るように次々と刺さり一行を阻む。

そして、驚いた煙を吸い込んでしまい身体の痺れ意識が朦朧として

……

「クソ、毒か!? 皆、息……を……」

カリバーが最初に膝をつき、次にペコリーヌとコッコロ…キヤルの順に倒れる。ルイスも変身して対処しようとしたがライドブツクを取り落とし、彼もまた失神してしまう。
どうしてこんなことに……

意識を失う直前にカリバーが目にしたのはエルフ耳の金髪少女の影と…迫りくる見覚えがある騎士甲冑の集団だった。

★ ★ ★ ★ ★

『おい、……い…おい!!』

——スパンツ!!

「ぐふっ!？」

痛ッ?!?

誰だ、頭叩いたの?キヤルちゃんとかそんな次元じゃないパワーだったんだけど…ん?何か目の前に見覚えがある黒い怪人…:怪人!?

「で、デザス…ッ?!？」

『おい、少し黙ってろ。俺だ。』

「スピリット」

デザストがなんで…と言い終わるより先に彼は人間の姿に擬態…なんだろうか、とにかく変身してみせた。その姿は見知った顔…ユウキだった。

…え? どういうことなの……

「バラすつもりは無かったが、まあ仕方あるまい。今は緊急事態だ。俺達以外のメンバーが王宮騎士団につかまった。」

「……………は？（困惑） ……はア!?（理解）」

なんで僕の職場が出てくるわけ？なんで捕まるとかそんな話が沸いてくるとか意味不明にも程があるんだが？ ペコリーヌ捕縛イベントって原作（ゲーム）でも後のほうじゃ… いや、他のメンバーまで捕まるのっておかしいだろ？

「どういうことだ?」

「こつちが訊きたい。王宮騎士団ならお前何か知らないのか?」

「知るわけないだろ!」

「……………チツ」

舌打ちしやがったなコイツ!?

いや、落ち着け。何があつたか思い出せ…

雑木林でロツクドレイクの死骸を見つけて…毒ガスを仕込まれた矢で気を失った。あの時、王宮騎士団の団員のような影とエルフ族が…確か金髪で弓を持った…

（金髪で弓を持ったエルフ…? 森の中で?）

あれ、何か覚えがあるぞ。この条件をドンピシャする奴いたよな確か…コミュニケーションに難ありの… 待った、確か『彼女』って森を守るレンジャーの役割で鉢合わせたのが密猟の現場だとしたら…

「…あー、嫌な予感。」

「?」

「動くな、『密猟者』!!」

やっぱり（諦観）

なんでだろうか、僕の原作キャラとのエンカウントが割と最悪
なりがちなのは……

立ちはだかるエルフの少女……その名前と顔には覚えがある。

「…………アオイか。」